

41843

教科書文庫

4
810
41-1927
2000302694

Kodak Gray Scale



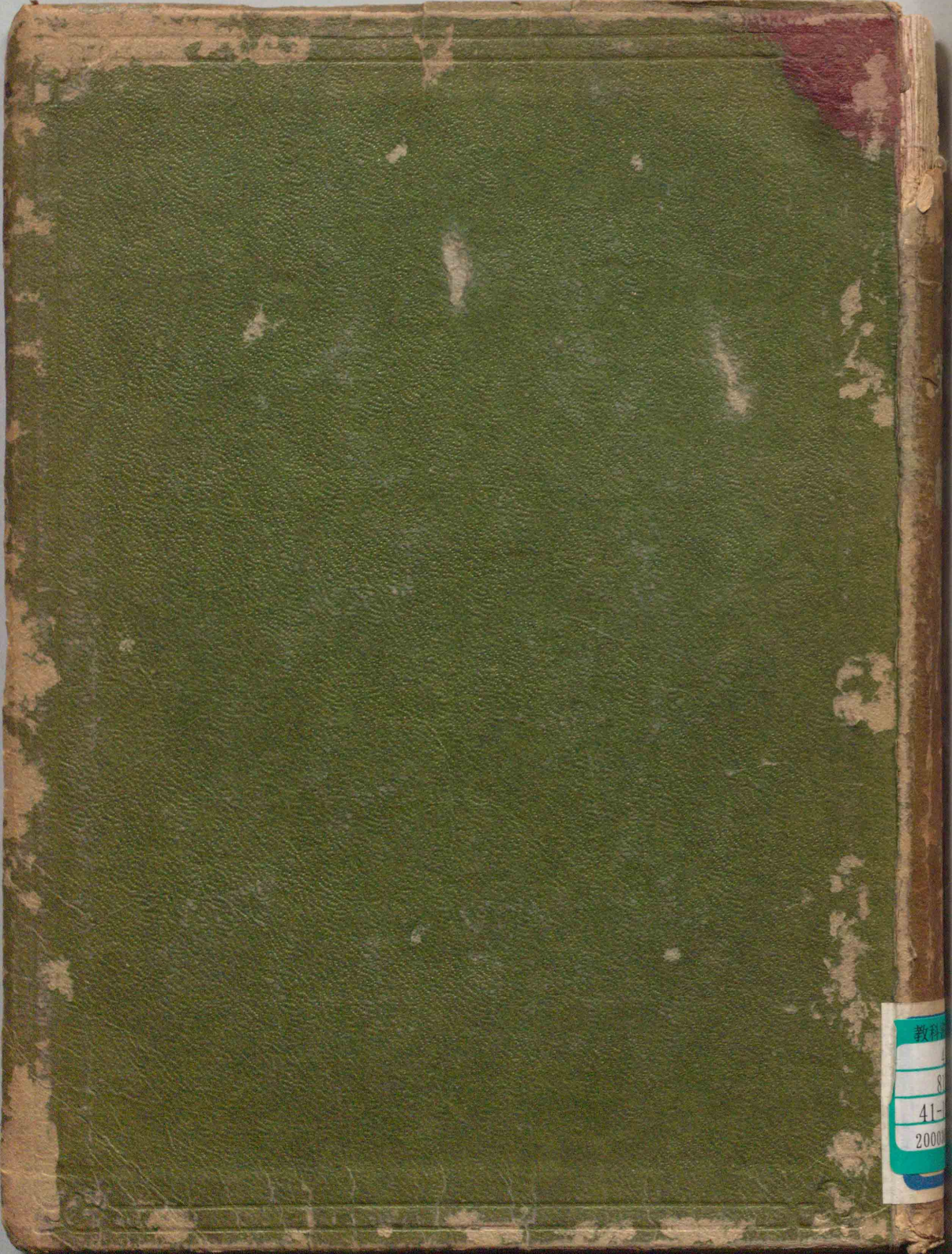
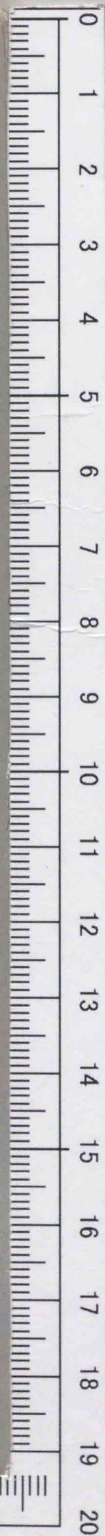
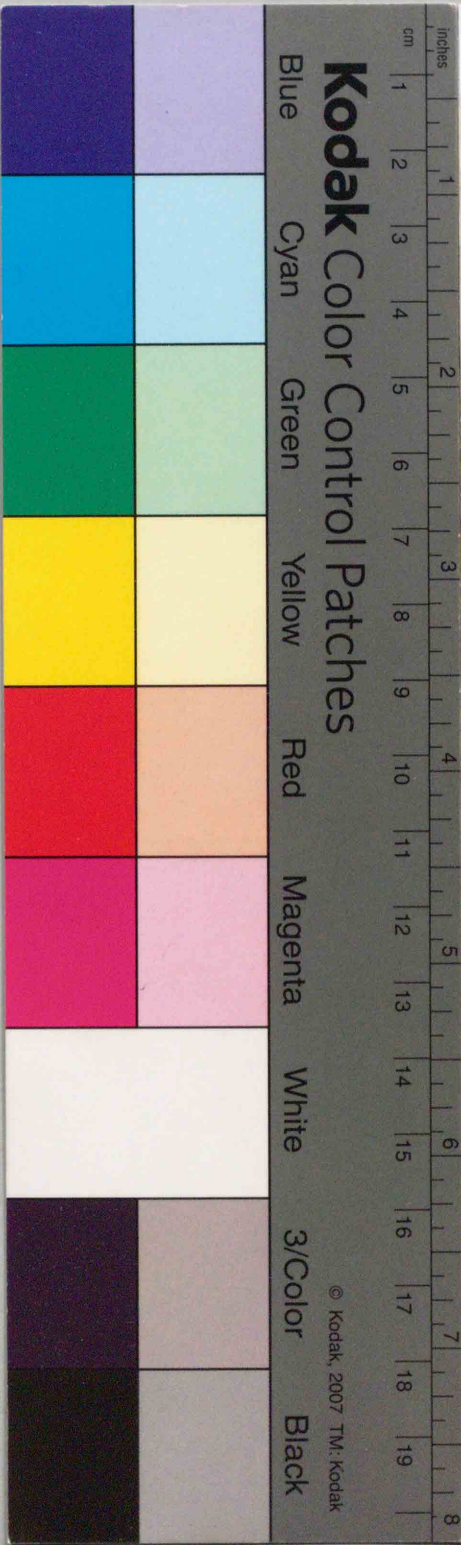
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
810
41-1927
2000302694



資料室

教科書文庫
4
810
41-1927
2000302694

美濃火曜
多入課
昭和



375.9
K49

中央図書館

中央図書館

広島大学図書

~~0130449255~~



日四十月二年二和昭

濟定檢省部文

用科語國校學中

國
文
新
編
卷
四

東京高等師範學校教授垣内松三編

(第四學年用)

広島大学図書

2000302694



社會式株

田神・院書治明・京東



一 縦に學年を貫き横に學期に互りて特に全篇の組織に留意せり。

一 教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。

一 原作の更改は教科書としての用意に出づ原作者の諒恕を乞ふ。

目次

一	阿部次郎	讀書の意義	六
二	芥川龍之介	漱石山房の秋	一六
三	夏目漱石	保津川下り	三三
四	鴨長明	日野山の奥	四一
五	永井荷風	觀潮樓	四七
六	荻原井泉水	旅人芭蕉	四九
七	幸田露伴	蒲生氏郷	五三
八	(太平記)	最後の参内	五九
九	(平家物語)	丹波少將	六九
一〇	(平家物語)	有王島下り	七四

一一	(増鏡)	おどろのした	八二
一二	菊池寛	名君	九二
一三	土井晩翠	萬里の長城の歌	一〇一
一四	和辻哲郎	樹の根	一〇八
一五	本居宣長	玉かつま	一一九
一六		小品三章	一二四
	中島廣足	夜學	一二四
	石川依平	蟲の音	一二五
	伴蒿蹊	うけえたる所	一二五
一七	貝原益軒	青葉のながめ	一二九
一八	松平定信	四季の雨	一三一
一九	吉田兼好	徒然草八題	一三二

二〇	相馬御風	徒然草の著者	一四
二一	奥田正造	茶道の精神	一五
二二	齋藤茂吉	實朝の歌	一六
二三	志賀直哉	城の崎にて	一七
二四	姉崎嘲風	光あれ	一八
二五	大西 祝	俚諺論	一九
二六	木村莊八	ロダン	二〇
二七	田中義成	北畠親房	二一
二八	芳賀矢一	月雪花	二二
二九	吉村冬彦	花 火	二三
三〇	(狂言記)	萩大名	二四

三一	矢野文雄	川柳點	二五
三二	北原白秋	落葉松	二六
三三	上 田 敏	詩文の格調	二七
三四	(謠 曲)	鉢 木	二八
三五	高山樗牛	世界の四聖	二九
三六	徳富蘇峯	大死一番	三〇
三七	小林一茶	あらが春	三一
三八	森 鴨外	寒山拾得	三二
三九	山本有三	生命の冠	三三
四〇	西田幾多郎	知と愛	三四
附録		語彙	

一 讀書の意義

阿部次郎

世の中には、極めて平凡で陳腐な問題で、而も時々振返つて之を考へ直して置かなければならない性質のものがある。讀書の意義といふやうなことも、世人の多數にとつては、恐らくこの類の問題の一つである。讀書は誰でもすることであるが、大多數の人はその意義と利弊とを考へてゐない。併し文化の進歩に伴つて、讀書慾が急速に増加するにつれ、又讀書の態度が眞劍の度を加へるにつれて、この問題をはつきり考へて置く必要は益々加つて来る。

讀書は體驗を豫想する。自ら眞劍に生活し、眞劍に思索してゐる人にとつてのみ、讀書は効果がある。讀書は吾々の思索と體驗とを補ふことは出来るが、之に代ることは出来ない。讀書の意義

を考へる時、吾々は第一にこの事を記憶して置かなければならぬ。

若し人が一冊の書でも之を本當に理解しようと思ふならば、唯之に嚙り附いたり、之と睨めつくらをしたりしてゐるべきではない。假令その人が之を讀返し又讀返して、一生その書を手から離さないにしても、若しその書の根本問題を自己の問題とすることを知らず、その書の背景になつてゐる人生の體驗を自ら體驗することを知らず、又著者の思索の努力を自己の中に繰返すことを知らないならば、唯小僧のお經を誦む時のやうに、その書を暗誦するのみで、その人の生活は、これによつて豊富にも力強くも高くもならないであらう。寧ろ無用の記憶は彼の頭腦を硬くして、讀書は平生の馬鹿を一層馬鹿にするに過ぎないであらう。讀書の意義を考へる者は、先づその價値の限界を考へなけ



作者作跋を
自己の體驗する

ればならない。吾々にとつて最上の意義を持つてゐるのは生活であつて、決して讀書ではない。此の間の關係を轉倒して、讀書に無條件の價値を置くのは、寧ろ讀書からその正當な價値を奪ふ所以に過ぎないのである。

この事は理化の書にも、家政の書にも、料理の書にも、等しく適用される。自然現象に對する觀察と實驗、家庭の實際生活に於ける苦心と活用、臺所に於ける調理と食卓に於ける玩味、かういふやうなことを始終念頭に置きながら、書物に書いてあることを確めたり、批評したり、訂正したり、運用したりしないならば、讀書は唯暇つぶしの道樂になつて了つて、その知識はいつまでも本當に自分のものとなることがないであらう。就中、自分の生活と體驗とに照らして、根柢から之を吟味する心掛の特に必要なのは、哲學や文藝に關する書である。かう云ふ種類の文獻の中に取

此の書は、
哲學、文藝、
の文獻の中に取

併し充分に理
解するに
必要なり
なり

扱はれてゐるのは、無形の眞理か、人心の機微かである。この場合には、吾々は理化や料理の書の場合のやうに、之を實驗に徴すべき有形な物を持つてゐない。時代の推移や人間の心理は、社會現象の考察や他人の喜怒哀樂の表情の觀察に徴して、書物に書いてあることの眞偽を判斷することが出来るのは勿論であるが、この場合、その根據になつてゐる社會現象の意味、他人の表情の意味は、結局自分自身の内面的體驗を基礎としなければ解釋の出来ない筈のものである。随つて吾々は、唯深く自分の内面を省ることによつて書かれてあることの眞偽を判定するより外はないのである。平生自ら體驗を深める努力もせず、自ら思索し、自ら内省する習慣をも作つて置かない者は、書を讀んでも、本當の意味を理解することが出来ず、唯徒らに之を記憶するか、若しくは盲目的に之を信仰するかに過ぎないであらう。併し充分に理

12. 八月 7
TAMARU

解されぬ記憶の集積と、腹の底から得心の行かぬ盲目的な信仰とは、吾々の生の流動を妨げる石塊のやうなものである。之を持つことが多ければ多い程、吾々の生活は却つて之がために壅塞されるのである。

吾々の生活の發展の最初の地盤となり、吾々の思索の第一の出発点となるものは何であるか。それは吾々自身の體驗である。吾々自身の體驗の外には何もものもあることを得ない。吾々の最初の體驗は固より完全なものではないが、その中に隠れてゐるものを明るみにひき出し、その中に潜んでゐる矛盾と戦を重ね、その中に具つてゐる内面的傾向を次第に押進めることによつて、吾々の生活は始めて發展し、吾々の思索は初めて眞理に接近する。若し吾々が、吾々の生活に關する眞理の標準を、例へば物理學に於けるが如く、自己以外に固定した尺度に求めるならば、吾

吾はいつまでたつてもそんなものを發見することが出来ないであらう。吾々は永遠にたゞ與へられたものを盲信するか、若しくは永遠に懷疑の淵に沈んでゐなければならぬであらう。輕信と懷疑とは雙生兒である。無きものを有ると考へるのは輕信である。眞理を求めるのに、最初からそれが無いときまつてゐる方面を捜し廻つて、永久に無い無いと云つて騒ぎ立てるのは懷疑である。幻の上にその思想の根柢を築かうとしてゐる點に於ては、兩者共に同様である。生活に於ても、思索に於ても、假初にも堅實な歩を始めようとするならば、吾々は自分の體驗を信じて之を學び知らなければならぬ。讀書の價値も亦この信念の上に立つて、始めて發揮されるのである。

この信念を基礎としない時、讀書は吾々にどのやうな弊害を與へるであらうか。第一にそれは善惡美醜正邪に對する純朴な

本能を紊して、之を混亂させ、之を癱痺させる。全然文字を知らぬ田夫野人が、半可通の讀書子よりも人情の美醜を解し、善惡正邪に對して彼等一流の判斷を持つてゐるのは、彼等が兎に角讀書によつて迷はされない本能を持續けてゐるからである。第二に體驗の根柢を缺いてゐる讀書は、吾々の思考力を薄弱にする。吾は雜多な意見を聞きかじることによつて、自分自身の判斷が無い人間にされて了ふ。さうして第三に、吾々は前に云つたやうな種々の理由によつて、結局吾々の生活そのものの統一を奪はれ、生活そのものの力を失ふやうな恐ろしい破目に陥る。吾々の生活には、踏みしめるべき大地もなく、歩み出すべき出發點もないものとなつて了ふ。この點に於て、誤れる讀書によつて、今日の生活が如何に損はれてゐるか、他人事ならぬ吾々自身の問題として、吾々は深く省る所がなければならぬ。吾々は農夫や職工

の無學を嘲る前に、先づ多少の學問によつて、却つて自分自身が馬鹿になつてゐるやうなことがないかと云ふことを考へて見る必要がある。生活の狭いことは決して喜ぶべきことではないが、狭くても自分の生活を持つてゐるものは、凡そ自分の生活を持つてゐないものよりも遙かに優つてゐる。

併し、粗野から産れたものよりも、教養ある敏感から生れたものの方がよいことは云ふまでもない。無知は吾々の生活を狭くし、吾々の思想を偏らしめ、吾々と他人との交通を困難なものにする。吾々が最高の度まで吾々の中に潜んでゐる力を發揮しようとするならば、他人の體驗を通して、自分の局限された一生の中に觸れ得ないやうな體驗をも味ひ、他人の思索によつて、自分の思想を豊富にし、かくて一人の生涯の中に千萬人の生涯を攝取することを心掛けなければならぬ。決して自分自身の中に

のみ閉籠るべきではない。茲に於て讀書の意義は甚だ重大となる。書を讀むと讀まぬとは、第一義に於て人間の價値を左右するものではないが、それは深く人間の價値と關係して、その向上を大いに助ける。正しい道さへ踏外さないならば、書物は讀めば讀むほどよいものである。さうして讀まなければ讀まないほど悪いものである。

たゞ讀書の意義は吾々の體驗を基礎としてのみ成立つものであるとすれば、どんな良書も此方の體驗が足りないかぎり、十分に理解することが出来ないのは止むを得ない。特に偉人がその一生の體驗と思索とを籠めたやうな大作になると、それは吾々の體驗と思索とが大きくなればなるほど、何處までも益、大きく見えるであらう。幾度讀みかへしても、常に新しい味を吾々に味はせるであらう。この意味に於て、吾々が本當に良書を理解し

ようと思ふならば、吾々は先づ自分自身の生活を大きくしなければならぬ。吾々が全力を盡くして考へたり、味つたりしても、とても理解し得ないやうな書に遭遇したならば、吾々は暫くその書を離れて直接の人生に歸つて行くがよい。さうして其處で得たものを携へて、適當の時期を見計つて再び書物に歸るがよい。その時吾々が直接の人生から携へて來たものは、その書物を理解するために大いに裨益することがあるであらう。自己の成熟を待たずに無闇に之にかじり附くのは極めて愚策である。自然科學の知識の根源が自然にあるやうに、人間智の根源は凡て直接の人生にあることを忘れてはならない。

書を讀むとは心を讀むのである。自己の心を讀むことを知らぬものが、どうして他人の心を讀むことが出來よう。(人格主義)

芥川龍之介
文學者。東京
帝國大學文科
大學出身。

二 漱石山房の秋

芥川龍之介

夜寒の細い往來を爪先上りに上つて行くと、古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電燈がともつてゐるが、柱に掲げた標札の如きは、殆ど有無さへも判然しない。門をくゞると、砂利が敷いてあつた。その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々として亂れてゐる。砂利と落葉とを踏んで立關へ來ると、これも亦古ぼけた格子戸の外は、壁といはず壁板といはず、悉く蔦に蔽はれてゐる。だから案内を乞はうと思つたら、まづその蔦の枯葉をがさつかせて、呼鈴の鈕を探さねばならぬ。やつと呼鈴を押すと、明りのさしてゐる障子が開いて、束髪にゆつた女中が一人すぐに格子戸の掛金を外してくれる。狭い三疊の立關には、泰山の金剛經の石刷を貼つた二枚折の屏風が立つてゐる。此處に帽子や外套がなか

つたら、まづ先客はゐないものと思つて差支ない。

立關から右手の廊下へ出ると、唐めいた欄干の



夏目漱石とその書齋

續いた外には、もう秋風に裂けた芭蕉の葉が、婆娑と星月夜の空を拂つてゐる。晝見ると、その芭蕉の下には霜にめげない木賊の色が一面に庭を埋めてゐるが、客間の硝子戸を洩れる電燈の光も、今はそこまでは照らしてゐない。いや、その光がさしてゐるだけに、向の軒先に吊した風鐸の影も、却つて濃くなつた宵闇の中に隠されて

ゐる位である。

津田青楓
西洋畫家。漱
石と親交あり
し人。

藏澤
伊豫松山の畫
家。
黃興
中華民國の政
治家。
木庵
歸化僧。黃蘗
宗の高僧。

吳昌碩
支那現代の畫
家。
安井曾太郎
西洋畫家。
齋藤與里
西洋畫家。
明月禪師
伊豫松山の
僧。

硝子から客間を覗いて見ると、雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙貼の天井に斑々とまだ残つてゐるが、十疊の座敷には、赤い五羽鶴の氈が敷いてあるから、疊の古びだけは分明でない。この客間の西側(玄關寄り)には、更紗の唐紙が二枚あつて、その一枚の上に古色を帯びた壁懸が一つ下つてゐる。麻の地に黄色い百合のやうな花を繡つたのは、津田青楓氏か誰かの圖案らしい。この唐紙の左右の壁際には、餘り上等でない硝子戸の本箱があつて、その幾段かの棚には、透間もなくぎつしりと洋書が詰つてゐる。それから廊下に接した南側には、殺風景な鐵格子の西洋窓の前に大きな紫檀の机を据ゑて、その上に硯や筆立が法帖などと一緒には存外儀よく並べてある。その窓を餘した南側の壁と向の北側の壁とは、殆ど軸の掛つてゐなかつたことがない。藏澤の墨竹が黃興の「文章千古事」と挨拶をしてゐることもあり、木

庵の「芳開萬國春」が吳昌碩の木蓮と鉢合せをしてゐることもあつて、客間を飾つてゐる書畫は獨りこれらの軸ばかりではない。西側の壁には安井曾太郎氏の油繪の風景畫が、東側の壁には齋藤與里氏の油繪の草花が、さうして又北側の壁には明月禪師の無絃琴といふ草書の横物が、いづれも額になつて掛つてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶に梅もどきか、或は青磁に菊の花が、その時々で投込んであるのは、無論奥さんの風流に相違あるまい。

もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に次の間へ轉じなければならぬ。次の間といつても、客間の東側には、唐紙も何もないのだから、實は一つ座敷も同じことである。唯此處は板敷で、中央に擴げた方一間あまりの古絨毯の外には、一枚の疊も敷いてはない。さうして東と北と三方の壁には、新古和漢洋の

書物を詰めた、無暗に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれでも詰り切らないのか、ぢかに下の床の上へ積んである數も少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸だの、法帖だの、畫集だのが雜然と堆く盛りあがつてゐる。だから、中央に敷いた古絨毯も、四方に並べてある書物のおかげで、派手である筈の赤い色が僅ばかりしか見えてゐない。而もその眞中には小さな紫檀の机があつて、その机の向には座蒲團が二枚重ねてある。銅印が一つ、石印が二つ三つ、ペン皿に代へた竹の茶筥、その中の萬年筆、それから玉の文鎮を置いた一綴の原稿用紙——机の上にはこの外に老眼鏡が載せてあることも珍らしくはない。その眞上には電燈が煌々と光を放つてゐる。傍には瀬戸火鉢の鐵瓶が蟲の啼くやうに沸つてゐる。もし夜寒が甚だしければ、少し離れた瓦斯暖爐にも赤々と火が動いてゐる。さうしてその机の後、二枚

重ねた座蒲團の上には、殆ど獅子を想はせるやうな背の低い半白の老人が、或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本の詩集を翻したりしながら、端然と一人坐つてゐる。

漱石山房の秋の夜は、かういふ蕭條たるものであつた。(點心)

無題

漱石

日似三春永

心隨野水空

牀頭花一片

閑落小眠中

竹裏清風起

石頭白暈生

幽人無一事

好句嗒然來

保津川

京都府にある
大堰川上流の

稱。

夏目漱石

名は金之助。

文學博士。大

正五年歿、年

五十。

嵯峨

京都府葛野

郡。

龜岡

京都府南桑田

郡。

三 保津川下り

夏目漱石

浮かれ人を花に送る京の汽車は、嵯峨より二條に引返す。引返さぬは、山を貫いて丹波に抜ける。二人は丹波行の切符を買つて、龜岡に降りた。保津川の急湍は此の驛より下る掟である。下るべき水は眼の前にまだ緩く流れて、碧油の趣をなす。岸は開いて、里の子の摘む土筆も生える。舟子は舟を渚に寄せて客を待つ。

「妙な舟だな」と宗近君が云ふ。底は一枚板の平かに、舷は尺と水を離れぬ。赤い毛布に煙草盆を轉がして、二人はよき程の間隔に座を占める。

「左へ寄つて居やはつたら、大丈夫どす。波はかゝりまへん」と船頭が云ふ。船頭の數は四人である。眞先なるは二間の竹竿、續く二人は右側に權、左に立つは同じく竿である。

ぎい〜と權が鳴る。荒削りに平げたる櫂の頸筋を太い藤蔓に捲いて、餘る一尺に丸味を持たせたのは、兩の手にむんづと握る便りである。握る手の節の隆きは眞黒きは、松の小枝に青筋を立ててうんと搔く力の脈を通はせた様に見える。藤蔓に頸根を抑へられた權が、搔く毎に撓りでもする事か、強き頂を眞直に立てた儘、藤蔓と擦れ、舷と擦れる。權は一搔毎にぎい〜と鳴る。

舟は二三度うねりを打つて、音なき水を、停る暇なきに、前へ前へと送る。重なる水の盛つて行く頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼りたる水は已むなく山と山の間に入る。帽に照る日の忽ちに影を失ふかと思へば、舟は早くも山峽に入る。保津の瀬は是からである。

「愈、來たぜ」と宗近君は船頭の體を透かして、岩と岩の逼る間を半町の向に見る。水はどうと鳴る。

夢窓國師
疎石と稱す。
禪宗の高僧。
二〇一六

「成程」と甲野さんが舷から首を出した時、船ははや瀬の中に滑り込んだ。右側の二人はすはと波を切る手を緩める。權は流れて舷に着く。舳に立つは竿を横たへた儘である。傾いて矢の如く下る船は、ど、どと刻み足に、船底に据ゑた尻に響く。壊れるなと氣が附いた時は、もう走る瀬を脱け出してゐた。

「あれだ」と宗近君が指さす後を見ると、白い泡が一町ばかり逆落しに噛合つて谷を洩れる微かな日影を萬顆の珠と我がちにな奪ひ合つてゐる。

「壯なものだ」と宗近君は大いに御意に入つた。

「夢窓國師とどつちがい。」

「夢窓國師より此方の方がえらい様だ。」

船頭は至極冷淡である。松を抱く巖の落ちんとして落ちざるを苦にせぬ様に、權を動かして來り、棹を操り去る。通る瀬は様々に

廻る。廻る毎に新なる山は當面に躍り出す。石山、松山、雜木山と數ふる遑を行客に許さざる疾き流は、船を驅つて又奔湍に躍り込む。

大きな圓い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸身に撃附けて散る水沫を、春寒く腰から浴びて、緑崩るゝ真中に舟こそ來れと待つ。舟は矢も楯も物かは。一途に此の大岩を目懸けて突きかゝる。渦捲いて去る水の、岩に裂かれたる向は見えず。削られて坂と落つる川底の深さは幾段か。乗る人のこなたよりは不可思議の波の行末である。岩に突當つて碎けるか。捲込まれて見えぬ彼方に、どつと落ちて行くか。——舟は只まともに進む。

「當るぜ」と宗近君が腰を浮かした時、紫の大岩ははやくも船頭の黒い頭を壓して突つ立つた。船頭は「うん」と舳に氣合を入れた。舟は碎ける程の勢に、波を呑む岩の太腹に潜り込む。横たへた竿

は取直されて、肩より高く兩の手が揚ると共に、舟はぐうと廻つた。此の獸めと突離す竿の先から、岩の裾を尺も餘さず斜に滑つて、舟は向へ落出した。

「どうしても夢窓國師より上等だ。」と、宗近君は落ちながら云ふ。

急灘を落盡くすと、向から空舟が上つてくる。竿も使はねば、權は無論の事である。岩角に突つ張つた懸命の拳を收めて、肩から斜に目暗縞を掠めた細引繩に、長々と谷間傳ひを根限り戻り舟を牽いて來る。水行く外に、尺寸の餘地だに見出し難き岸邊を、石に飛び、岩に這うて、穿く草鞋の滅り込む迄腰を前に折る。だらりと下げた



保津川

兩の手は、塞かれて注ぐ渦の中に指先を浸すばかりである。うんと踏ん張る幾世の金剛力に、岩は自然と擦滅つて、引懸けて行く足の裏を、安々と受ける段々もある。長い竹を此處彼處と岩の上に渡したのは、牽綱をわが勢に逆らはぬ程に疾く滑らすための策と云ふ。

「少しは穩かになつたね。」と、甲野さんは左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ切つ立つた山の遙かの上に、鉦の音が丁々とする。黒い影は空高く動く。

「丸で猿だ。」と、宗近君は咽喉佛を突出して峯を見上げた。

「慣れると何でもするもんだね。」と、相手も手を翳して見る。

「あれで一日働いて幾らになるんだらう。」

「幾らになるかな。」

「下から聞いて見ようか。」

「此の流は餘り急過ぎる。少しも餘裕がない。のべつに駛つてゐる。所々にかう云ふ場所がないと、やはりいかんね。」

「おれは、もつと駛りたい。どうも、さつきの岩の腹を突いて曲つた時なんか、實に愉快だつた。願はくは船頭の棹を借りて、おれが船を廻したかつた。」

「君が廻せば、今頃は御互に成佛してゐる時分だ。」

「なに愉快だ。京人形を見てゐるより愉快ぢやないか。」

「自然は皆第一義で活動してゐるからな。」

「すると自然は人間の御手本だね。」

「なに、人間が自然の御手本さ。」

「それぢや、やつぱり京人形黨だね。」

「京人形はいゝよ。あれは自然に近い。ある意味に於て第一義だ。困るのは……」

「困るのは何だ。」

「大抵困るぢやないか。」と、甲野さんは打遣つた。

「さう困つた日にや、方が附かない。御手本が無くなる譯だ。」

「瀨を下つて愉快だと云ふのは、御手本があるからさ。」

「おれにかい。」

「さうさ。」

「すると、おれは第一義の人物だね。」

「瀨を下つてゐるうちは、第一義さ。」

「下つて仕舞へば凡人か、おや。」

「自然が人間を翻譯する前に、人間が自然を翻譯するから、御手本はやつぱり人間にあるのさ。瀨を下つて壯快なのは、君の腹にある壯快が第一義に活動して自然に乘移るのだよ。それが第一義の翻譯で、第一義の解釋だ。」

老子
周の賢人。道
家の祖。

「肝膽相照らすと云ふのは、御互に第一義が活動するからだらう。」

「まづそんなものに違ない。」

「君に肝膽相照らす場合があるかい。甲野さんは默然として舟の底を見詰めた。言ふ者は知らずと、昔老子が説いた事がある。」

「は、は、は、僕は保津川と肝膽相照らした譯だ、愉快々々。」と宗近君は二たび三たび手を敲く。

亂れ起る岩石を左右に縈る流は、抱くが如く、そと割れて、半ば碧を透明に含む光琳波が、早蕨に似たる曲線を描いて、巖角をゆるりと越す。河は漸く京に近くなつた。

「その鼻を廻ると嵐山どす。」と、長い棹を舷のうちへ挿込んだ船頭が云ふ。鳴る櫂に送られて、深い淵を滑る様に脱け出すと、左右の岩が自ら開いて、舟は大悲閣の下に着いた。(虞美人草)

四 日野山の奥

鴨 長 明

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭をいとなむが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、また百分が一にだにも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々にかたぶき。住家は折々に狭し。その家のさま世の常ならず。廣さはわづかに方丈。高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛がねをかけた。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さむが爲なり。その改め造る時、幾ばくの煩かある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、さらに他の用途いらず。

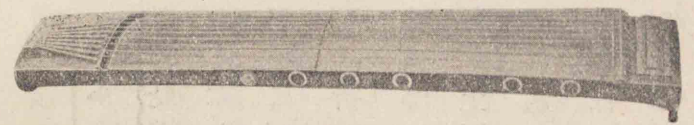
いま日野山の奥に迹をかくして、後、南に假の日がくしをさし

日野山
京都府宇治
鴨長明
山城國加茂社
の氏人。和歌
管絃をよみ
し。後鳥羽院
に寵せられて
和歌所寄人と
なる。後、龜
鬚して連胤と
改名し、洛外
の山中に遁世
す。

往生要集
六卷。源信僧
都の著。淨土
念佛に歸依す
べきことを勸
めたるもの。

普賢
菩薩の名。釋
迦佛の右の脇
士。

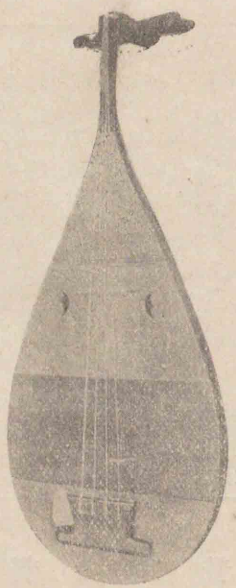
出して、竹の簀子を敷き、その西に關伽棚を作り、うちには西の垣



のありさまかくのごとし。

に沿へて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受け
て眉間の光とす。かの帳の扉に、普賢ならびに不動の
像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚をかまへて、
黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌管絃往生要集
ごときの抄物を入れたり。かたはらに箏琵琶のお
の一張を立つ。いはゆる折箏つぎ琵琶これなり。東に
そへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床
とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕
のかたに炭櫃あり。これを柴折りくぶるよすがとす。
庵の北に少地を占めて、あばらなる姫垣をかこひて
園とす。すなはちもろくの薬草を植ゑたり。假の庵

その處のさまをいはば、南に筧あり。岩をたゝみて水を溜めた
り。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正
木のかづら迹をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のた
より無きにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲のごとくして西の



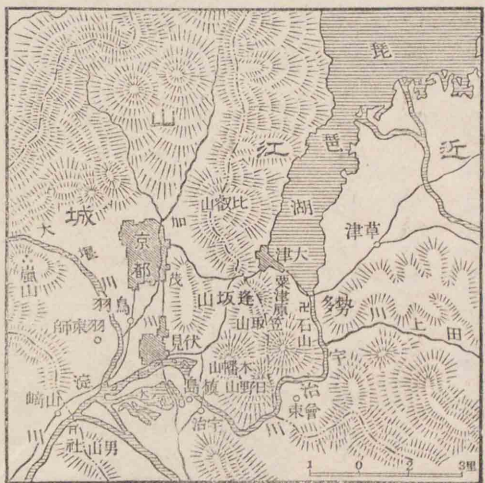
方にほふ。夏は時鳥を
聽く。かたらふごとに死
出の山路をちぎる。秋は
蜩の聲耳に滿てり。空蟬

の世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま
罪障に喩へつべし。

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづ
から怠るに妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言
をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。かならず禁戒を

迹のしら波
 世の中を何に
 たとへむあさ
 ぼらけこぎゆ
 く舟のあとの
 白浪。(拾遺
 集)
 岡の屋
 京都府紀伊
 郡。
 淨陽の江
 淨陽江頭夜
 送客、楓葉荻
 花秋瑟々。白
 樂天の琵琶
 行)
 源都督
 桂大納言源經
 信。琵琶の名
 手。(一六七六
 一七五七)
 秋風・流泉
 ともに琵琶の
 曲名。

木幡山・伏見・鳥
 羽
 京都府紀伊
 郡。
 羽束師
 京都府乙訓
 郡。
 炭山・笠取
 京都府宇治
 郡。
 岩間
 滋賀縣滋賀郡
 正法寺の觀
 音。
 石山
 同縣同郡石山
 寺の觀音。
 蟬丸
 平安朝初期の
 歌人。
 猿丸太夫
 平安朝初期の
 歌人。



守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らむ。もし
 迹のしら波に身を寄するあしたには、岡の屋に行きかふ船をな
 がめて満沙彌が風情をぬすみ、
 もし桂の風葉をならす夕には、
 淨陽の江をおもひ遣りて源都
 督のながれをならふ。若しあま
 りの興ある時は、しばし松のひ
 びきに秋風の樂をたぐへ、水の
 音に流泉の曲をあやつる。藝は
 これ拙けれども、人の耳をよろ
 こばしめむにもあらず。ひとりしらべ、ひとり詠じて、みづから
 心を養ふばかりなり。
 また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る所なり。かし

こに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。若しつれづれなる時は、これ
 を友として遊びあり。かれは十六歳、われは六十。その齡ことの
 外なれど、心をなぐさむることは、これおなじ。或はつばなを抜き、
 岩なしを採る。又ぬかごをもち、芹を摘む。或はすそわの田居に至
 りて、落穂を拾ひてほぐみを作る。若し日うらゝかなれば、嶺に攀
 ぢのぼりて、はるかに故郷の空を望み、木幡山・伏見の里鳥羽・羽束
 師を見る。勝地は主なければ、心をなぐさむるにさはりなし。あゆ
 みわづらひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つゞき、炭山を越
 え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、石山を拜む。もしは又粟津の原を
 分けて蟬丸の翁が迹をとぶらひ、田上川を渡りて猿丸太夫が墓
 をたづね、かへるさには、をりにつけつゝ、櫻を狩り紅葉をもとめ、
 蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛にたてまつり、かつは家苞に
 す。もし夜靜かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうる

眞木の島
滋賀縣宇治
郡。

山鳥のほろく
と云々

山鳥のほろほ
ろとなく聲き
けば父かそぞ
思ふ母かそぞ
思ふ。(僧行
基 玉葉集)

峯のかせぎの云

山ふかみなる
るかせぎのけ
ちかきに世に
遠ざかるほど
ぞ知らる。(

西行法師、山
家集)

おそろしき山云

山深みけちが
き鳥の音はせ
で物おそろし
きふくるふの
聲。(西行法
師、山家集)

おそろしき山云
山深みけちが
き鳥の音はせ
で物おそろし
きふくるふの
聲。(西行法
師、山家集)

ほす。草むらの螢は遠く眞木の島のかゞり火にまがひ、曉の雨は
おのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろくくと鳴くを聞
きて、父か母かとうたがひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけ
ても、世に遠ざかるほどを知る。或は埋火を掻きおこして、老の寢
覺の友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけて
も、山中の景氣折につけて盡くることなし。況や深く思ひ、深く知
れらむ人のためには、これにしも限るべからず。

大かたこの處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今
すでに五とせを経たり。假の庵もや、古屋となりて、軒には朽葉
深く、土居に苔蒸せり。自ら事の便りに都を聞けば、この山に籠り
て後、やむごとなき人の崩れ給へるも、數多聞ゆ。まして、數ならぬ
たぐひ、盡くしてこれを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家、
又いくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。(方丈記)

永井荷風
名は壯吉。文
學者。東京外
國語學校に修
學。

五 觀潮樓

永井荷風

小石川春日町から柳町指ヶ谷町へかけての低地から、本郷の
高臺を見る處々には、電車の開通しない以前、即ち東京市の地勢
と風景とがまだ今日ほどに破壊されない頃には、樹や草の生ひ
茂つた崖が現れてゐた。根津の低地から彌生ヶ岡と千駄木の高
地を仰げば、こゝも亦絶壁である。絶壁の頂に沿うて、根津權現の
方から團子坂の上へと通ずる一條の路がある。私は東京中の往
來の中で、この道ほど興味ある處はないと思つてゐる。片側は樹
と竹藪に蔽はれて晝猶暗く、片側はわが歩む道さへ崩れ落ちは
せぬかと危まれるばかり、足下を覗くと、崖の中腹に生えた樹木
の梢を透して、谷底のやうな低い處にある人家の屋根が小さく
見える。されば向は一面に遮るものの無い大空、限もなく廣々と

ヴェルレエヌ

Verlaine
佛國の詩人。

森鷗外

名は林太郎。
文學博士。醫學博士。陸軍軍醫總監、帝國美術院長、東京帝室博物館長等に歴任。大正十一年歿、年六十一。

して、自由に浮雲の定めない行方をも見極められる。左手には上野谷中に連る森黒く、右手には東京の市街が一目に見晴され、其處より起る籟然たる巷の物音が距離のために和げられて、かのヴェルレエヌが詩に、

「かの平和なる物のひびきは街より來る……」
と云つたやうな心持を起させる。

當代の碩學森鷗外先生のお邸は、この道のあたり、團子坂の頂に出ようとする處にある。二階の欄干に佇むと、市中の屋根を越して、遙かに海が見えるとやら。その故に先生はこの樓を觀潮樓と名づけられたのだと、私は聞傳へてゐる。度々私はこの觀潮樓に於て、親しく先生に見ゆる光榮に接してゐるが、多くは夜になつてからの事なので、惜しいかな一度もまだ潮を觀るの機會がないのである。その代り、私は忘れられぬ程音色の深い上野の鐘

を聞いた事があつた。

日中はまだ残暑の去りやらぬ初秋の夕暮であつた。先生は大方向食事中でもあつたものか、私は取次の人に案内されたまゝ、暫くの間唯一人此の觀潮樓の階上に取殘された。樓はたしか八疊に六疊の間かと記憶してゐる。一間の床には何か謂れの有るらしい雷といふ一字を石摺にした大幅が掛けてあつて、其の下には古い支那の陶器と想像される大きな六角の花瓶が、花一輪挿してない爲に、却つてこの上もなく嚴格に、又冷靜に見えた。座敷中には、此の床の間の軸と花瓶の外は全く何一つ置いてないものである。額も無ければ置物も無い。怖るゝ四枚立の襖の明放してある次の間を窺ふと、中央に机が一脚置いてあつたが、それさへ云はば臺のやうなもので、一枚の板と四本の脚とがあるばかり、抽斗もなければ、彫刻の飾も何もない机で、その上には硯もイ

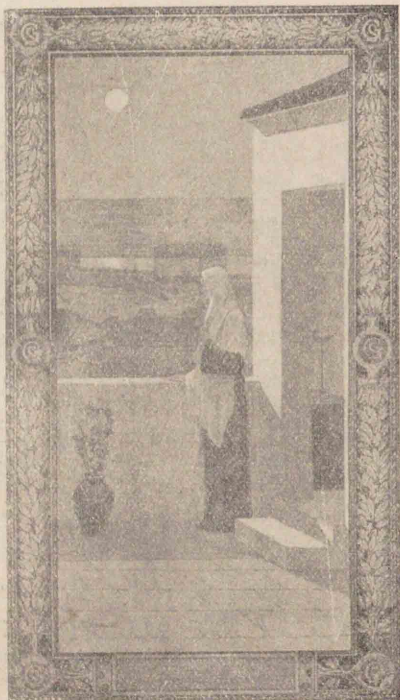
柵草紙
もと 鷗外博士
の主筆したる
文學雜誌。

ンキ壺も紙も筆も置いてはない。併しその後立てた六枚屏風の裾からは、紐で束ねた西洋の新聞か雑誌のやうなものの片端が見えたので、私はそつと首を延ばして差覗くと、いづれも大部のものと思はれる種々な洋書が、座敷の壁際に高く積重ねてあるらしい様子であつた。世間には往々讀まざる書物を殊更人の見る處に飾り立てて置く人さへあるのに、これは又何といふ一風變つた癩癖であらう。私は柵草紙以來の先生の文學とその性行について、何とはなく沈重に考へ始めようとした。恰もその時である。一際高く漂ひ來る木犀の匂と共に、上野の鐘聲は殘暑を拂ふ涼しい夕風に吹送られ、明放した觀潮樓上に唯一人、主人を待つ間の私を驚かしたのである。

私は音のする方を眺めた。千駄木の崖上から見る彼の廣漠たる市中の眺望は、今しも蒼然たる暮靄に包まれ、一面に烟り渡つ

シヤヴンヌ
佛國著名
の畫家。
Cavannes
ブ
ジエネヴィエ
の守護
神。
佛國巴里
の守護
神。
St. Genevieve
パンテオン
佛國の殊
勳者を祀
れる處。
Pantheon

た底から、數知れぬ燈火を輝かし、雲の如き上野谷中の森の上には、淡い黄昏の微光をば夢のやうに残してゐた。私はシヤヴンヌの描いた聖女ジエネヴィエが靜かに巴里の夜景を見下し



巴里の守護聖女ジエネヴィエ
(筆メンダヤシ)

てゐる彼のパン
テオンの壁畫の
神祕なる灰色の
色彩を思ひ出さ
れた。

鐘の音は長い
餘韻の後を追掛
け、撞出されるのである。その度毎に、其の響の湧出る森の影は暗くなり、低い市中の燈火は次第に光を増して、車馬の聲は嵐のやうに却つて高く、やがて鐘の音の最後の餘韻を消してしま

つた。私は茫然として再びがらんとして何物も置いてない観潮樓の内部を見廻した。そして此の何物もない樓上から此の市中の燈火を見下し、此の鐘聲と此の車馬の響とをかはるゝに聴澄ましながら、わが鷗外先生は靜かに書を読み、又筆を把られるかと思ふと、實に此の時ほど私は先生の風貌をば、ジャヴヌの壁畫中の人物同様、神祕に感じた事はなかつた。

ところが「やあ大變お待たせした。失敬々々。」と云つて、先生は書生のやうな態度で、二階の梯子段を上つて來られたのである。金巾の白い襦衣一枚、その下には赤い筋のはひつた軍服のズボンを穿いて居られたので、何の事はない、鷗外先生は日曜貸間の二階か何かで、ごろ／＼してゐる兵隊さんのやうに見えた。

「暑い時はこれに限る。一番涼しい。」と云ひながら、先生は女中の持運ぶ銀の皿を私の方に押出して、葉巻をすゝめられた。先生は

陸軍省の醫務局長室で私に對談せられる時にも、きまつて葉巻を勧められる。若し先生の生涯に聊かたりとも贅澤らしい事があるとするならば、それは此の葉巻だけであらう。

此の夕、私は親しくオイケンの哲學に關する先生の感想を伺つて、夜も九時過再び千駄木の崖道をば根津權現の方へ下り、不忍池の後を廻ると、こゝにも聳え立つ東照宮の裏手の一面の崖に、木の間の星を數へながら、やがて廣小路の電車に乗つた。

オイケン
Eucken
獨逸の哲
學者。

(荷風全集)

大理石の光

鷗外

スニオンの大理石は愈舊りて愈白きに、アクロボリスの大理石の歳を経たるは金光を放てり。この金光は石中に含める〇、一二二%の酸化鐵による。含水酸化鐵の褐色は石灰の雨に侵されて融けさりたる後に表るゝなり。(觀潮樓偶記より)

荻原井泉水
名は藤吉。東
京帝國大學文
科大學出身。

六 旅人芭蕉

荻原井泉水

燻し銀のやうに曇つた空からは、細い雨の降る日があつた。夕
焼の空に澄むべき富士が、薄い霞に包まれる日が續いた。春にな
つてゐた江戸市中の門人達は、芭蕉が深川に移つて以來も、折に
つけて尋ねて來た。師が一人淋しく起き臥してゐることを思
ひ、何かと不自由を感じてゐるだらうと思つて、誰彼となく代る
代る何かしら思ひ附いたものを、——茶とか、麥粉とか、納豆とか、
干瓢とか、師を慰めるものを持つて來た。半紙や、筆や、塵紙や、溫石
や、手拭などを手土産にする者もあつた。そのうちに市中の者に
は忙しい年の暮が近づいたので、來訪の人もまれ／＼になつた
が、日ざしも伸びる春になつてからは、彼等は又大川を越えて足
を運んで來るのであつた。

湯島の梅がもう盛だといふ噂をする者もあつた。柳原の柳が
氣色ばんでゐるといふ事を傳へる者もあつた。途中で今年始め
ての蝶を見たとき、何か大きな事の發見をしたやうに云ふ者もあ
つた。そんな話をしてゐる時、庭の方で地の底から目覺めたらし
い蛙がぐつ／＼と鳴聲を立てた。お、やつぱり郊外は春が早い。
斯うして時たまに市中を離れて來ると、本當に長閑な氣がする
といふ者もあつた。芭蕉は花時の近い市中のざわ／＼した空氣
を好まないで、引籠つてばかりゐた。而して客の來るのを喜ん
で迎へた。

彼の家の邊は濕地の事として、蘆のやうな草の芽がやたらに萌
出してゐるだけで、花をつけるものとは一本もなかつた。古い
芭蕉の株は去年の野分に逢つて、ずた／＼に裂けた。あとには黒
く枯れてしまつたのを切倒した儘になつてゐる。彼はふと芭蕉

を新しく植ゑて見ようかと思つた。その話を聞いて、或日門人の李下といふものが、芭蕉の苗を持つて来てくれた。而して李下は自分で庭において土を掘らうとした。彼は李下に指圖をして南の縁に近い所にそれを植ゑて貰つた。彼は何となく此の植物が好きであつた。それは唯このさびしい姿が好きなのだ。花は咲くけれども一向人目に立たないから、喧しくもてはやされる煩もない。又株は太くなるけれども、實用にならぬものだから、斧を加へられる心配もない。所謂山中不材の類で、おのがまゝに己を伸ばすことが出来るその性が嬉しいのだと、彼はその芭蕉の一株に心をとめてゐた。

芭蕉うるてまづにくむ荻の二葉かな

春は春とて雑沓に紛れることを嫌ひ、夏は夏とて黄塵に追はれることを厭つて、芭蕉は家に籠つてばかりゐた。或日は珍らし

杉風
杉山氏。通稱
は鯉屋市兵
衛。江戸の俳
人。

く杉風が来て、久しく開いた事のない採茶庵を開いて、納涼の小宴を催したこともあつた。籟から鯉をあげさせて、早速に生作りに料に料らせたりした。その新鮮な味が嬉しかつたので、雪の純左勝水無月の鯉などと、彼は即興を吟じた事もあつた。然しその様な事は稀で、土用から殘暑の頃にかけては、誰も炎熱にめげて、彼を訪ねて来るものも途絶えがちであつた。

李下が縁先に植ゑて行つた芭蕉の株から芽を出した。その葉は、初は圓い筒を立てたやうであつたが、その筒の中から新しい葉が幾枚も幾枚も伸びて出て廣がつかつた。或ものは萱の軒端にとどくまで高く、或ものは鳳凰の翼のやうに大きく横に垂れた。それが丁度自然に出來た青簾となつて、夏の暑い日光を遮つてくれた。その大まかに美しい葉脈を通して、透かして見える緑の光も美しかつた。夕方になると、ばさり／＼と動き易い團扇のやう

な芭蕉の葉は、海の方から吹いてくる風を迎へて、涼しい空気を
室の内へあふり入れてくれた。彼はひとり蚊遣火を焚きながら
縁先に出て句を考へたりしてゐた。

秋の氣が身にしみるやうになると、芭蕉が深川の生活もまる
一年になつた。弱々しい小鳥には、すつほりと身を入れるだけの
小さな巢が自然の懷としての快い暖かみであるやうに、芭蕉に
とつては僅かに身を入れるだけに狭い、それだけぬつほりと感
じられるその家が起き臥しに嬉しく、又どうしてもなくてはなら
ぬものとなつた。而して軒端の芭蕉の株もこの庵と離れ難いも
のになつてゐた。また野分の夜が來て、その廣い葉がばさ／＼と
破れるであらう。破れ易いといふ事が、彼の心には何よりも愛す
べきものに思はれた。その頃から、彼は自分の家を——是はもと
杉風が座興庵と名づけてあつたが——芭蕉庵といふ名にした。

自分で芭蕉庵の主人などとも書いた。彼は又「桃青」といふ自分の
號よりも「芭蕉」といふ名の方が自分らしくて氣に入るやうにな
つた。はせを」と假字で書く時の文字の形も、何となく好きであつ
た。

縁先に來ては羽を休めてゆく赤蜻蛉の姿も見えなくなつて、
日ざしは疊の上にならぬまで深くさし込んで來た。もう十月も半ばで
あつた。芭蕉は平生愛してゐる杜甫の詩集を出して讀んだりし
ながら、往古の詩人達が言葉を盡くして稱へてゐる閑暇の味と
いふものを、彼はこの頃初めて理解したのだつた。何のために何
をしなければならぬといふ目的を意識することなしに、爲る事
がそれ自體として充足し、そこに魂の自由を感じる事の味は、生
命の尊さその物と同じき貴いものに思はれた。

さうした心持から、彼は或日澁笠を作つてみようと思ひ立つ

杜甫
字は子美、少
陵と號す。唐
の詩人。

た。こんな細工も、自分で竹を削つて骨を作るのがなか／＼容易ではないものだ。而して自分は何でも無器用だなどと思はせられるのだつた。それでも何となく興が乗つて來ると、夜も暗い燈火の下で、小刀を棄てなかつた。紙を貼る事は造作はなかつたが、それも日が曇つて、糊が乾かなかつたり、風が吹いて飛びさうになつたりした。やつと形だけ整つたので、今度はそれに澁を塗つて、又干しあげた。

彼はこの笠を作つてゐる間に、かうした笠を被つて旅をしてゐたらしい宗祇法師が目に見え、浮かんで來た。西行が和歌の一筋を辿つて一生を行脚に過したと同じ様に、宗祇が連歌の道を歩みつゝ、一笠一杖の生活に身を託したことが、貴く而して慕はしく考へられて來た。世にふるはさらに時雨のやどりかなと、かう宗祇は吟じてゐる。この世に生を經るその一日々々は、宛も長い旅

をしてゐるのと同じである。さればその一日々々をまことの旅にして、宿舍の軒をうつ時雨の音を聽いてゐる心持は、どんなに淋しく魂の澄むことであらうと思はれた。

笠は二十日餘もかゝつて、漸く出來上つた。骨が弱いのに、餘りに干し過ぎたためか、妙にそり反つて、中はぶつとふくらんだ。ま縁が外へしやかれて、巻きかへつたやうな、をかした形をしてゐた。併しその形が、丁度半ば開いた蓮の葉そつくりなので、彼は却つて興がつた。なまじきちんと正しいよりも、歪みながらに面白いものが出來たと、彼はほゝゑんだ。而して自分が作つた此の笠を被つて、はら／＼と降つて來る時雨に濡れて歩いたならば、さぞ心ゆく事であらうなども思はれた。彼は筆を執つてその笠の裏にかう書きつけた。

世にふるもさらに宗祇のやどりかな

宗祇の境涯を以て自分の境涯としたい。——自ら白雲の去來するやうに、心の向くまゝに身を漂はしつゝ、六十を過ぎるまで諸國を行脚し、遂に旅にあつて死んだ自然の旅人としての宗祇は慕はしい。さういふ憧憬が自分の心の隅の方で頭を擡げかけてゐることを彼は感じた。現に芭蕉庵の靜謐な生活の無事を喜んでゐると共に、胸の底では旅へ旅へと囁く或聲のある事を。

(旅人芭蕉)

吾事ありては現代に於て此の如き見聞あり
時を移るるを以て其の如き見聞あり
朝つゆによごれてすゝし瓜の泥
朝の雨の如き見聞あり

幸田露伴
名は成行。文
學博士。

七 蒲生氏郷

幸田 露伴

氏郷は秀吉の鑑識を以て、會津の城主、奥州出羽の押へといふことに定められた。

氏郷は法を執ること嚴峻な人で、極端に自分の命令の徹底的ならんことを然るべき事とした人である。勿論亂れ立つた世に在つては、一軍の主將として下知の通りに物事の運ぶのを期するのには至當の譯で、さなくとも軍隊の中に於ては下々の心任せなどがあつてはならぬものであるが、それでも自らに寛嚴の異があり程度がある。郭子儀李光弼はいづれも唐の名將であるが、陣營の中のさまは大いに違つてゐたことが傳へられてゐる。氏郷は恐ろしく嚴しい方で、小田原北條攻の爲に松坂を立つた二月七日の事だ。一人の侍に蒲生重代の銀の鯨の兜を持たせて置

二月
天正十六年。

いたところ、氏郷自身先陣より後陣まで見廻つた時、此處に居よ
といふ所に、其の侍が居なかつた。そこで氏郷は、屹度此處に居よ
と注意を與へて置いて、それから組々を見廻り終へて還つた。よ
くく取締めた所存のなかつた侍と見えて、復もや、此處に居よ
と云ひつけた所に居なかつた。すると氏郷は、物も言はずに馬の
上で太刀を抜くや否や、その首を丁と打落して、兜を別の男に持
たせたので、士卒等はこれを見て舌を振つて驚き、一軍肅然とし
たといふことである。巖石の城を攻落した時に、上坂佐文、横山喜
内、本多三彌の三人が軍奉行でありながら、令を犯して進んで戦
つたので、厳しく之を咎めたところ、上坂横山の二人は、自分の高
名の爲ではなく、火を城に放たうと思つたのであると、苦しい答
辯をしたので免されたが、本多は云分立たずであつたので、勘當
されてしまつた。三彌は徳川家の譜代侍の本多佐渡正信の弟で、

隠れも無い勇士であつたが、其の如くで、其の他旗本から抜け出
でて進み戦つた岡左内、西村左馬、允岡田、大介、岡半七等、いづれも
倔強の者共で、其の戦に功があつたのだつたが、皆令を犯した廉
で暇を出されて浪人するの已むを得ざるに至つた。

氏郷は是の如く、厳しい男だつたが、他の一面には、又人を遇す
るに、ずばりとした氣持の好いところもあつた人だつた。必ずし
も重箱の中へ羊羹をぎりぎり詰めたやうな形式好き、融通利か
ずの偏屈者ではなかつた。關白や其の他に、敵對行爲を取つて世
の餘され者になつた強者共を召抱へた如きは、其の著しい例で、
別にかういふ妙味のある談さへ傳はつてゐる。それは、氏郷が關
白に従つて、征戰を上方やなどで勵んで居た頃、即ち小田原陣
前の事であらうが、或時、松倉權助といふ士が、蒲生家に仕官を望
んだ。權助は筒井順慶に仕へて居たが、どういふ譯であつたか、臆

持てゐる事
菅原河原太郎を
月給と居る

御扶持を蒙りたる事
御扶持を蒙りたる事
御扶持を蒙りたる事

御扶持を蒙りたる事
御扶持を蒙りたる事

病者と云はれた。そこで筒井家を去つたのであるが、蒲生家へ扶
持を望むに就いて、かういふ事をいつた。拙者は臆病者と云はれ
た者でござる。但し臆病者も良將の下に用ひらるゝ道がござら
ば御扶持を蒙りたる事と云つたのである。筒井家は順慶流
だの、洞ヶ峠だのといふ言葉を今に遺してある位で、餘り武邊の
芳しい家ではない。其の家で臆病者と云はれたのは、虚實は兎も
角に、これも芳しいことではない。ところが、氏郷は其の男を呼出
して對面した上、召抱へた。自分から臆病者と名乗つて出た正直
なところを買つたのだらう。正直者には勇士が多い。臆病者が知
遇に感じて強くなつたか、多分は以前から臆病者などではなか
つたのだらう。權助は合戦のある毎に好い働をする。で、氏郷は忽
ち物頭にして二千石を與へたといふのである。後に此の男が討
死したところ、氏郷が自ら責めて、おれが悪かつた。も少しゆつく

御扶持を蒙りたる事
御扶持を蒙りたる事

御扶持を蒙りたる事

御扶持を蒙りたる事

り取立てて遣つたらば、強ひて討死もせず、に段々武功を積んだ
らうに。」と云つたといふことだ。此の話を咬みしめて見ると、松倉
權助もおもしろければ、氏郷もおもしろい。

氏郷は法令嚴峻である代りには、自ら處することも一毫の緩
怠も無い。徹底して武人の面目を保ち、徹底して武人の精神を揮
つてゐる。所謂たぎり切つた人である。なまぬるな者では無い。蒲
生家に仕官を望んで新規に召抱へられる侍があると、氏郷はか
う云つて教へたといふことである。當家の奉公はさして面倒な
事はない。たゞ戰場といふ時に、銀の鯁の兜を被つて油斷なく働
く武士があるが、其の武士に愧ぢぬやうに心掛けて働きさへす
ればそれでよい。」と云つたといふ。勿論これはまだ小身であつた
時の事であらうが、訓諭も絲瓜も入つたものではない。人を使ふ
のはこれでなければ嘘だ。言ふまでもなく、銀の鯁の兜を被つて

是處に自軍の陣を危
に置けり
是處に自軍の陣を危
に置けり
是處に自軍の陣を危
に置けり
是處に自軍の陣を危
に置けり

働く者は氏郷なのである。

かういふ人だつたから、四位の少將、十八萬石の大名となつてからも、小田原陣の時は驚くべき危険に身を暴露して、手厳しい戦をして居る。それは氏郷の方から好んで爲出したことではな
いが、他の大將ならば、或は遁逃的態度に出て、そして敵をして其の企圖を多少なりとも成就するの利を得しめ、味方をして損害を被るの勢を成さしめたであらうに、氏郷が勇敢に職責を嚴守したので、敵は何の功をも立てることが出来なかつた。

それは五月三日の夜の事で、城中に居縮んでばかり居ては士氣は日に衰へるばかりであるから、北條方にさる者ありと聞えた北條氏房が廣澤重信をして夜討を掛けさせた時と、七月二日氏房がまた春日左衛門尉をして夜討を掛けさせた時とである。五月三日の夜の事は小田原勢がまだ勢のあつた時なので、なかな

か猛烈であつたが、蒲生氏郷勢の奮戦によつて勿論逐拂つた。併し其の時の戦は如何にも咄嗟に急激に敵が斫入つたので、氏郷自身まで槍を取つて戦ふに至つたが、事済んで營に歸つてから、身内をばあらためて見ると、鎧の胸板（損傷）に太刀疵、槍疵が四箇處、例の銀の鎧の兜に矢痕が二つ、槍の柄には刀痕が五箇處あつたといふ。以て氏郷が危険を物の數ともせずして、自分の身を自分が置かんとする處に置いた以上は、一步も半歩も退かぬ剛勇の人であつたことが窺ひ知られる。

つまり氏郷は他を律することも嚴峻な代りに、自ら律することも嚴峻な人だつたのである。是の如き人は、主人としては畏ろしくもあれば頼もしくもある人で、敵としては、所謂手強い敵味方としては、堅城鐵壁のやうなものである。併し是の如き人には、動もすれば我執の強い、古い言葉で云へば、（片意地）がねむくろ（片意地）の人が多

自軍の陣を危
に置けり
自軍の陣を危
に置けり
自軍の陣を危
に置けり
自軍の陣を危
に置けり

器量一層豊満

心持厚
おやうと
居る事

北朝懐南

久しうて懐懐
事と云ふ

勘當を二より
全給へる切事

此乃二面事

いものだが流石に氏郷は器量が小さくない。さらりとした爽朗

流石に氏郷は器量が小さくない。さらりとした爽朗

快活なところもあつた人だ。
嘗て九州陣巖石の城攻の時に、軍令に背いて勘當された臣下の者共が、氏郷と交情の好かつた細川越中守忠興を頼んで詫言をして貰つて、また新に召抱へられることになつた。其の中に西村左馬允といふ者があつて、大の男の大力の上に、相撲は殊更上手の者であつた。其の男が勘當を赦されて新に召還されたばかりの次の日の朝出仕すると、左馬允、汝は大力、相撲上手よな。さあ一番來い。おれに勝てるか。といつて、氏郷が相撲を挑んだ。氏郷も元より非力の相撲弱ではなかつたのであらう。左馬允は弱つた。勘當を赦されて歸り新參になつたばかりなので、主人を叩きつけて、主人が好い心持のする筈はないから、當惑するのに無理はない。併し主命である。挑まれて相手にならぬ譯には行かぬから、

器量一層豊満

心持厚
おやうと
居る事

心得ましたと引組んで捻合つた。勝てば怒られる、わざと負けるのは輕薄でもあり、心外でもあると惑はぬことはなかつたらうが、そこは人の魂の沸り立つて居る代である。左馬允は思ひ切つて大力を出して、とうとう氏郷を捻倒した。そこで、やあ左馬允、汝は強い。と主人に笑つて貰へれば上首尾なのだが、さうは行かなかつた。忠三郎氏郷、うんと緊張した顔付になつて、無念である。さあもう一度來い。と力足を踏んで、眼ざし鋭く再闘を挑んだ。觀て居る者は氣の毒で堪らない。おや、左馬允も負ければ無事だらうが、勝つた段にはもと、勘當を蒙つた奴である、手討になるかも知れないと危んだ。左馬允もかうなつては是非がない。ここで負ければ、假令過つて負けたにしても、輕薄者表裏者になると思つたから、油断なく一所懸命に捻合つた。雙方死力を出して争つた末、とうとう左馬允は氏郷を遣付けた。其の時始めて氏郷

は莞爾と笑つて、うい奴だ。汝は此の乃公に能う勝つたぞ。」と褒めて、其の翌日、知行米加増をされたといふ。此の談の、最初一度負けるところで、褒詞を左馬允に與へて濟ます位のところなら、少し腹の大きい者には出来ることだが、二度目の取つ組合をしたところが一寸面白い。

氏郷の肚は潤いばかりでなく、奥深いところがあつたのである。(蒲生氏郷・平將門)

○
承久三年のみだれに、宇都宮越中前司頼業いまだ無官なりけるが、宇治川をわたすとして、おし流されて水の底へ入りたりけるに、石にかきつきて鎧を脱がんとしけるが、上帯しめて解けざりければ、引きちざりて脱ぎて、およぎ上りたりけり。さしも早き川の底にて、かくふるまひたりけるゆゑ、しき事なりける水練なりけり。(古今著聞集)

八 最後の参内

安倍野の合戦は霜月二十六日のことなれば、渡邊の橋より堰きおとされて、流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、川より引揚げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木情あるものなりければ、小袖を脱ぎかへさせて、身を暖め、薬を與へて疵を療ぜしむ。かくの如く、四五日皆勞りて、馬に乗るものには馬を引き、物の具失へる人には物の具を着せて、色代してぞ送りける。されば敵ながら其の情に感ずる人は、今日より後心を通せんことをおもひ、其の恩を報いんとする人は、やがて彼の手に屬して、後、四條繩手の合戦に討死をぞしける。

さて、今年兩度の合戦に、京勢むげにうち負けて、畿内多く敵

安倍野 攝津國東成郡
天王寺以南、
住吉祠に至る
一帯の沙丘。
霜月二十六日
正平十二年。
渡邊の橋。
今の大阪市天
滿・天神兩橋
の間に架せり
といふ。

四條繩手
河内國中河内
郡。

兩度の合戦
八月藤井寺の
戦と、十一月
安部野の戦。

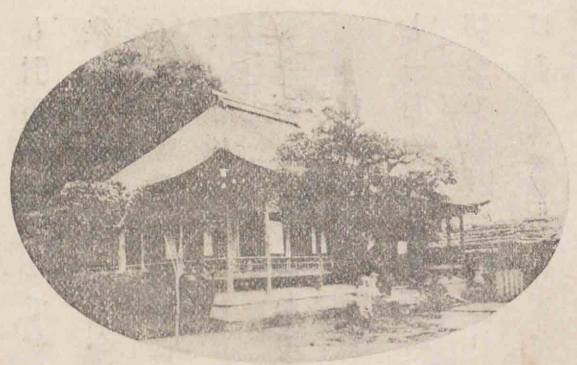
有徳子
凡天とある

後村上天皇
御簾を高く捲かせて

主上
後村上天皇

を御代に即けまゐらせよ。」と申し置きて死にて候。然るに、正行正時、已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戦仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬならひにて、病に犯され、早世仕ること候ひなば、たゞ君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度、師直、師泰に驅合はせ、身命をつくし合戦仕つて、彼が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行正時が首を彼等に取り候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度、君の龍顔を拜し奉らん爲に、參内仕つて候。」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡しける。

主上、則ち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顔ことに麗しく諸卒



如意輪堂

を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功、かへすがへすも神妙なり。大敵今勢を盡くして向かふなれば、今度の合戦、天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずること、勇士の心とする所なれば、今度の合戦、手を下すべきにはあらずといへども、進むべきを知つて進むは時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て退くは後を全うせんが爲なり。朕、汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、たゞ是を最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

遺帳
先皇
後醍醐天皇

如意輪堂。
吉野勝手神社
の谷にあり。
藏王堂の良に
あたる。

遺帳
先皇
後醍醐天皇

正行正時和田新發意舍弟新兵衛同紀六左衛門子息二人野田
四郎子息二人楠木將監西河子息關地良圓以下、今度の軍に、一足
も引かず一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先
皇の御廟に参つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申し
て、如意輪堂の壁板に、おの／＼名字を過去帳に書連ねて、その奥
に、

返らじとかねておもへば梓弓なき數にいる名をぞとゞ
むる。

と、一首の歌を書留め、逆修のためとおぼしくて、おの／＼鬢髪を
切つて佛殿に投入れ、その日吉野をうち出でて、敵陣へぞ向かひ
ける。(太平記)

上
中
下

成經
藤原成親の
子。
鹿瀬
佐賀縣佐賀
郡。
大納言
藤原成親。治
承元年八月十
九日殺さる。
有木
岡山縣賀陽郡
庭瀬村。

九丹波少將

治承三年正月下旬に、丹波少將成經平判官康頼入道二人の人

人は、肥前の國鹿瀬の莊を立ちて、都へとは急がれけれども、餘寒
も未だ烈しく、海上もいたく荒れければ、浦づたひ、島づたひして、

二月十日頃、備前の兒島には着き給ふ。

それより少將は、父大納言殿の御わたりありし有木の別所と

かやに尋ね入りて見給へば、竹の柱舊りたる障子などに書きお

き給ひつる筆のすさびを見給ひて、あはれ人の形見には手蹟に

過ぎたる物ぞなき。書きおき給はずばいかでこれを見るべき。と

て、康頼入道と二人讀みては泣き、泣きては讀む。安元三年七月二

十日出家。同じき二十六日信俊下向。とも書かれたり。さてこそ源

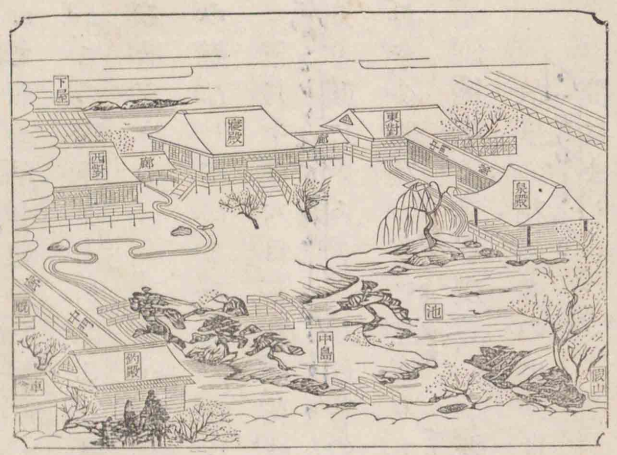
左衛門尉信俊が参りたるをも知られけれ。傍なる壁には、三尊來

修業浄土の望

迎便あり九品往生疑なし」とも書かれたり。この形見を見給ひてこそ、さすが欣求浄土の望もおはしけり」と限なき歎の中にも聊か頼もしげには宣ひけれ。

その墓を尋ねて見給へば、松の一むらある中に、かひなく、ししく壇を築きたることもなし、土の少し高き所に向かひ、少將袖かき合はせ、生きたる人に物を申すやうに、泣く／＼、かきくどきて申されけるは、遠き御守とならせおはしましたることをば、島にてもかすかに傳へ承つて候ひしかども、心に任せぬ憂身なれば、急ぎ参ることも候はず。成經かの島に流されて後の便りなき、一日片時の命もあり難くこそ候ひしかども、さすが露の命は消えやうり、この二年を送りて、今召還さる、嬉しさも、さる事にては候へども、父大納言殿の、まさしくこの世に渡らせ給はむを見参らせても候はばこそ、さすが命の長きかひも候はめ。これまでは急

がれつれども、今日より後は急ぐべしとも覺えず」とて、かきくどいてぞ泣かれける。誠に存生の時



寢殿造

ならば、大納言入道殿こそいかにとも宣ふべきに、生を隔てたるならひほど恨めしかりけることはなし。苔の下には誰か答ふべき。ただ嵐に騒ぐ松の響ばかりなり。同じき三月十六日、少將鳥羽に明うぞ着き給ふ。故大納言殿の山莊、洲濱殿とて鳥羽にあり。それに立寄り見給へば、住みあらして年

秋の山鳥羽にあり。

經にければ、築地はあれどもおほひもなく、門はあれども扉もなし。庭に立入り見給へば、人迹絶えて苔深し。池の邊を見廻せば、秋

都下ヤマト

の山の春風に、白浪頻りに織りかけて紫駕白鷗逍遙す興せし人の戀ひしさに、たゞ盡きせぬものは涙なり家はあれども欄門破れて、都遣戸も絶えてなしこゝには大納言殿の、とこそおはせしかこの妻戸をば、かうこそ出で入り給ひしかあの木をば、自らこそ植ゑ給ひしか、などいひて、言の葉につけても、たゞ父の事をのみ戀ひしげにこそ宣ひけれ。

三月中の六日なれば、花は未だ名残あり、楊梅桃李の梢こそ折知り顔にいろくなれ、昔の主人はなけれども、春を忘れぬ花なれや、少將花の下に立寄りて、

桃李不言春幾暮

煙霞無迹昔誰栖

故里の花のものいふ世なりせば、いかにむかしのことを問はまし

この古き詩歌を口ずさみ給へば、康頼入道も折節あはれに覺

桃李不言云々
菅原文時の
作。
故里の云々
出羽辨の歌。
(後拾遺集)

えて、墨染の袖をぞ濡しける。暮るゝ程とは待たれけれども、餘りに名残惜しくて、夜更くるまでこそおはしけれ。更けゆくまゝに、荒れたる宿のならひとて、古き軒の板間より洩る月影ぞ隈もなき。さてしもあるべきことならねば、迎に乗物ども遣して待つらむも心なしとて、少將泣く泣く洲濱殿を出でて、都へ歸り上られけり。人々の心のうち、さこそ嬉しくも亦哀にもありけり。

康頼入道が迎にも乗物はありけれども、今更名残の惜しきにとて、それには乗らず、少將の車の尻に乗りて、七條河原までは行き、それより行別れけるが、なほ行きもやらざりけり。花の下の中半日の客月の前、一夜の友旅人が一村雨の過行くに、一樹の蔭に立寄りて、別るゝ名残も惜しきぞかし。況やこれは憂かりし島のすまひ船の中波の上、一業所感の身なれば、先世の芳縁も浅からずや思はれけむ。

少將は、もとの如く院に参らせ給ひて宰相の中將まで上り給ふ。康頼入道は東山雙林寺に、わが山莊のありければ、それに落着きて、まづかくぞ思ひ續けける。
ふるさとの軒の板間に苦むしておもひしほどは洩らぬ月かな
やがてそこに籠居して憂かりし昔を思ひやり、寶物集といふ物語を書きけりとぞ聞えし。(平家物語)

ふるさ都 (今様)
ふるさ都を來て見れば、
浅茅が原とぞ荒れにける。
月の光はくまなくて、
秋風のみぞ身にはしむ。(平家物語)

鬼界が島
鹿兒島縣南方
諸島の總稱。

一〇 有王島下り

鬼界が島の流人ども二人は召還されて都へのぼりぬ。今一人残されて、うかりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。僧都の稚くより不便にして召使はれる童あり。名をば有王とぞ申しける。鬼界が島の流人ども、今日既に都へ入ると聞えしかば、有王島羽まで行向かひて見けれども、我が主は見え給はず。如何にと問へば、それはなほ罪深しとて、一人島に残されぬ。聞きて心憂しなどもおろかなり。常は六波羅邊に佇みて聞きければ、ごも、何時赦免あるべしとも聞出さざりければ、僧都の御女の忍びておはしける所へ参りて、此の瀬にも洩れさせ給ひて御上りも候はず。今は如何にもして彼の島へ渡りて、御行方をも尋ね参らせばやと存じ候。御文賜はり候はむ。と申しければ、姫御前斜な

彌生 裁の 樹言笑

らずに悦び、やがて書きてぞ給うでける。暇を乞ふともよも赦さ
じとて、父にも母にも知らせず、唐船の纜は四月五月に解くなれ
ば夏衣たつを遅くや思ひけむ。彌生の末に都を立ちて多くの波
路を凌ぎつ、薩摩瀉へぞ下りける。薩摩より彼の島へ渡る船津
にて、有王を人怪しめ、着たる物を剥取りなごしけれども、少しも
後悔せず、姫御前の御文をばかりぞ人に見せじと、元結の中には
隠しける。

さて商人船に乗りて、件の島へ渡りて見るに、都にて微かに傳
へ聞きしは事の數ならず。田もなし、畑もなし、里もなし、村もなし。
おのづから人あれども、言ふ詞をも聞知らず。有王島の者に行向
かひて、「物申さん」といへば、「何事」と答ふ。是に都より流されさせ給
ひたる法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の御行末や知りたる」と
問ふに、法勝寺とも、執行とも、知りたらばこそ返事はせめ、只頭を

振りて、「知らぬ」といふ。其の中に或者が心得て、「いさ」とよさやうの
人は三人是にありしが、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人殘
されて、あそここゝと迷ひありしが、其の後は行方をも知らず。
とぞいひける。山の方の覺束なさに遙かに分入り、峯に攀ぢ、谷に
下れども、白雲跡を埋めて往來の道も定かならず。晴嵐夢を破り
ては、其の面影も見えざりけり。山にては終に尋ねも遇はず、海
邊について尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗沖の白洲にすだく濱干
鳥の外はあと問ふ者もなかりけり。
或あした磯のかたより蜻蛉なごの如くは瘦衰へたる者よ
ぼひ出で來たり。もとは法師にてありけりと覺えて、髪は空様に
生ひ上り、萬の藻屑取りつけて、荆棘を戴きたるが如し。繼目あら
はれて、皮ゆたひ身に着たるものは、絹布のわきも見えず。片手に
は荒海布を持ち、片手には魚を貫ひて持ち、歩む様にはしけれど

新編

もはかも行かす、よろしくとしてぞ出で來たる。都にて多くの
町人は見しかども、かゝる者は未だ見ず。知らず、われ餓鬼道など
へ迷ひ來たるかと石
覺えたるは、や彼も此
も次第に歩み近づく。
若し斯様の者にて、
我が主の御行方や知
りたると、物申さん。と
いへば、何事。と答ふ。是
に都より流され給ひ



(畫挿語物家平本刊古) 寛 後

し法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やまします。と問ふに、童こそ
見忘れたれども、僧都はいかでか忘れ給ふべきなれば、是こそ
れよ。とのたまひもあへず、手に持てる物を投棄てて、沙の上にてぞ

奉

倒れ伏す。さてこそ我が主の御行方とは知りてけれ。僧都やがて
消入り給ふを有王膝の上にかき戴せ奉り、多くの波路を凌ぎつ
つ、遙々これまで尋ね参りたるかひもなく、如何にやがてうきめ
をば見せむとはせさせ給ひ候ぞ。と、潜然とかき口説きければ、僧
都少し人心地出で來扶け起され、誠に汝多くの波路を凌ぎつ、
遙々とこれまで参りたること神妙なれ。只明けても暮れても、都
の事をのみ思ひ居たれば、戀ひしき者どもの面影を夢に見る折
もあり、又幻に立つ時もあり、身もいたく疲れ弱りて後は、夢も現
も思ひわかず。今汝が來たれるをも、只夢とのみこそ覺ゆれ。若し
此の事の夢なりせば、覺めての後は如何にせむ。有王、こは現にて
候なり。さて此の御有様にて、今まで御命の延びさせ給ひたる
こそ不思議には覺え候へ。と申しければ、いとよ、是は去年少將
や判官入道が迎の時、其の瀬に身をも投ぐべかりしをよしなき

少將の今一度都の音信をも待てがしなご慰め置きしをおろかに若しやと頼みつゝ長らへむとはせしかども此の島には人の食ひ物絶えてなき所なれば身に力のありし程は山に登りて硫黄といふ物を取り九國より通ふ商人にあひ食ひ物に換へなどせしかども日に添へて弱り行けば今はさやうの業もせず斯様に日の長閑なる時は磯に出でて網人釣人に手を摺り膝を屈めて魚を貰ひ汐干の時は貝を拾ひ荒海布を取り磯の苔に露の命を懸けてこそ憂きながら今日までは長らへたれ是にて何事もいはばやとは思へどもいざ我が家へとのまたへば有王あの御有様にても家を持ち給へる不思議さよと思ひ僧都を肩に引懸け参らせ教に隨ひて行く程に松の一むらある中により竹を柱とし蘆を結ひて桁梁にわたし上にも下にも松の葉をひしと取懸けたれば雨風溜るべくも見えず

僧都こは現にてありけりと思ひ定めて去年少將や判官入道迎の時も此等が文といふ事もなし今又汝が便りにもかくとも言はざりけりなとのたまへば有王涙に咽び俯して暫しは御返事にも及ばずやゝありて起上り涙を抑へて申しけるは君の西八條へ出でさせ給ひし後官人参りて資財雜具を追捕し御内の方ども搦め取り御謀叛の次第を尋ね問ひ皆失ひ果て候ひき北の方には稚き者を隠しかね参らせ給ひて鞍馬の奥に忍びて御渡り候ひしにも此の童ばかりこそ時々参りて御宮仕仕り候なり何れも御歎のおろかなる方は候はねども中にも稚き人は餘りに戀ひ参らせ給ひて参り候度毎に如何に有王よ我を鬼界が島とかやへ具して参れとのたまひてむづからせ給ひしが過ぎ候ひし二月に痘と申す事に失せさせおはしまし候ひぬ北の方は其の御歎と申し又此の御事と申し一方ならぬ御物思に思召

し沈ませ給ひて、打伏させ給ひしが、去ぬる三月二日の日、遂には
かなくならせ給ひて候ひぬ。今は姫御前ばかりこそ、奈良の姨御
前の御許に忍びておはしけれ。それより御文給ひて参りて候。と
て取出でて奉る。僧都これをあけて見給へば、有王が申すに違は
ず書かれたり。奥には、「などや三人流されおはします人の、二人は
召還されて候に、何とて一人残されて、今まで御上りも候はぬぞ。
あはれ尊きも賤しきも、女の身程いひがひなき事は候はず。男の
身にて候はば、渡らせ給ふ島へも、なごが尋ね参らで候べき。此の
童を御供にて、急ぎ上らせ給へ。」とぞ書かれたる。これ見よ、有王よ。
この子が文の書き様のはかなさよ。おのれを供にて急ぎ上れ。」と
書きたる事の怨めしさよ。俊寛が心に任せたるうき身ならば、何
とて此の島にて三年の春秋をば送るべき。」とて泣かれけるにぞ、
人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思

人の親の心は
やみにあらね
ども子をおも
ふ道にまよひ
ぬるかな。藤
原兼輔、後撰
集

ひ知られける。此の島へ流されて後は、曆もなければ月日の立つ
をも知らず、只おのづから花の散り葉の落つるを見ては、三年の
春秋を辨へ、蟬の聲（秋）を送れば、夏と思ひ、雪の積るを冬と知る。
白月（黒）の變り行くを見ては、三十日を辨へ、指を折りて數ふれ
ば、今年六つになると覺ゆる稚き者も、はや先立ちけるござんな
れ。西八條へ出でし時、此の子が行かむと慕ひしを、やがて還らむ
ずるぞと慰め置きしが、只今のやうに覺ゆるぞや。それを限とだ
にも思はましかば、今暫くもなごか見ざらむ。親となり子となる、
夫婦の縁を結ぶも、皆此の世一つに限らぬ契ぞかし。今は姫が事
ばかりこそ心苦しけれども、それは生身なれば、嘆きながらも過
さむずらむ（ま）のみながらへて、おのれに憂き目を見せむも、我が
身ながらつれなかるべし。とて、食事を止め、偏に彌陀の名號を唱
へ、臨終正念をぞ祈られける。有王渡りて二十三日と申すに、僧都

庵の中にて、遂に終り給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。

有王空しき姿に取りつき奉り、天に仰ぎ地に俯し、心の行く程泣き飽きて、やがて後世の御供仕るべく候へども、この世には、姫御前ばかりこそ渡らせ給ひ候へ。後世弔ひ参らすべき人も候はず、しばし長らへて御菩提を弔ひ参らすべし。とて、寢所を改め、庵をきりかけ、松の枯枝、蘆の枯葉をひしと取りかけて、藻鹽の煙と爲し奉り、茶毘ことをへぬれば、白骨を拾ひ、首にかけ、又商人船の便りにて、九國の地にぞ着きにける。(平家物語)

此の島の舉動、都に傳へ聞きしより、まのあたり見るは堪へて有るべき様なし。峯には燃上るほむら行客の魂を消し、谷には鳴下る雷旅人の夢を破る。山路に日暮れぬれども、樵歌牧笛の音もなく、海上に夜を明せば、松風白浪心を痛ましむ。

(源平盛衰記)

一一 おどろのした

御門はじまり給ひてより八十二代にあたりて、後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成、これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。修理大夫信隆のぬしの女なり。治承四年七月十五日生れさせ給ふ。文治元年三月二十五日御年六つにて位に即かせ給ひけり。

御門いとおよすげてかしこくおはしませば、法皇もいみじううつくしとおぼさる。文治二年十二月一日御書始させ給ふ。御年七つなり。同じき六年女御まり給ふ。月輪關白殿の御女なり。后だちありて、後には宜秋門院と聞え給ひし御ことなり。この御腹に春花門院と聞え給ひし姫君ばかりおはしましき。建久元年正月三日御年十一にて御元服し給ふ。おなじき三年三月十三日

七條院
藤原種子。

法皇
後白河法皇。

月輪關白殿
藤原兼實。

に法皇かくれさせ給ひし後は、御門ひとへに世を知しめして、四方の海波靜かに、吹く風も枝を鳴らさず、世治り民安くして、あま

ねき御うつくしびの浪秋津島の外まで流れ、繁き御惠筑波山のかげよりも深し、よろづの道々に明けくおはしませば、國に才ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なむすぐれさせ給ひける。御歌かず知らず人の口にある中にも、

奥山のおごるのしにもふみわけて道ある世ぞと人にし
らせむも長つ新の道はをけるを思ひてはるる

と侍るこそ、まつりごと大事と思されけるほど著く聞えて、いといみじくやむごとなくは侍れ。

建久九年正月十一日第一の御子土御門院四つになり給ふに、御位譲り申させ給ひておりの給ふ。御年十九位におはします事十五年なりき。今日明日二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき

鳥羽殿
山城國紀伊郡
白河殿
同國愛宕郡
水無瀬
攝津國三島郡
島本村大字廣瀬

鳥羽殿
山城國紀伊郡
白河殿
同國愛宕郡
水無瀬
攝津國三島郡
島本村大字廣瀬

御事なれども、よろづ所せき御ありさまよりは、なかくやすらかに御幸など御心のまゝならむとにや。世を知しめす事は、今もかはらねば、いとめでたし。

鳥羽殿、白河殿なども修理させ給ひて、常に渡り住ませ給へど、猶また水無瀬といふ所に、えもいはずおもしろき院づくりして、しばし通ひおはしました。春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり世をひかして遊をのみぞし給ふ所がらも、はるばると川に臨める眺望いと面白くなむ。元久の頃、詩に歌を合はせられしも、とりわきて

見わたせば山もとかすむみなせ川ゆふべは秋となに思
ひけむも此の世にあらむも別な

萱葺の廊渡殿などはるくと艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゞずまひ、苔深き山木に枝さ

文治の頃
文治三年九月
藤原俊成千載
集を撰す。
土御門の内のお
と
源通親。

しかはしたる庭の小松もげにく、千世をこめたる霞の洞なり。
前栽つくろはせ給へる頃、人々あまた召して御遊などありける。
後、定家の中納言いまだ下臈なりける時に奉られける。

あり経けむ本の千年にふりもせでわが君ちぎるみねの
わか松

君が世にせきいる、庭をゆく水の岩こす數は千世も見
えけり

今の攝政は院の御時の關白基通のおとゞ、その後は後京極殿
良と聞え給ひし、いと久しくおはしき。このおとゞはいみじき歌
のひじりにて院の上同じ御心に和歌の道をぞ申し行はせ給ひ
ける。文治の頃千載集ありしかご、院いまだきびははおはしまし
しかばにや、御製も見えざるを、當帝位の御程に、又集めさせ給
ふ。土御門の内のおとゞの二郎君、右衛門督通具といふ人をはじ

めて、有家の三位、定家の中將、家隆、雅經などに宣はせて、昔より
今までの歌をひろく集めらる。おのゝ奉れる歌を、院の御前に
て自らみかきとゞのへさせ給ふさまいと珍らしく面白し。この
時も、先に聞えつる攝政殿とりもちて行はせ給ふ。

この撰集よりさきに、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、勝
れたる限を撰ばせ給ひて、その道の聖たち判じけるに、やがて院
も加らせ給ひながら、猶このなみには立ち及び難しと卑下させ
せ給ひて、判のことばをしるされず、御歌にて勝り劣れる志ばか
りをあらはし給へり。なかくいと艶に侍りけり。上の其の道を
え給へれば、下も自ら時を知るならひにや、男も女も、この御代に
あたりてよき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿の君といひし
は、村上の御門の御後に、俊房の左のおとゞと聞えし人の御末な
れば、はやはあて人なれどつかさ、淺くてうちつゞき四位ばか

俊房
村上天皇の皇
子具平親王の
孫。

失せにし人
右京大夫源師
光。

りにて失せにし人の子なり。またいと若きよはひにて、後世こひも
なく深き心ばへをのみよみしこそ、いと有り難く侍りけれ。この
千五百番の歌合せの時、院の上宣ふやう、今度こたみは皆世にゆりた
る古き道のものどもなり。宮内卿はまだしかるべけれど、もけし
うはあらずと見ゆめればなむ、かまへてまるが面おこすばかり
よき歌仕うまつれと仰せらるゝに、おもてうちおもてうち赤めて涙ぐみて
候ひけるけしき限なきすきの程もあはれにぞ見えける。さてそ
の御百首の歌、いづれもとりふゝなる中に、

うすくこき野邊のみどりの若草に跡まで見ゆる雪のむ
らぎえ

草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く疾く消えけるほ
どを推量りたる心ばへなごまたしからむ人はいと思ひよりが
たくや。この人年積るまであらましかばげにいかばかり目に見

えぬ鬼神をも動かしましに、若くて失せにし、いといとほしく
あたらしくなむ。

かくて、この度撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二年三
月二十六日、宮を竟宴といふこと、春日殿にて行はせ給ふ。いみじき世
のひびきなり。かの延喜の昔おぼしよるべられて、院の御製、
石の上ふるきを今にならべこし昔のあとをまたたづね

つゝ

攝政殿 良經の
大臣

敷島ややまことばの海にして拾ひし玉はみがかれに
けり

次々ずん流るめりしかど、さのみは夏蠅くてなむ。

かくて、院の上は、ともすれば水無瀬殿にのみ渡らせ給ひて、琴
笛の音につけ、花紅葉のをりくゝにふれて、よろづの遊びわざを

延喜の昔
古今集を撰ば
れし時の事を
いふ。

修明門院
藤原重子。順
德天皇の御
母。



のみ盡くしつゝ、御心ゆくさまにて過させ給ふ。誠によろづ世も
つきすまじき御世の榮、次々今よりいと頼もしげにぞ見えさせ
給ふ。御棊うたせ給ふついでに、若き殿上人ども召して、これかれ
心のひきくゝに挑み争はせさせ給へば、あるは小弓、雙六などい
ふ事まで、思ひくゝに勝負をさうどきあへるも、いとをかしう御
覽じて、さまざまの興ある賭物どもとうでさせ給ふとて、なにが
しの中將を御使にて、修明門院の御方へ、何にても、をのこどもに
賜はせぬべからむ賭物」と申させ給ひたるに、とりあへず、小さき
唐櫃の金物したるが、いと重らかなるを參らせられたり。この御
使のうへ人、何ならむといと、いぶかしくて、かたはしほのあけて
見るに、錢なり。いと心えずなりて、さと面うち赤めて、あさましと
思へる氣色しるきを、院御覽じおこせて、朝臣こそむげに口惜し
くはありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。古より、殿上の

※

源氏物語にも云
この事常夏の
西川
桂川をいふ。

ひろはば消えな
む
源氏物語帯木

賭弓くまゆみといふ事には、これをこそ賭物にはせしか。されば今かけも
のと聞えたるに、これをしもいだされたるなむ、古の事知り給へ
るこそいたきわざなれ」とほゝゑみて宣ふに、さは悪しく思ひけ
りと、心ち騒ぎておぼゆべし。大方この院の上は、萬の事にいたり
深く、御心も花やかに、物に委しうぞおはしましたしける。夏の頃、水無
瀬殿の釣殿にいでさせ給ひて、ひ水めして、水飯やうのものなど
わかき上達部、殿上人どもにたまはせて、大御酒まゐるついでに
も、あはれ古の紫式部こそは、いみじくはありけれ。かの源氏物語
にも、「ちかき川の香魚、西川より奉れる石伏やうのもの、御前にて
調じて」と書けるなむ、勝れてめでたきぞとよ。只今さやうの料理
仕りてむや、など宣ふを、秦のなにかしとかいふ御隨身、高欄のも
と近く候ひけるが、うけたまはりて、池の汀なるを、ざさを少しし
きて、白き米を洗ひて奉れり。ひろはば消えなむとにや。これもけ

の巻に「拾は
げ消えなむと
見ゆる玉篠の
上の霞云々。」

光親卿
藤原光親。
院
後鳥羽院。

しかるわざかな。とて、御衣脱ぎてかづけさせ給ふ。御土器たびた
び聞しめす。その道にもいとほしたなうものし給ふ。何事もあい
ぎやうづきめでたく見えさせ給ふ御ありさま、千歳をふとも飽
く世あるまじかめり。(増鏡)

光親卿院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へ召されて、
供御をいだされて食はせられけり。もの食ひちらしたる衝重
を、御簾のうちへさし入れてまかり出でにけり。女房、あな汚な。
誰に取れとてか、など申しあはれければ、有職のふるまひ、やむ
ごとなきことなり。とてかへすく感ぜさせ給ひけるとぞ。

(徒然草)

菊池寛
文學者。京都
帝國大學出
身。

戸川播磨守
名は安清、蓬
庵と號す。將
軍家茂の儲子
となりし時、
選ばれて傳准
小姓組番頭と
なる。持明院
基政について
書法の奥祕を
極め、頗る書
に巧なりき。

道徳書抄
を記す
tamer
道徳

一二名君

菊池寛

十四代將軍家茂公は、先刻から惡戯ばかりして居る。戸川播磨
守が、懸命に書いた千字文の中の「雲騰致雨、露結爲霜」と云ふ楷書
の立派なお手本の方などは見向きもしないで、奉書のお草紙の
上にやたらに筆をのたくらせて居る。雲と書き始めた文句が雨
とならないうちに、筆がのたくつて龍のやうな滅茶苦茶な曲線
を幾つも書いて居る。一番最初の雲と云ふ字でさへ、まだはつき
りとした形を成して居ない。まして騰と云つたやうな難しい字
は、まるで書く意志がないらしい。雲の形が中途から崩れ出して、
雲中の龍のやうな出鱈目な曲線になつてしまふのである。そし
て時々眼がお草紙から離れて、傍の金蒔繪の火鉢の方に移つて
行くが、その火鉢の手ざはりの柔かさうな灰に立てられて居る

線香は、まだ半分もたつて居ない。それを見ると、愈、退屈し始めた。十四代將軍は、二間ばかりの下座に畏つて居るお氣に入りの小姓の一人に、目顔で笑ひかけて見る。が、小姓が案外眞面目くさつて居るので、また仕方なしにお草紙に雲と書き始める。が、雲はいつまで経つても混沌としたまゝである。雲と書き始めた筆が自由ゆづりに活潑に紙の上を無意味に一巡すると、家茂公は手荒く新しい紙をめくる。先刻から何枚眞新しい御献上物の奉書を無駄にしたかも知れない。奉書のお草紙は十五枚とぢになつて居る。線香の方は兎も角も、お草紙の方さへ片が附けば、その日のお稽古は終つたことになるのだ。線香がなか／＼たゝないと見てとつた家茂公は、今度は非常手段ひやうじゆんに出て、お草紙の方をなすり潰さうとして居るのである。

戸川播磨守安清は默然として家茂公の亂行を見て居た。彼が

習字の御相手として召出されてからまだ一月も経つて居ない。片假名やいろは假名のお稽古が濟んで、漢字のお習字に移るこ
とになつて、彼は御相手として特に召出されたのである。林家の人々などを差越えてのかうした沙汰は、彼としては絶大な名譽であつた。彼は老後の凡てをお役目の爲に盡くさうとして居る。そして將軍家の御手蹟を少しでもよくすれば、此の上の御奉公はないと思つて居る。

處が肝腎の家茂公は、彼が手を執つて教へ始めてから、一字一書も眞面目に書いたことはない。いろは假名の稽古の御相手が
大奥の中臈であつた爲だらう、習字と云へばたゞ惡戯をして時
間を潰しさへすればいゝと思つて居るらしい。

幼少の折から嚴しい師に就いて一點一畫も忽ゆるがせにしないやう
にと教へられた播磨守は、書道に對して可なり敬虔な心持を懷

いて居た。彼は口を漱いで手を淨めた後でなければ筆を執つたことさへない。それなのに、家茂公は彼の面前で悪戯ばかりして居る。書を書くことの尊さを少しも知つて居られない。慰み事が弄び事か何かのやうに書を瀆して居る。家茂公の爲すことが凡て播磨守の心を痛めた。七十を三つも越して居る一徹な播磨守の心を痛めた。彼はどうかして主君のかうした心掛を矯めなければならぬと思つた。その爲には縦令御不興を蒙らうとも御役御免にならうとも、厭ふところではないとまで思つて居た。お稽古の日が重なるに連れて、彼の決心は愈々堅くなつて來た。ところが今日は家茂公の悪戯が何時もよりもつとひどい。一字だつて眞面目には書かれないのである。

白絹のやうにつや／＼と光る奉書を五六枚も無駄にして、更に幾枚目かの紙に出鱈目な曲線を書かれやうとした時である。

播磨守は無言のまま、家茂公の筆を持つた掌をきゆつと握りしめた。家茂公ははつと本能的に駭かれたやうであるが、直ぐ子供ながらに自分の位置の優越を思ひ出されると威壓的な烈しい目附で播磨守の顔をぢつと見られたが、播磨守はびくともしなかつた。彼は柔い小鳥のやうに生温い掌を意識して強く、少しは懲罰的に痛さを感じしめる位に強く握りしめながら、奉書の上に「雲騰致雨露結爲霜」と書かせた。家茂公は筋ばつた掌で握りしめられる痛に堪へかねて、途中で二三度振りほどかうとしたが、播磨守はいつかな放さなかつた。が、その八字がすつかり書きをへられた時である。播磨守がその堅い把握の手を緩めて、ぢつと両手を膝に置きながら、公が書いたと云ふよりも自分の書いた八字に眺め入つた時だつた。赤くなつた右の掌をぢつと見て居た家茂公は、机の上にあつた青磁の水入を持つて立上ると、いき

なりたつぷりと湛へられて居た水を播磨守の白髪の頭へざぶ
りとかけたまゝ、

「わあつは、わあつは、わあつは、」

と笑ひながら大奥の方へ走り込まれたのである。

一徹な播磨守は主君から幼少な年齢から来る悪戯ではあ
るとは云へ、烈しい侮辱を受けたので、頭から落ちる雫を拭ひ
もやらず、机に両手をかけたまゝ、暫くは身動きもしないで考へ
込んだ。

駭いて駈寄つたお側衆の小出勢州は、懐紙を出して播磨守の
額から顎にかけて拭下しながら、

「餘りなお悪戯ぢや、御幼少ではあると云へ、餘りな御亂行ぢや、
御主君とは云へ、心外で御座らう、拙者から御大老に申上げて、き
つい御諫言を申し上ぐることに致さう、御勘辨なされい、御勘辨

なされい。」

と氣の毒さうに慰めた。

播磨守は黙然として勢州の拭くのに委せて居たが、濡れた上
下の威儀を正すと、心持聲を落しながら、

「井伊侯に申し上ぐるなど輕はずみな事をして下さるな、今日
と云ふ今日は、上様の御仁慈のほどが骨身に徹し申したわ、勢州
殿、有りやうは斯様で御座る。拙者今日はお机の前に坐つて以來
頻りに小用を催したのを、むつと辛抱致し居つたところ、老年の
悲しさには、懸命にお手を執つたみぎり、つい失念して尿を少々
洩らしたので御座る。君前に於てかゝる大不敬を犯したことが
若し大目付の耳に入らうなら、謹慎閉門はおろか、切腹の御沙汰
にも至らうかと、心も心ならず苦慮致して居つたのを、それとお
察し遊ばした上様は、拙者の失策を御自身の悪戯で掩ひかくし

て給はつたのぢや、御仁慈のほど骨身に徹し申したわ。」
と、播磨守は老いた兩眼に涙をひた／＼と湛へて居たのである。
小出勢州を初め、並居る近習達は、あつとばかり膝を叩いて、家
茂公の聰明な仁慈に感嘆の聲を上げたのである。

その事があつてから、此の逸話は江戸城の隅から隅へと傳へ
られた。登城する大名の一人から一人へと傳へられた。皆が異口
同音に名君家茂公の君徳を讃へぬ者はなかつた。たゞ之を聞い
た大老井伊直弼だけは、話を半分ほど聞くと眉を顰めながら、
「お悪戯にも程のあつたものぢや。」
と言つたまま、話手が家茂公を讃めあげるのを聞いても、にこり
ともしなかつた。(極樂)

萬里の長城
支那本部の北
方あり。延
長七百餘里。
土井晚翠
名は林吉。第
二高等學校教
授。

一三 萬里の長城の歌

土井晚翠

生ける歴史か、積り來し齡は高し二千年。
影は萬里の空に入る、名も長城の壁の上、
落日低く雲淡く、關山みす／＼暮の色。
征馬恨みて留りて、遊子俯仰の影長う。

絶域花は稀ながら、平蕪の緑今深し。
春乾坤に回りては、空悉く霞み行く。
天地の色は老いずして、人間の世は移ろふを、
歌ふか高く大空に、姿は見えぬ夕雲雀。

嗚呼跡舊りぬ、人去りぬ、歳は流れぬ、千載の昔に返り、何の地か今秦皇の霸圖を見ん。殘壘破壁聲も無し、恨も暗し、夕ぐれの春朦朧のたゞなかに、俯仰の遊子影一つ。

二

三皇五帝あと遠く、六王畢りて四海一。
四海の黔首ひれふして、雷霆の威に聲もなし。
「わが宮殿を高うせよ。」たび呼べば阿房宮。
「わが邊境を固うせよ。」たび呼べば萬里城。
春は驪山の花深く、秋は上都の雲暗く。

管絃の音雲に入る、舞殿の春の夕まぐれ。
袂を舉げて軽く起つ、三千の宮女花のごと、

三皇 支那上古の著名なる三人の帝王。天皇氏。地皇氏。人皇氏。(一説に伏羲・神農・黄帝)
五帝 支那上古の五名君。黄帝。顓頊。帝嚳。帝堯。帝舜。
六王 支那周室六代の王。文。武。成。厲。宣。幽。

臨洮 支那甘肅省關山道岷縣。

花を散らして玉觥に浮かす歌扇の風もよし。
彫龍の欄奥深く薫る蘭麝の香を高め、
疎籬を洩る、銀燭の光残りて夜や明けん。

西臨洮の嶺高し、こゝ遼東の谿深し。
流を埋め、山を截り、壘を連ぬる幾千里。
篝の焰天を焼き、劔の光霜凝りて、
殺氣夏猶もの凄く、守るは猛士二十萬。
漠のこなたに胡笳絶えて、匈奴の跡は遠ざかる。

三

北夷の憂絶えはてて、境は堅し、國安し。
先王の書も焚け果てぬ、天下の儒者も埋りぬ、
わが萬世の業成りぬ、君王の思しかなりや。

知るや夜半の阿房宮後庭深く森暗く、
歌臺の響よそにしてひとり嵐のつぶやくを。
「浮世の花の一盛褪むるに早き色見ずや。」

始皇も無上の風が吹き渡り
營所を空しく

聞け長城の秋の營旗の暗に消ゆる時、
また、く光露帯びて星の竊かにさゝやくを、
「富も力も一場の夢覺め果てん後思へ。」

不老不死の薬を乞ふに五百の宮が船へ来りて行つたを
春靜かなる東海の緑を涵す波の上

不死の金闕遠くして童女五百の舟いづこ、
絳霞の光天上の花とこしへに匂へども、
土に下れば沈澹の示すはひとり世の脆さ。

金人十二
始皇天下の兵器を収めて咸陽に聚め、鐘録金人十二を作る。

鐵椎云々
張良始皇を博浪沙に狙撃して成らず。
鮑魚云々
始皇巡狩の途、沙丘平臺に崩す。群臣秘して喪を發せず。鮑魚を以て其の臭を亂す。

至尊の榮は高くとも、名を玉籀皇統に留め得じ。
金人十二鑄なせども、かれに無象運命の劍ありの劍あり。
心を焦し身を碎くあゝ韓朝の一孤臣。

爾の策は成らずとも、無常の風は荒かりき。
天地靜かに夜更けて、江流秋に咽ぶ時、
ひとり圯橋のかたほとり燃ゆる心も鎮りて、
思ふやいかに、人力の脆きを、命の定りを。
鐵椎血無し博浪沙鮑魚臭有り沙丘臺。

五
嗚呼死屍未だ冷えずして、かれ萬世の業いづこ。
暗君嗣ぎて上に在り、佞豎の害よなどあらしき。
民の怒は火の如く、成卒は叫び兵は起ち、

師範学校
107 師範学校
蘭子

楚人の一炬閃きて、咸陽の宮皆焦土。

霽れざる空に虹懸けし、復道の跡今いづれ。

雲あらざるに龍飛べる、長橋の影はたいかに。

衰蘭露に悲めば、遺宮空しく草の宿。

驪山の麓春去れば、花悉く涙なり。

斬蛇の劍炎精の光も、さはれ極みあり。

甘泉殿の夜半の月、かれも浮雲の恨あり。

その移り行く世の習、二京の花をよそにして、

邊土に立てる長城の連雲の影あゝ絶えず。(曉鐘)

和辻哲郎
東洋大學教
授。東京帝國
大學文科大學
出身。

一四 樹の根

和辻哲郎

松の樹に囲まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、あまり考へて見た事がなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の浅い清らかな緑の葉が、永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落ちついた潤ひのある鮮かさを見せる。緑の葉は涙に濡れたやうなしほらしい色艶を増して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽やかな氣分が樹の色や光の内に漂うて、いかにも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折節可愛い小鳥の群が活き／＼した聲で囀り交して、緑の葉の間を樂しさうに往來する。それが私の親しい松の樹であつた。

然るに或時私は松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩してゐる所に佇んで、砂の中に喰込んだ複雑な根を見ることが出来た。地上と地下の姿が何と甚だしく相違してゐることであらう。一本の幹と、簡素に竝んだ枝と、楽しさうに葉先を揃へた針葉と、それに比べて地下の根は、戦ひもがき、苦み、精一杯の努力をつくしたやうに、枝から枝と分れて、亂れた女の髪の毛の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つてはゐた。しかしそれを目の前にまざ／＼と見たときには、思はず驚異の情に打たれぬわけには行かなかつた。私は永い馴染の間に、このやうな地下の苦が不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臓で感じたことがなかつたのである。彼の苦の聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。彼の苦しきやうな顔

を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。しかしその叫び聲や萎れた顔も、その機會さへ過ぎれば、すぐに元の快活に歸つて、苦の痕を滅多に残さない。而も彼らは、我々の眼に祕められた地下の營を一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實はこのやうな勞苦の上にも可能なのであつた。

此の時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親みを感じずるやうになつた。彼らは我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさし掛つた時に、數知れず立竝んでゐるあの大きい檜から、何とも云へぬ莊嚴な心持

を押しつけられた。なるほどこれは靈山だと思はずにはゐられなかつた。此の地を選んだ弘法大師の見識にもつくづく敬服するやうな氣持になつた。

それは外郭に連る山々によつて、平野から切離された急峻な山の斜面である。幾世紀を経て來たか分らない老樹たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほど、どつしりとした、迷の無い、壯大な力強さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひた／＼と人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向かつた。地下の烈しい營は既に地上一尺の處に明かに現れてゐる。土の層の深くない此の山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へるために、太い強靱な根は力かぎり四方へ廣がつて、地下の岩にしつかりと抱きついて

ゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は、一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入混つて、薄い地の層の間に複雑に絡み合つてゐる有様は、想像するだけでも我々に驚異の情を起させる。確かに山は烈しい生の力の營によつて、残る所なく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見る事は出來なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出來た。隠れたる努力の威壓が、神祕の影をさへ帯びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の浅い自分を恥ぢた。さうして地下の營に没頭することを自分に誓つた。今氣附いてもまだ遅くはない。

成長を欲するものは先づ根を確かにおろさなくてはならぬ。上に延びる事のみ欲するな。まづ下に喰入ることを努めよ。

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。四十に近づいて急に美しい花を開き、豊かな果實を結ぶ人がある。下に喰入る事に没頭してゐたからである。私の知人にも、理解のよい頭と感激の強い心臓と能く立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしなない人がある。彼は今生きることの苦しさ、に壓倒せられて、自分のやうなものは生きる値うちもないとさへ思つてゐる。しかしそれは、彼の根が一つの地殻に突當つて、それを突破する努力に悩んでゐるからである。やがてその突破が實現せられた時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか。私は彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生れる筈はない。

古來の偉人には雄大な根の營があつた。それ故に、彼等の仕事は味ふほど深い味を示してくる。現代には、たとへ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすれば、それが小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐはしないか、いかにすれば珍しい變種が出来るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてがあまりに人工的である。限られた土壤の中で、纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由に、其の手足を伸ばすことが出来ない。天を衝かうとするやうな大きな願望は、いちけた根からは生れる筈がない。偉大な物に對する崇敬は、また偉大なる根に對する崇敬である。ことを考へて見なければならぬ。

根のためには、出来るならば、地の質を選ばなくてはならぬ。果

培ふもの

制度問題

實のためには出来るならば根を培ふ肥料を選ばなくてはならぬ。根に對する情熱を鼓吹し其の根の本能的に好むところの土壤のありかを教へ、さうして幾千年來堆積してゐる滋養分をその根に供給してやるのが教育の任務である。學校が植木鉢に墮するか否かは人の問題であつて制度的問題ではない。修養は培養である。それが有効であるためには、先づ生活の大地に喰入らうとする根がなくてはならぬ。

人々はあまりに根の本能を忘れて居はしないか。いかに貴い肥料が加へられても、それを吸収する力の無い所では、何の役にも立たない。私は修養の機會と材料とが、我々の前に乏しいとは思はない。たゞそれに相當する根が小さいのを恐れる。汝の根に注意を集めよ。(偶像再興)

上の根を養ふ者は先が大地に根を打つ。根を栽培すれば肥料を適由に行ふ。此の世の中の現今の教育論を木に道に充つ。

本居宣長
號は鈴屋。國
學者。二三九
〇一三四六



一五 玉かつま

古き書どものこと

本居宣長

珍らしき書を得たらむには、親しきも疎きもおなじ志ならむ人には、かたみにやすく貸して見せもし、寫させもして、世にひろくせまほしきわざなるを、人には見せず、おのれひとり見てほこらむとするは、いとく心ぎたなく、物まなぶ人のあるまじきことなり。

但し得難き書を遠く便りあしき國などへ貸しやりたるに、あは道の程にてはふれ失せ、あるはその人俄かになくなりなどもして、つひにその書かへらずなることあるは、いと心うきわざなり。されば、遠きさかひより借りたらむふみは、道の程のことをもよくした、め、又、人の命は俄かなることとはかり難きものに

しあればなからむ後にもはふらさず、たしかに返すべくおきて
 おくべきわざなり。

此書は第一の巻
 玄米作を以てし、あやふあかつ
 此書は第一の巻
 玄米作を以てし、あやふあかつ
 此書は第一の巻
 玄米作を以てし、あやふあかつ

後もなほざりにうちすておきて、久しく返さぬ人の上に多きも
 のぞかし。

須賀直見
 伊勢松阪の
 人。鈴屋翁の
 高弟。

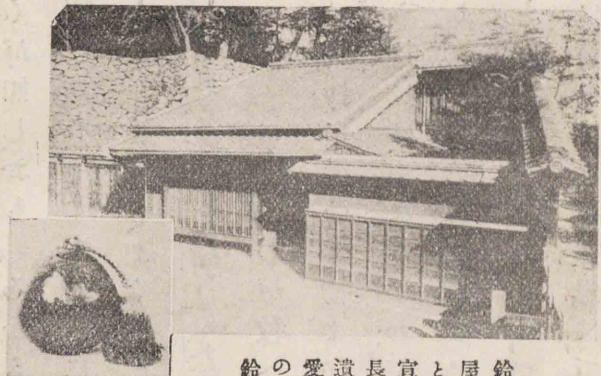
書讀むことの譬

須賀直見がいひしは、廣く大きな書を讀むは、長き旅路を行
 くが如し、おもしろからぬ所も多かるを經行きては、又面白く目
 醒むる心地する。浦山にも至るなり。又足強き人は早く、弱きは行
 くこと遅きも、よく似たり。とぞいひける。をかしたとへなりか
 う。

わが教へ子に誠めおくやう

われに従ひて物まなばむ輩も、わが後に又よき考のいできた
 らむには、かならずわが説になつみそ。わがあしき故をいひて、
 よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明かにせむ
 となれば、とにもかくにも道をあきらかにせむぞ、吾を用ふるに
 は有りける。道を思はで、いたづらにわれをたふとまむは、わが心
 にあらざるぞかし。

書うつし物書くこと



鈴の愛遺長宜と屋鈴

ふみをうつすに、同じくだりのうち、あるは並べるくだりなどに、同じ詞のあるときは、見まがへて、そのあひだなる詞どもを寫し洩らすこと、常によくあるわざなり。又一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへしては、そのあひだ一ひらを、みながらおとすこともあり。これらつねに心すべきわざなり。又よく似て、見まがへ易きもじなどは、ことにまがふまじく、たしかに書くべきなり。これは寫しがきのみにも

あらず、おほかた物書くに心得べき事ぞ。

田舎に古の雅言の残れること

すべて田舎には古の言の残れる多し。殊に遠き國人のいふ言の中には、おもしろき言どもぞまじれる。おのれ年頃心をつけて、遠き國人のとぶらひきたるには、必ずその國の詞をとひ聞きもし、その人のいふ言をも心とめて聞きもするを、なほ國々の詞どもを普く聞きあつめなば、いかにおもしろきこと多からむ。

近き頃、肥後の國人の來たるがいふ言を聞けば、世に「見える」「聞える」などいふたぐひを「見ゆる」「聞ゆる」などぞいふなる。こは今の世には絶えて聞かぬ雅びたる言葉づかひなるを、その國にてはなべていふにやと聞えければ、ひたぶるの賤山がつは、みな「見ゆる」「聞ゆる」「訝ゆる」などやうにいふを、すこし言葉をもつくりふほどの者は、多くは「見える」「聞える」とやうにいふなりとぞ語りける。そはなかり、今の世のいやしきいひざまなるを、なべて國々の人のいふから、そをよき事と心得たるなんめり。いづれの國にて

玉勝間
十五卷。本居
宣長の隨筆。

も賤山がつのいふ言は、よこなまりながらも、多く昔の言葉をいひ傳へたるを、人しげく賑はしき里などは、他國人も入交り、都の人なども事にふれて來通ひなどするほどにおのづからこゝかしこの言葉を聞きならひては、おのれもことえりして、なまさかしき今様にうつり易くて、昔ざまに遠く、なか／＼いやしくなむなりもて行くめる。まことや同じ肥後の國の又の人のいへる、かの國にて「ひきがへる」といふものを「たんがく」といふなるは、古の「たにく」のよこ訛なるべくおぼゆと語りしは、誠にさもあるべし。此のたぐひのこと、國々になほ聞けること多かるを、今はふと思ひ出でたる事をいふなり。なほ思ひ出でむまゝにまたもいふべし。(玉勝間)

中島廣足
號は樞園。國
學者。(二四
五〇―二五二
四)

一六 小品三章

夜學

中島廣足

寺々の初夜の鐘のひゞきも收りて、皆人も寝たるに、いとうれしう、燈火あかくしなして、文机に打向かひたる、いみじう心すみ

燈下
夜話

蹟筆足廣島中

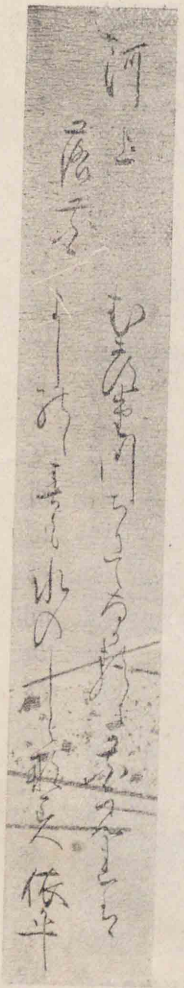
て、晝見たりしあたりの、何ごころなくて過ぎにしも思ひ知られ、て、深き心ばへある條々も、おのづから解き得らるかし。かゝげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さし添へつゝ、見もてゆくに、遠き世の人もたゞさし向かひ語らふ心地す。さうしつくりて、をかしきふしぐ、あるは、ふと思ひ得たることなどをば、墨おしす

石川依平
國學者。本居
宣長の門人。
(二四五—
二四一九)

蟲の音

石川依平

りつ、書きつけなどするもをかしどりのころは夜深きにやと
思ふにいとく明けはなれたるしばしとてうちねぶる夢のう
ちもあだしごとならむやは。(柳園文集)
家なみしきたる都のすまひは前裁もほどなけれど、萩すゝき
などはさすがにをり知りがほなるを、あはれと見わたるゆふつ



石川依平筆蹟

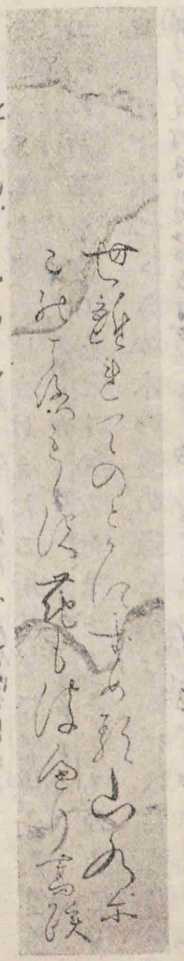
かたに、親しき人のもとより、昨日嵯峨野にもとめしなりとて、蟲
どもあまた籠に入れておこせたり。めづらかにて、とくわらはよ
びてはなたせつゝ、なほながめをるにもとよりのにやあらむい
ままありのにやあらむ、かつく鳴きいでたるいと興あり。月さ

伴蒿蹊
名は資芳。國
學者。(二三九
三—二四六
六)

うけえたる所

伴蒿蹊

しのぼりては、まして音もすみゆくにはるけき野へまでおもひ
やられて。(柳園集)
あめつちの間にありとあるもの、みなおのづからにうけえ
る所あり。いまた一つ鳥のうへもていはむに、本草の實を喰ふ
べきものと、這ふ蟲を喰ふべきものと、嘴のやう異にて相通はぬ
あり、かれこれを共に喰ふべきあり。相羨むともかなふべからず、



伴蒿蹊筆蹟

いかにともせむすべなかるべし。しかはあれど、口あれば喰ふべ
し、肩あれば着るべし。肩ありて着ず、口ありて喰はざるはたが
やまちぞ。上が上より下が下まで、身のほどくにつきて世わた

木にふりて云々
以二若所
求二若所
猶二縁レ木而
求二魚也
子

らひをなすべきための心ばせといふものあり、手足あり、これは
たかの嘴のごと天の與ふる所にして、意を用ひて、手足を休むる
もあり、手足を動かして意を用ひざるもあり、ともに働かすべき
きはもあらむ。さればうけたる所のまに、士農工商おのれ
おのれが業を守らひつとめなば、まどしとても飢ゑこゝゆるに
は及ばず。木つゝきの木の裏の蟲を求むるにはたらじを暮ると
明くことに懈りながら、幸をもとむる人は木によりて魚をもとむ
るにもたぐふべくなむ。(閑田文章)

白居易

井梧涼葉動

鄰杵秋聲發

獨向檐下眠

覺來半牀月

一七 青葉のながめ

貝原益軒

貝原益軒
名は篤信。福
岡侯に仕へし
儒者。(二二九
〇一三三七
四)

惜めどもとまらぬ春すでに去りぬれば、呼ばぬに來たる夏衣
のうらめづらしく今めかしうあらたまれるころほひ、大かたの
空のけしき心ちよげなるに、青葉の梢わかやかに、物ごとに春に
立ちかはりて、又世ことなるありさまなるも、いとなむめでたき
縁陰晝寂を生ずれども、わびしからず、閑談にふける人は、繁花に
もまされりとす。をりまち得たるほとゝぎすの初音まづなつか
しくて、鶯のなく音すでに老いにたるにかはれる心地ぞすなる。
もろこし人は、杜鵑の聲きくことを憎めども、我が日の本にては
昔よりこれをあはれみて、歌にも多くよめり。夜もすがら空もと
どろに啼きわたれども、聴く人みな、あなかまとは思はず、おほか
らぬ所は、今一聲だに聴かまほし。又啼きゆく方の人も待ちなむ

韓偓
支那唐代の學
者。

李夢陽
支那明代の學
者。

思へば過ぎゆくも更に恨むべからず卯の花の垣根の雪にま
がへるもひとり此の月の名をおひて美をもちにすと云ふべ
し。
美を身はす

およそ卯月のけしきは清く和かにして空はれ雨久しく降ら
ず餘寒つき日いよく永くしていとま多ければ出で遊ぶによ
し。朝まだき起きて園をうかぶふにも風暖かにしてなやみなけ
れば日々にわたりて見所おほく草も木もみな緑の色をあらは
して各其の趣をなせるは天地のめぐみをうけしまに生け
る類よりさらに私なくしていぶかしみなくなつさはれぬ韓偓
が詩に四時最も好しこれ三月といへる誠に然りされど年たか
くなりぬれば暑さ寒さをわびて一とせの内いと心になへる
時は卯月にしくはなし。さればにや明の李夢陽が四時の景初夏
にしくはなし。といへるも先輩にかはりていみじくうべなるか
な。

卯月
五月
神奈月
御走

尺管(ヒラス)

竹得鏡(ノリ)

卯月はかく空晴やかなれどやがて五月になりぬれば大空の
けしきさいつ頃に引きかへ五月雨久しく續きをりしは鳴神
おどろしくして降らぬ時だに曇らはしく物のあやめも知ら
ず園をうかぶふべきひま稀にして常にたれこめて日數をふる
もわびし。

夏もやうく深くなりぬれば木として繁らざるはなく日々
に物を引きのぶるやうに見えてびたすらに緑の色深き夏木立
こそ花にも劣るまじけれ春の花はところくに咲き
て稀なり夏は山も里もありとしある草木ごとにうちはへてみ
な緑の色なれば春にことなる眺なり八千草に植ゑあつめてな
づさひし前栽の草木ども雨をおびて各其の梢をあらはし所得
貌に心にまかせておひ茂るも嬉しと見ゆ昔おぼゆる花橋の薫

田舎水々々

白樂天

支那唐代の大詩人。

早苗とる頃 田家は雨をまち得て忙はしくにぎはし。此の頃遣

れる夜は追風もいとなつかし。

水の外に聳えたるをあくまで見るこそ、ことにすぐれて心を快

と憐むべし。夏山のけしき、青みわたりたる高き峯大空に連りて、

くする眺なれ。白樂天が眼を放にして青山を見る。といへるが如

し。

(樂訓)

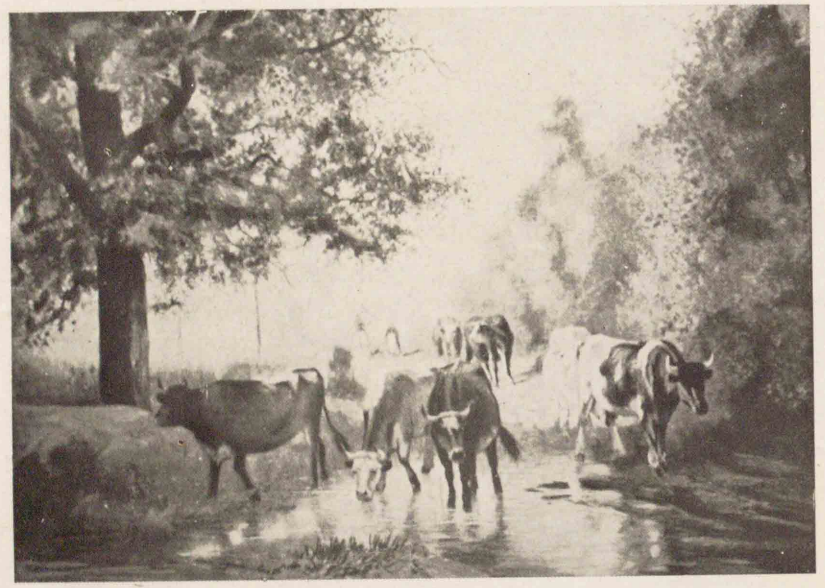
し。

藤原俊成

雨そくぐ花たちばなに風すぎてやまほとしぎす雲にな
くなり

紫式部

たが里も問ひもや來ると時鳥こゝろのかぎり待ちぞわ
びまし



水草清



吹くおらに

秋の草木しあるは

山を

山とふらん

山を

山を御倉

山とふらん

と云ふ事はしあふは

一八 四季の雨

松平定信

松平定信 老後の號は樂翁。徳川吉宗の代に幕府の老中として治績を擧ぐ。(二四一八―二四八九)

「月の夜半こそ思ふ隈もなく、心の底も澄渡りぬるものなれ。されど闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに、風高く吹交ふは、又優りぬるやうに覺ゆ」といへば、雨ぞいと優りぬるを。」といふ、いか
に。と問へば、いでや早天の雨は更なり、草木の花咲き、實のるも、皆此の恵にこそあんなれ。又其の感情の深さをいはば、「今日は元日なりけり。」といふに、雨そほ降りて霞み渡りたるは、「げに春かな」とぞ思ふめる。師走の晦のどやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いと細やかに降れるが、衣潤せども降るとは見えず、軒の玉水も間遠に音して、住みすてし蜘蛛のいに玉ぬく景色、庭の面の枯生の底に緑や、添行くも、柳の絲の動きもやらで露添ふも、共にいと長閑な

天明八年正月二日
 松平越中守義泰
 仕候常年米願
 格別之高直
 無不仕安堵
 宜御威信御
 仁惠下々行
 越守之命は
 勿論之事に
 子之命も必
 死に懸候て
 奉事右條々
 不調御威信
 御仁徳不
 御仁徳不
 仕候は御威
 候はば私に
 去仕候様生
 奉願候様生
 出相不仕汚
 名相不仕汚
 功は流し候
 幸井に養家
 忠に仕候へ
 候に成就之
 偏に奉心願
 敬白

方ば、死去仕候
 に相叶ひ候義
 と奉存候右
 之仕合に付
 以二御憐愍金
 不敷通下々
 御威信御仁惠
 行届中興全
 偏に成就之
 候に成就之
 敬白

燈火挑けても何となく光濕りたるに鐘の音のほのかに響き
 来るも心澄渡りぬるぞかし。その外梅が香の濕り夜深く匂ひ渡
 天明八年正月二日
 松平越中守義泰
 一命願御威信御
 仁惠下々行
 越守之命は
 勿論之事に
 子之命も必
 死に懸候て
 奉事右條々
 不調御威信
 御仁徳不
 御仁徳不
 仕候は御威
 候はば私に
 去仕候様生
 奉願候様生
 出相不仕汚
 名相不仕汚
 功は流し候
 幸井に養家
 忠に仕候へ
 候に成就之
 偏に奉心願
 敬白

松平定信筆蹟

も花に憂しとかこちぬるもあは
 れはありけり。春も老いゆく頃蛙の
 時得顔にすたくもをかじ。郭公の初
 音いかにも思ふ頃。村雨のはら
 と降出でたるも。五月雨の幾日も降
 暮して書の卷々繰返しつゝ居たれ
 ば何となく世の中の事にも遠さが
 りぬる心地ぞする。又暑さに堪へか
 ぬる頃雲の漲り出づる勢ありて風
 一しきり吹落ちたるに、柳蓮などの葉裏白く見せたるも涼し
 やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後には頻りに降來

て物音も聞えず、土の匂ひ来るもいと心地よし。軒端は玉の簾か
 けたらむ様に玉水の絶間なく落ちたるに、庭は一つ湖になりて
 あるは瀧落し又は水走らせたるに、人々暫し物いはで打守り居
 たるもをかしや、雲薄くなれば池の面には數ふるばかり雨見
 えて、小鳥など庭へ躍り出でて餌拾ふやうなり。初め雲の立出で
 し方は、はや空の一角に見えて、虹など見ゆるに、木々の緑の
 庭濼に影見ゆるもいと涼し。老いたる女など、雷の音に驚きて這
 出でたるが、今日のは幼かりし時のごとく霽れにけり。今時の
 はかく霽るゝ事稀なり。『なんどはや繰言いふもあり。』彼はかくあ
 わてし。『などかたみにいひて笑ひとよみつ。』今日は蚊も少かる
 べし。雷の音もいと微かなり。この頃の暑さも忘れぬ。とて端近う
 出づれば、夕月の光さし渡りて、草木の露も玉なすに、肥え膨れた
 る蛙の物待ち顔に空打睨みて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。

秋來る頃の雨は昨日に變りて、何となう淋し^{あせ}萩の上^{あせ}風外^{あせ}山の鹿^{あせ}
の音なんど、月よりも身に沁む心地ぞする。常に聞馴れし^{あせ}笕の水^{あせ}
の音までも、あはれ深くこそ。月の前の村雨も亦をかしまいてや
や^{あせ}夜寒の頃^{あせ}鳴^{あせ}嗚^{あせ}したる^{あせ}蟲の音^{あせ}、雨の^{あせ}を^{あせ}や^{あせ}みに^{あせ}幽^{あせ}かな^{あせ}なる^{あせ}聲^{あせ}して、
枕近く鳴きよるもあはれなり。この雨に木々も染めなむと思へ
ば、茸なども生ひいでなむ。栗もはや落つべし。などと、童の物淋し
げに燈に向かひつゝ、言出づるも、げに様々なり。夜深き鐘の音の
打濕るものから、さすがに秋は聲^{あせ}深^{あせ}え^{あせ}て^{あせ}聞^{あせ}ゆる^{あせ}に^{あせ}ぞ、今は世に亡
き友の事も思ひ出でて、鐘撞く人の心をもあはれと思ふばかり、
感情は深かりけり。紅葉の染めそふも、白菊の移り行きで一盛見
するも、尾花の露重げに打萎れたるに、龍膽の怨深く咲きたるあ
たりも、^{あせ}朝顔の皆枯れたる中に、さ^{あせ}や^{あせ}かに^{あせ}赤^{あせ}う^{あせ}咲^{あせ}出^{あせ}
でたるが晝過ぐるまでも、凋み後れたる、亦あはれなり。野分の風

はおどろ^{あせ}しきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがにあ
はれを添ふるは、秋の習^{あせ}なるべし。時雨の^{あせ}音^{あせ}して夕日に白く
降來るも、又音かへて枕とふもをか。月よりも、闇の夜よりも、あ
はれ深きものには侍らずや。といへば、かやうにいひ並べてはげ
にもといふべからむが、一年も降る心地して、よみ見れば、この雨
はをとつ日より降出でしをと思ふ心は變らじと、心の中に思ひ
て聞き居しも、亦をかしかりけり。(花月草紙)

ことわりなきがことわりのまことなり。ことわりのごと行
はるゝものならば、何のかたきこともあらじを、さもしらで、
人とあらそひ、政をそしりなどして、たかぶるものは、ことわ
りのまことをしらぬとやいふらむ。(花月草紙)

吉田兼好
姓は卜部、洛
外吉田に居り
しにより吉田
と稱す。吉野
朝時代の人。
文才あり、和
歌をよくす。
(一九四二—
二〇一〇)
栗栖野

山城國宇治郡
醍醐寺の邊。

賀茂の競馬
山城國葛野郡
上賀茂の社頭
にて行はる。

一九 徒然草八題

栗栖野

吉田兼好

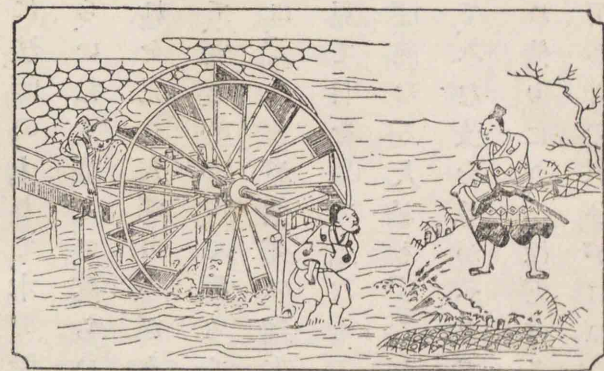
神無月の頃栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入るこ
と侍りしに、遙かなる苔の細道を踏みわけて、心細く住みなした
る庵あり。木の葉に埋るゝ、寛のしづくならでは、つゆ音なふもの
なし。闕伽棚に菊紅葉など折りちらしたるさすがに、住む人のあ
ればなるべし。かくてもあらければ、よとあはれに見るほどに、か
なたの庭に、大きな柑子の木の枝もたわよはなりたるが、まは
りをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからま
しかばと覺えしか。

競馬

五月五日、賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雜人立隔てて見

えざりしかば、各下りて、埒馬場のきはによりたれど、ことに人多く立
ちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向なる樗の木
に法師の上りて、木の股についで、もの見るあり。取りつきなが
ら、いたう眠りて、落ちぬべき時に目を覺すことたび／＼なり。こ
れを見る人、嘲りあざみて、世のしれものかな。かく危き枝の上に
て、安き心ありて眠るらむよ。といふに、わが心にふと思ひしまゝ
に、われらが生死の到来、たゞ今にもやあらむ。それを忘れてもの
見て、日を暮す、愚なることはなほまさりたるものを、といひたれ
ば、前なる人ども、まことにさにこそ候ひけれ。最も愚に候。といひ
て、みな後を見かへりて、こゝへ入らせ給へ。とて、所を去りて呼入
れ侍りにき。かほどのことわり誰かは思ひ寄らざらむなれども、
折からの思ひがけぬ心ちして、胸に當りけるにや。人木石にあら
ねば、時にとりて物に感ずることなきにあらず。

水車



古刊本徒然草挿畫

龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられむとて、大井の土民に仰せて、水車を作らせられけり。多くのあしを賜ひて、數日にいとなみ出してかけたりけるに、大方めぐらざりければ、とかくなほしけれども、遂にまはらで、徒らに立てりけり。さて宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかにゆひて参らせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水を汲入るゝ、事めでたかりけり。よろづにその道を知れるものは、やむごとなきものなり。

石清水詣

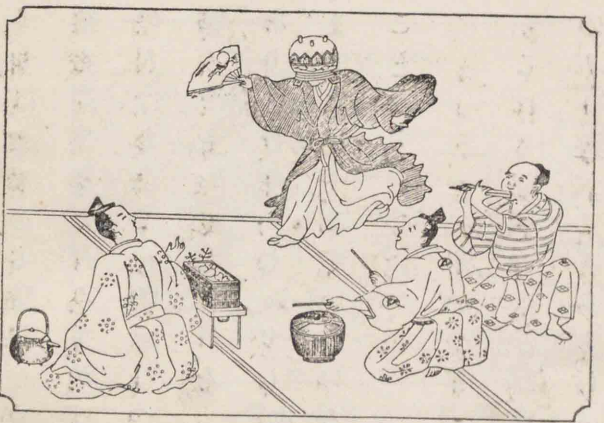
石清水 京都府綴喜郡 男山の石清水 八幡宮。 仁和寺 京都府葛野郡 花園村にあり。眞言宗の本山。御室といふ。 極楽寺 京都府紀伊郡 深草にその址あり。

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心うくおぼえて、ある時思ひ立ちて、たゞひとりかちより詣でけり。極楽寺高良など拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人にあひて、年頃思ひつること果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に山へ登りしは、何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきことなり。

鼎かつぎ

これも仁和寺の法師、童の法師にならむとするなごりとして、おのゝ遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞出でたるに、満座興に入ること限なし。

ばしがなでて後、抜かむとするに、大方ぬかれず、酒宴ことさめて、いかゞはせむとまどひけり。とかくすれば、頸のまはりかけて、血



古刊本徒然草挿畫

さこそ異様なりけめ。ものをいふもくもり聲に響きて聞えず。

「かゝる事は書にも見えず、傳へたる教もなし」といへば、又仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など枕上に寄り居て、泣き悲めども、聞くらむとも覺えず。かゝるほどに、ある者のいふやう、たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなか生さざらむ。たゞ力を立てて引き給へ。とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、頸もちぎる。ばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら、抜けにけり。からき命まうけて、久しく病み居たりけり。

もろ矢

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢を手挿みて、的に向かふ。師のいはく、初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢をたのみ、始の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。といふ。僅かに二つの矢、師の前にて一つをおろさか、にせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずといへども、師こ

れを知る。この戒萬事にわたるべし。

道を學する人夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇ろに修せむことを期す。いはむや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らむや。何ぞたゞ今の一念において、たゞちにすることの甚だ難き。

高名の木のぼり

高名の木のぼりといひし男、人を捉て、高き木にのぼせて梢を伐らせしに、いと危く見えし程は、いふ事もなくて下る。時に軒だけばかりになりて、あやまちすな心して下りよ。とことばをかけ侍りしを、かばかりになりては、跳び下るとも下りなむ。いかにかくはいふぞ。と申し侍りしかば、その事に候目くるめき、枝危きほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。過はやすき所になりて、必ず仕ることに候。といふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめ

にかなへり。

養ひ飼ふもの

養ひ飼ふ物には馬牛繋ぎ苦むるこそいたましけれど、無くてかなはぬものなれば、いかゞはせむ。犬は護り防ぐつとめ人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど、家毎にある物なれば、殊更に求め飼はずともありなむ。その外の鳥獸、すべて用なき物なり。走る獸は檻に籠め、鎖をさゝれ、飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ、野山を思ふ憂止む時なし。その思わが身にあたりて、忍び難くば、心あらむ人、これを娛まむや。生を苦めて目を歡ばしむるは、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せしは、林に樂ぶを見て、逍遙の友としき。捕へ苦めたるには、あらず。およそ珍らしき禽、あやしき獸、國に養はず。とこそ文にも侍るなれ。

王子猷
名は徽之。子猷はその字。
晉の王羲之の
子。
文にも
珍禽奇獸、不
レ育ニ于國。(尙
書)

本通上曜日試験

相馬御風
名は昌治。文
學者。早稻田
大學出典。

二〇 徒然草の著者

相馬御風

徒然草一卷は、兼好自らが一卷に纏める積りで書いたものでもなく、又彼自らの手で斯くの如く纏め編んだものでもなくして、彼が見たり聞いたり感じたりしたことを、草庵生活のつれづれに書きつけて置いたのが、草庵の壁などに貼られて残つてゐたのを、曾て彼に召仕はれてゐた少年が形見として所持してゐた草稿などと共に、兼好の歿後に知人が一書に編成したものであるとは、史家の一様に云ふところである。

そして或史家は兼好を以て雑駁な人であつたと云ひ、或史家は單なる趣味の人に過ぎないと云ひ、或史家は當時の新思想であつた佛教的厭世主義と舊思想である情緒主義との矛盾を一身に籠めた人であり、そこが彼の性行の面白い點であると云ひ、

更に又ある史家は、さやうな矛盾の存する如く見えるのは、彼の上の皮であつて、根柢はやはり厭世主義を以て一貫してゐると云つてゐるとの事である。

けれども、今私が通讀して感じたところは、そのいづれでもなかつた。彼の言説の間に矛盾があると見るのは、見る人の心からである。世の中にはかういふ人もある。又かう云ふ人もある。かうもあらう、あゝもあらう。と云ふだけで、兼好自身はいづれをも、かうあらねばならぬ。と主張はしてゐないのである。即ち兼好によつて書かれた矛盾は、世の中の矛盾であつて、兼好自身の矛盾ではなかつた。

兼好は決してさばく人ではなかつた。これか。あれか。と云ふ疑問から、彼はもう超越してゐた。その證據には、ある雪のおもしろう降りたる朝の一段において

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがりにふべき事ありて
文をやるとして、雪のこと何ともいはずりし返事に、この雪いか
が見ると一筆のたまはせぬほどの、ひがくしからむ人の仰
せらるゝこときゝ入るべきかは、かへすく口惜しき御心な
りといひたりしこそをかしかりしか。今はなき人なれば、かば
かりのこととも忘れ難し。

とあるのを見て、それが彼自身の経験であつたらしいにも拘
らず、彼は手紙をやつた自分と、返事をよこした先方との何れに
對しても、何等の批判をも加へはしなかつた。そして僅かに、今は
亡き人なればかばかりのこととも忘れ難し。と云ふ一句を以て、兩
者の矛盾を矛盾のままに純化してあるに過ぎないのであつた。
花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは、雨にむか
ひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに

なさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、
見どころ多けれ。歌のことばがきにも、花見にまかれりけるに、
はやく散りすぎにければ。とも、さはることありてまからで。な
ども書けるは、花を見て、といへるに劣れることかは。

望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉近く
なりて待ちいでたるがいと心深う、青みたるやうにて深き山
の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がく
れのほど、又なくあはれなり。椎柴しらがしなどの濡れたるや
うなる葉の上に、きらめきたるこそ身にしみて、心あらむ友も
がなと、都こひしう覺ゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは、春は家を立ち
去らでも、月の夜はねやの中ながらも思へること、いとたのも
しうをかしけれ。

このやうに彼は果敢なそのものを樂み、矛盾しながらを樂むことの出來た人であつた。徒然草を通じて見たる、彼が一見何等の主義定見がなく、知るかぎりの事は神儒佛老莊の學は勿論、歌でも、有職故實でも、武藝でも、何と云ふことなしに、矛盾をまかまはず、無暗に書散らした散漫雜駁の人のやうに見えるのも、むしろ彼の何ものにもこだはらないで遊び得たほがらかな心の姿を示すものではなかつたらうか。文字の法師、暗證の禪師たがひに量りて、おのれに如かずと思へる、ともにあたらず。と彼自らも説破してゐる如く、彼自らはつひに一處に固定し了する人ではなかつた。彼は要するに觀念に徹した人ではなくして、味に徹した人であつた。

四十二歳にして始めて出家した彼は、佛門の修行においても到底謂ふところの大徳の境地に到らうとするやうなことは不

可能であることを、自らも十分に知つてゐたであらう。否寧ろさうした心の向け方は彼自身の嫌つたところであらう。さうかと云つて、彼はかの長明法師の如く、斷ちがたい浮世の絆を強ひて斷ち、努めて枯木寒巖の境地に辛うじて心の安慰を得ようとするやうな消極的な厭世家でもなかつた。随つて、長明の「住まずして誰か閑居のたのしびを知らん。」と云ふやうな誇をも彼は持たなかつた代りに、草の庵を愛するも科とす。閑寂に著するも障なるべし。といふやうな苦も、また、おのづから都に出ては乞食となるを恥づ。と云ふやうな煩も彼にはなかつた。それほど彼はのびやかであつた。それほど彼の天地は廣かつたのである。

彼はよくさまざまな浮世の味をも解した。しかも彼は決して謂ふところの生臭坊主ではなかつた。何ものの味をも味ふことの出來た彼は、しかしながら何ものの味にもとらはれない彼で

あつた。如何なる境地にあつても、彼の心は常に白雲の如く閑か

150

であつた。彼は一面から見れば確かに厭世家であつた。しかも他面から見れば、彼は正しく凡てのものに遊ぶことの出来る樂天家であつた。要するに、彼は理に徹した人ではなくして、味に生きた人であつた。嚴密な意味での僧ではなくして、人生の味に生きた一個の風雅人であつた。佛門の弟子としての彼を想ひやつて見ても、彼は決して修した人ではなくして、味つた人であつたやうにしか思はれない。眞俗二諦の間の一種微妙な中道に、彼は生きつゞけたのであつた。

誰か兼好を以て名僧と呼び、善知識と呼び、大徳に擬し、聖僧と稱するものがあらうぞ。彼は決して古來の名僧の列に加るべき人ではなかつた。彼と席を同じうすべき人は、斷じてその種の人ではなくして、他に立派な先達がある。雪舟然り、利休然り、芭蕉然

り、良寛然り、愚庵然り、——而してそれらの仲間にあつて、彼は正に立關番を勤め、時には賄の役をも勤むべき最適者であるやうにさへ思はれるのである。

西行の和歌に於ける、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其の貫通するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見るところ花にあらずと云ふことなし。おもふところ月にあらずと云ふことなし。

かう芭蕉が説破した、その風雅の道こそ、同じく兼好の辿り入らうとした道ではなかつたらうか。

山は靜かにして性をやしなひ、水は動いて情をやしなふ。靜動二つの間にして棲を得るものあり。

と芭蕉が仲間の一人を賛した、——その靜動二つの間こそ、同じ

く兼好の得ようと求めた境地ではなかつたらうか。

よろづの事は頼むべからず。愚なる人は深くものをたのむが故に恨み怒ることあり……身をも人をも頼まざれば是なる時は喜び、非なる時は恨みず。左右廣ければさはらず。前後遠ければふさがらず。せばき時はひしげくたく。心を用ゐること少しきにしてきびしき時は、物に逆ひ争ひてやぶる。寛くして柔かなる時は一毛をも損せず。

かう彼は云つてゐる。そして更に、

人は天地の靈なり。天地はかぎるところなし。人の性何ぞ異ならん。寛大にして窮らざる時は、喜怒これに障らずして物のためにわづらはされず。

とまで説きすゝめてゐる。

この何ものをも頼まずして、しかも何ものをも樂むことの出

來る寛く柔かな心。天地の如く寛大にして窮らざる心。それが彼の求めた最後の心境であつたらう。よろづのものをよそながら見ることの出來ぬ人を憐んだ彼は、又何につけても、物をのみ見んとする人をも憐み、何事につけても、わりなく見んとする人、即ち無理やりに見ようとする人をも憐んだ。そこにもおぼろげながら彼の人生觀照の態度を窺ふことが出来る。

彼は恐らく極めて寛かな柔かな心と繊細な官能との持主であつたであらう。しかも何事にもこだはることのなかつた彼は、恐らく如何なる人の友ともなり、如何なる人をも友とすることの出來た人であらう。往々彼を以てすね者と見、皮肉屋と見るやうな人のあるのは、私たちにはどうしてもわからない。少くとも徒然草を通して想像した彼には、寸毫の皮肉も、意地悪さも見出すことは出來ない。彼は斷じて白眼にして世を睨むやうな人で

はなかつたと信ずる。

たゞ私たちの彼に惜むところは、氣品の高さを缺いて居た點である。又寛かさ柔かさはありながら、静けさと潤ひとにおいて缺くるところのある點である。彼はよく人生の味に徹した。しかし、その底に横たはる静けさを味ふことが出来なかつた。閑を味うて寂に徹しなかつた。彼は又何ものをもよく味ふ事が出来た。しかし、同時に何ものをもしみと、味ふことが出来なかつた。そこがどうしても私たちをして頭を下げさす事の出来ない彼の弱點であるやうに思はれてならない。そしてそこが西行芭蕉良寛などと彼の異なるところでもある。(雜草花)

立石寺にて

しづかさや岩にしみ入るせみの聲

芭侍人蕉

立石寺
山形縣東村山
郡。

奥田正造
成蹊高等女學
校長。東京帝
國大學文科大
學出身。

茶道茶の精神

奥田正造

茶道の精神を簡單につくす言葉は和敬清寂の四字である。此の四字が尊重せられつゝ傳はつた事は貴い事であり、又嬉しい事である。

和は和合の和、調和の和、和樂の和である。禮の用は和を貴しとなす。人相我相に役せられ、知るに驕り、知らざるを辱むる如き人は、人として人に交る資格がない。併し如何に和が貴いと云つても、和だけでは狎れるといふ事に移り易いので、これを攝するに敬を以てせねばならぬ。敬とは自己に對しては慎み、他人に對してはうやまふといふ心持である。それが形にあらはれたものが儀容である。清は清潔清廉である。物と心との清である。以上に加へて心のおちつき、即ち寂が具るやうになつたならば、申分は無

珠光
足利時代に於ける茶道の祖。奈良稱名寺の住職。二〇八二—二一六二

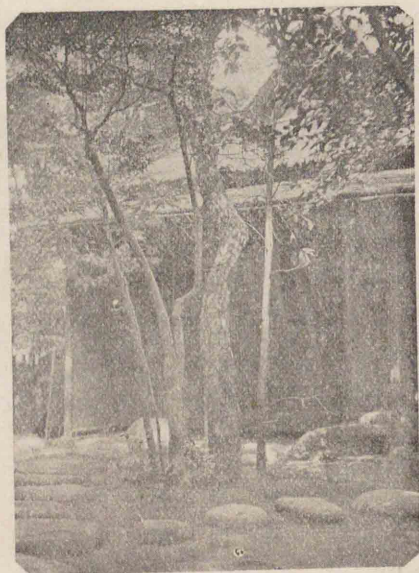
い。茶道は昨日屈強の若者も今日は戦場の露と消え、高壯の建物も忽ちにして灰燼に歸する。戦國の果敢なくそはくしい時代の氣分に對する鎮靜劑として要求せられ、發達したものであるから、兵馬倥傯の間に得られる僅かの暇を利用して、時間を超越した悠久の自己に悟入すべく、其の一擧手一投足にも心の落附を宿す事を要求する。これが即ち寂である。此の和敬清寂の四字を標的として、各自相應の天地を開く所に茶の妙味がある。

以上の四綱領は茶道の大精神である。併しよく考へると、これは單に茶室裏に限る事ではない。人生萬般皆此の四字で律せられる。修行の道場は四疊半でも、活用の天地は事々物々に互り、念刻々に普く、依つて以て日常生活の準據となるわけである。茶道の徳は實に茲に在る。珠光が義政に答へた言葉の中に、賓主應接の禮、彼此談論の和、しかもその交水の淡きに似て、清遊仙の如

利休
千家流茶道の祖。秀吉に仕ふ。(二一八一—二二五二)

六窓庵
東京帝室博物館庭内にあり。六窓を以て名ある草庵。

し。』といつてゐる。利休は「茶は精行儉徳の人によろし。」といつて居る。此の精行儉徳といふ四字は、和敬清寂の四字を姿に現したやうなものである。



(口表)室茶庵窓六

さい室も廣く、胖かに住みなし、細く短い茶杓を拭うても、太く長い物を清むると同じ様な心をやどし、軽い羽箒を動かしても、おだやかな扱に心の莊重を表し、重い水指を運んでも、易々として

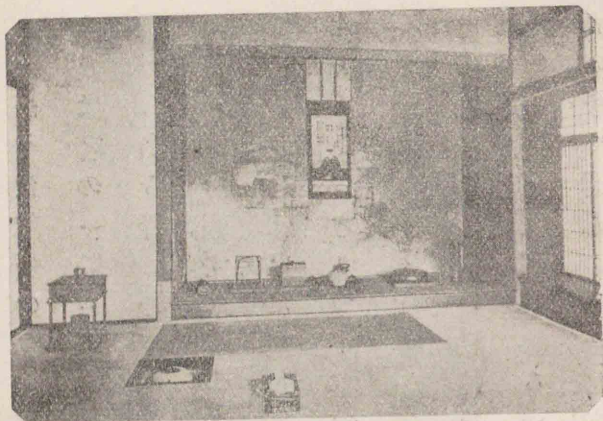
精行とは行に精しといふ事で、一々の動作に心がかもるの意味である。一擧手一投足は勿論、一器を扱ひ、一物を動かすにも、心の奥の鏡にかけて餘裕のある姿をうつす事である。小

從容の心を現す等の習によつて、此の精行が修練せられるので

ある。かゝる間に小を小とせず、乏しきを乏しとせざる。道念が養はれ、事々物々に對してその所以を知り、その來由を慮り、之に接して法悦歡喜の情をあたゝめ、感謝報恩の念を養ふに至るのである。一粒の飯、一本のマツチも、今わが目前一瞬の用を辨ずる事によつて、この物の一生は終るのだと觀ずれば、決して之を輕々しく用ひる心は起らぬのみか、このさゝやかな物に宿る廣大無邊の自然力、天地の恩に氣がついて、感謝の生活、知足安分の境遇に入らずには居られなくなる。これが即ち儉徳である。此に於ては誇るべき奢もなければ、愧づべき不及もない。

和敬清寂の四字に導かれつゝ、精行儉徳の人となるべく心身を練る。第一歩は、感受性を鋭敏ならしむるにある。その爲には、特に或境地を作つて、そこへ引入れ、それにひたらせ、それを味はし

妙喜庵
京都府乙訓郡
大山崎村の寶
寺の内に
ある名庵。



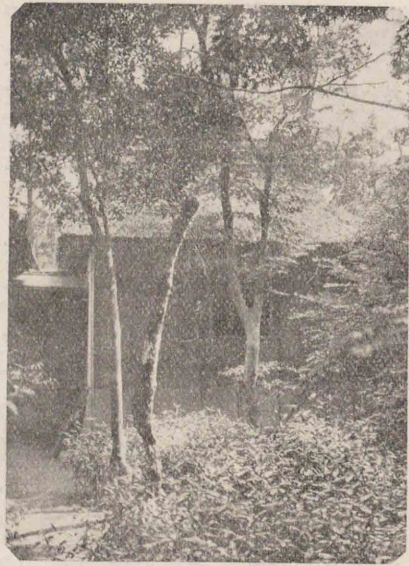
妙喜庵茶室内(部)

めねばならない。これが心の教育であり、茶道の修練である。其の境地とはいふまでもなく、茶室の事である。細かい所まで能く氣づかしめる事の出来るのは、大きい広い散漫な部屋ではいけない。起ち居振舞の爲に動く風すらも感ずる様な小室でなければならぬ。これ四疊半或は二疊半の茶室の工夫せられた所である。又茶室を普通北向とし、南の光線を避けて幾らか薄暗い室とするのも、此の靜の境地を作らんが

爲である。

かゝる室内で心を練るに當つて、最も都合よく、又最も重き役

目をなすものは、かすかなる感じである。静かな境地に眼耳鼻舌身意、六根の微妙な活動が營まれる時、心の世界の未だ嘗て開かれなかつた部分の門が開かれる。その中でも耳の力が最も強い。主人は客の一舉一動から出る音に心の耳を澄まし、客は主人の働から出る音に心の耳を洗ふ。さればお茶には種々の響がある。來着の旨を報ずる版の音は、客が主人の心にひびかす第一の響である。之を聞いた主人が出迎へるに方つて、手水鉢の水を改めんとて、さつとうつす水の音は、馳走の最初の響である。露地の飛石を渡れば、下駄の響がする。席入りの際に戸の音がする。疊ざはりの音はその人の品位を偲ばせ、更に客自身の心をも落附かせる。客一同が入席し終るまで、その動作から出る響がつゞいて主人の心に通ふので、若し水屋に端坐して之を聞けば、壁を隔てて客の一姿一態を心に見るのみでなく、その響から客の心持まで



六窓庵茶室裏口

も察する事が出来る。又主人が手前の間に工夫して出す種々の響は、皆自然を偲ばせて、かすかな音に深い意味を添へて居る。即ち茶碗に汲入れる水の音を笥の音にかよはせ、茶釜に谷川のせせらぎを思はせ、賤山がつの斧の音をひびかす等、山里の趣を取集めて静境に幽趣を添へる。これ等の響の背景として終始一貫するものは、釜の湯の煮える音である。通常之を松風といつて居る。この松風は樂音と違ひ、旋律の影響を受けて居ないので、静寂の興趣を一層深からしめ、落ちついて聽いて居ると、心を大森林の奥、大幽谷の底まで持つて行つてしまふやうな心持

がする。太古の如き静けさの内に、其の幽趣を増すものは松韻と
谿聲とである。

かく心耳を澄まし來れば、微かな感じは單に微かな感じのみ
ではなくなつて來る。その微かな感じのあなたに續く大きな重
い意義の世界が開かれて來る。經に觀其音聲皆得脫解といふ所
謂觀音の妙境とは、即ち是である。一日奕堂和尚は、殷々と響く曉
鐘に心耳を澄まし、禪定から起つて侍僧を召し、鐘撞く者の誰な
るかを見せしめた。侍僧はそれは新參の一小沙彌である旨をか
へり報じた。そこで奕堂和尚は之を膝下に招いて、今曉の鐘は如
何なる心持で打つたか。と尋ねられた。沙彌は、別にこれといふ心
持もなく、只鐘を撞いたばかりであります。と答へたので、いや、さ
うではあるまい。何か心に思うて居たであらう。誠に貴い響であ
つたぞ。といはれて、別にこれといふ心得もありませんが、只國許

備後守と書かす

奕堂梅崖。曹
洞宗管長。明
治十二年秋。

森田悟由
曹洞宗管長。
大正四年寂、
年八十二。

の師匠が「鐘撞かば鐘を佛と心得て、それに添ふだけの心の慎を
忘れてはならぬ。」と常々戒められた事を思ひ浮かべて、鐘を佛と
敬ひ、禮拜しつゝ、撞いたばかりであります。と答へた。奕堂和尚は
しみじみとその心掛を賞し、終生萬事に處して今朝の心を忘る
なよ。と戒められた。此の小沙彌こそは後年の森田悟由大禪師で
あつた。

既に音によつて心が澄渡つて來ると、心の窓である眼には眞
の趣が映る。曉の露地では幽かな殘燈が心を照らす。殘燈の趣は
露地に配合された其の光の工合であつて、油皿の置き方や、油の
残り加減ではない。秀吉が曉の會に招かれて露地に入つた時、侍
臣を顧みて、あの殘燈はいかに。といつた。侍臣は燈火か、げよと
いふ意と誤つて、火の加減を變へた。之を見た秀吉は、はや殘燈の
趣失せにけり。と嗟嘆した。悲しいかな、侍臣の心の眼が暗かつた

のである。

以上視聽の外、鼻に香、舌に味と、それと六根の修練が加つてゐる。此くして養成された理智は、單に茶味の上で必要なばかりでなく、先づ人生を潤澤ならしめる所以である。(茶味)

理窟と道理との辨

三浦梅園

理窟と道理とへだてあり。理窟はよきものにあらず。たとへば「親羊を盗みたるは親の悪しきなり。親にてもあれ。悪しきは悪しきなれば直ぐ訴ふべし」といへるは理窟なり。親羊を盗みしは悪しきながら、親悪事あればとて、子是をいふべき様なし。とて隠したるは道理なり。人死しては再び歸らず。歸るべき道あらば、歎きも歎くべし。歸らぬ道なれば歎きて益なし。といへるは理窟なり。人死して再び歸らず。歸るべき道あらば歎かずともあるべけれど、歸らぬ路こそ悲しけれ。など歎くは道理なり。

(梅園叢書)

齋藤茂吉
醫學博士、歌人。

×二二 實朝の歌

齋藤茂吉

建暦元年七月洪水漫天、士民愁嘆せんことを思ひて一

人奉向本尊聊致祈念

時によりすれば民のなげきなり八大龍王あめやめたまへ

「時により」は「時によりては」の意である。すぐればは「過ぐれば」である。「民」は詞書にある如く土民の意であらう。或は自分をも含めて「民」と云つたのかも知れない。「たみ」は「民安かれ」との如く、天皇が吾等民衆を呼び給ふ時、「み民われいけるしありの如く、吾等自ら稱する時などが普通であるが、自ら將軍であつた當時の實朝が衆庶を「民」というたのかと思ふ。「八大龍王」は「ちだりゆうわう」と字音に讀む。風雨に關する天象を支配する龍王であらう。

佛教の語であつて、難陀跋難陀婆加羅陀以下八大の龍王を指すのである。この歌は、大山の阿夫利神社に祈念したのである。

實朝は佛教の深い信仰者である、同情深いやさしい人である、眞摯な人である、鎌倉幕府の征夷大將軍である、賴朝と政子との子である。この歌は誠に如上の實朝が生んだ歌である。實朝は當時たゞひとり萬葉ぶりの歌を詠んだ。而して平氣で古句を踏襲した。然かも佳作に至つては古今を獨歩してゐる。さうしてこの歌ほど眞摯深甚の氣の籠つてゐる力ある歌は金槐集にも餘計はない。この歌の第一句から第三句までは如何にも不器用に訥訥として居る。

彼はこの歌を作るに際して、一心を籠めたのは言ふまでもない。祈念を籠めて吟詠するが故に、訥々不器用となるのは自然である。さうして訥々の中に深甚の響のあるのも自然である。巧妙

ではないが、莊重にして大きい響のあるのはこれが爲である。この事は大切な事で、眞面目のためとか、態よい歌にせん爲のこじつけなどいふ淺薄なものではない事を注意せねばならぬ。

この歌は三句切れの歌であるが、第三句の「なり」の所は、作者のやさしい憐みの深い所があらはれて居る。作者が眞に感じて作るから、かういふ微細な所まで作者が現れるのである。所謂技巧歌が滿天下を風靡して居た明治の歌壇の一隅に於いて、伊藤左千夫氏が「歌は人格である。」と唱へたのを尊く思はねばならぬ。

第四句結句に就いて、正岡子規氏は「八大龍王と八字の漢語を用ひたる、雨止め給へと四三の調を用ひたるところ、皆この歌の勢を強めたる所に候。」と云つて居る。八大龍王の如き言葉は、當時にありては、どうして思ひ切つて用ひたかと思はれる程であつて、傳教大師の「阿耨多羅三藐三菩提のほとけ達わがたつ杣に冥

加あらせ給へ。」と雙絶と稱すべきである。四三調の結句は強き調子を現し得るのである。たまへ」といふ結句は、最も適切な言葉であるからであらう。

吾等は一生を通じて、このやうに一心を籠める事が覺束ないのを悲しく思ふので、益、この歌をあり難く思はねばならぬ。近代人にかういふ歌の詠めないのは本當である。たゞかういふ歌を單に古典歌として取扱ふほどの鈍感な鑑賞家ならば、それは實は最も甚だしい古典的な人なのである。

大君の勅ききをかしこみ父母にこゝろはわくとも人にいはめやも。

「太上天皇御書下影時歌」といふ詞書がある。三首連作中にはじめの歌である。太上天皇は後鳥羽上皇を申し奉る。上皇と實朝との關係に就いては、歴史家のみならず、普く人の知るところであ

る。一首の意は、大君の御詞を謹んで身に體し、縦令父母の心に反くとも決して人に他言はしないと云ふのである。

此の歌の本當の解釋は、まだ予には出來なかつた。それは「わく」が分らなかつたからである。前の解釋には「わく」ともは、別くともで、そむく程の意味であらう。と云つて置いたが、なほ考へて見ると、縦令父母の心に知れるともと解してもいゝやうに思はれて來た。それは「分く」を現今口語の「分る」と同じやうに使つた古歌があつたからである。そこで佐々木博士の教を仰いだ。そして博士から「心はわくともは、心をば分ける」ともの意にて、この場合そむくと同意に落ちつく」といふ解答を得た。これで予の心が定つて、此の歌の解釋が出来るやうになつたのである。なほ考へて見るに、「わく」は「分く」で、加行四段活用の動詞である。原意は「分離する意」であつて、それが分離し區別して黑白を定めるといふ事から「分

明になる」といふ意に轉じたものらしい。現代口語の「分る」は即ちそれである。實朝のこの歌の場合は、分離の意に解すべきこと、佐木博士の言の通りである。

一首の措辭が、何となく粗く、どこか下手な所があるやうであるが、眞率の氣の漲つた緊張しきつた歌である。勅なども、この場合少しも輕薄に響かない。結句が特に力がある。讀者の心に迫つて來るこの力は、作者の心の猾くない純と謙遜と本氣とに因るのである。

ひんがしの國に我がをれば朝日さす貌姑射の山のかげ
となりなき

前の歌の續である。ひんがしの國は自分が關東にゐるから、さういつたのである。貌姑射の山は仙洞、即ち院御所のことであつて、こゝでは後鳥羽上皇を申し奉るのである。一首の意をつゞめ

て云へば、つゝしみて勅を奉ず」といふことになるのであるが、かういふ言方をしたのである。山」と云つたから、かげとなりなき」と云ひ、朝日さすと云つたのは、日光に光つて居る盛んな莊嚴の相を示したのであつて、東の國に我が居れば」を主に眼中に置いて、辻褄が合はないなどと評するのは悪い。

此の歌のいゝのは、句々をたゞつて分る意味よりも、太く強く一氣に押して云つた調にあるのである。作者が此の歌を作るに際しては、意味の點、言ひぶりの點において相當に骨折つて居ることが分る。併し、さういふ事に對する興味よりも、それを統一しおほせた意志の力が、一首の調となつて現れてゐるのに感動するのである。

山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心われあらめ
やも

「あせなん」は乾涸せんの意である。あせなん世なりとも」のところで、ゆらくと調が搖いで急進しないのは、感涙の滲み出でんとする刹那に似た深い心の相を暗示してゐる。それを此處で調子が弛んだなどと評するのは、恐らくは淺はかな形式論者であらうと思はれる。一旦そこでよごんだ運動が、君に二心われあらめやも」とひた押しに押しを行つて居る。此の歌は天皇に對する我が國民思想の權化だといつて賞められて居る。予も確かにさう思ふが、此の歌は特殊の場合で、君にも定冠詞がつくのであるから力があるのである。これが宣長の「敷島の大和心を」などの概念とちがふ點であつて、或特殊の場合にせまり極つた作者の内性命から迸り出た歌である事を忘れてはならぬ。

嘗て予は以上の三首を評した時、莊嚴渾厚なる風調が當時動亂の背景を得て、讀む者の紅血をして逆流せしむる程の勢を有

つてゐる。短歌のやうな小文藝中に、これだけの作のあるのは、予の喜ぶところである。といつた。少しく賞め過ぎたかとも思ふが、なほ考へて見ると、新古今流の歌の教育を受けて來た實朝が、それを打破り、月雪花乃至幽玄の型から目覺め出でて、かういふ實地に觸れての作を自由に奔放になし遂げ、それが未だ二十八歳の青年であつたかと思ふと、單にそれだけでも賞め過ぎては居ない氣がするのである。(短歌私抄)

春のはじめのうた

うちなびき春さりくれば楸生ふるかた山陰にうぐひす
ぞなく

あら磯に波のよるを見てよめる

おほ海の磯もとゞろによする浪われてくだけてさけて
ちるかも

城の崎
兵庫縣城崎郡
にある温泉
場。
志賀直哉
文學者。東京
帝國大學文科
大學出身。

二三 城の崎にて

志賀直哉

或朝の事、自分は一疋の蜂が立關の屋根で死んでゐるのを見つけた。足は腹の下にちぢこまつて、觸角はだらしなく顔の上へ垂下つてゐた。他の蜂は一向冷淡だつた。巢の出入に忙しく、全くそれに拘泥する様子はなかつた。忙しく立働いてゐる蜂は、如何にも生きてゐるものといふ感じを與へた。その側に一疋、朝も晝も夕も、見る度に一つ所に全く動かさずにうつ向きに轉がつてゐるのを見ると、それが又如何にも死んだものといふ感じを與へた。それは三日程その儘になつてゐた。他の蜂が皆巢に入つてしまつた日暮に、冷たい瓦の上の一つ残つた屍骸を見る事は淋しかつた。併しそれは如何にも靜かだつた。

夜の間に大雨が降つた。朝は晴れて、木の葉も地面も屋根も綺

麗に洗はれた。蜂の屍骸はもうそこになかつた。巢の蜂ごもは元氣に働きつゝあつた。併し死んだ蜂は雨樋を傳つて地面へ流し出された事であらう。足は縮めたまゝ、觸角は顔へこびりついたまゝ、多分泥に塗れて何所かぢつとしてゐる事であらう。外界にそれを働かす次の變化が起る迄は、屍骸は其處にぢつとしてゐるであらう。それとも蟻に曳かれて行つたか。それにしろ、それは如何にも靜かであつた。忙しく忙しく働いてばかりゐた蜂が、全く動く事がなくなつたのだから靜かである。自分はその靜けさに親みを感じた。

蜂の屍骸が流されて、自分の眼界からなくなつて間もない頃、或日の午前、自分は圓山川、それからその流れ出る日本海など、見える東山公園へ行く積りで宿を出た。一の湯の前から、小川は緩やかに往來の眞中を流れて圓山川へ入る。或所まで來ると、橋

だの岸だのに人が立つて、何か川の中の物を見ながら騒いでゐた。それは大きな鼠を川へ投込んだのを見てゐるのだつた。鼠は一所懸命に泳いで逃げようとする。鼠には首の所に七寸ばかりの魚串がさし貫いてあつた。頭の上に三寸程、咽喉の下に三寸程それが出てゐる。鼠は石垣へ這上らうとする。子供が二三人、四十歳位の車夫が一人、それへ石を投げる。中々當らない。かちつ、かちつと石垣へ當つてはね返つた。見物人は大聲で笑つた。鼠は石垣の間に漸く前足をかけた。併し這入らうとすると魚串が直ぐにつかへた。さうして又水へ落ちた。鼠はどうかして助らうとしてゐる。顔の表情は人間には分らなかつたが、動作の表情に、一所懸命である事がよく分つた。鼠は何處かへ逃込む事が出来れば助ると思つてゐるやうに、長い串をさゝれたまゝ、又川の真中の方へ泳ぎ出た。子供や車夫は益々面白がつて石を投げた。傍の洗場の

前で餌を漁つてゐた二三羽の家鴨が、石が飛んで來るので、吃驚して首を延ばして、きよろ／＼とときやうな顔をして、首を延ばしたまゝ、鳴きながら忙しく足を動かして、上流の方へ泳いで行つた。自分は鼠の最期を見届ける事が出来なかつた。

鼠が死ぬと極つた運命を擔ひながら、殺されまいと全力をつくして逃廻つてゐる様子が妙に頭についた。自分は淋しい厭な氣持になつた。自分が希つてゐる静けさの前に、あゝいふ苦のあることは恐ろしい事だつた。死後の静寂に親みを持つにしる。死に到達するまでのあゝいふ動騒は恐ろしいと思つた。併しあれが本當なのだと思つた。自殺を知らない動物は、いよく死にきる迄はあの努力を續けなければならない。今自分にあの鼠のやうな事が起つたら、自分はどうするだらう。矢張鼠と同じやうな努力をしはすまいか。曾て怪我をした場合、それに近い自分にな

つた事を思はないではゐられなかつた。自分は出来るだけの事をしようとした。自身で病院をきめた。それへ行く方法を指定した。若し醫者が留守で、直ぐに手術の用意が出来ないと困ると思つて、電話を先にかけて貰ふ事を頼んだ。半分意識を失つた状態^{状態}で、一番大切な事だけに、よく頭が働いたのは、後からも不思議に思つた程である。而も此の傷が致命的^{致命的}のものがどうかは自分の問題だつた。併し殆ど死の恐怖^{恐怖}に襲はれなかつたのも不思議であつた。致命傷かどうか？ 醫者は何といつてゐた？「かう側にゐた者に聽いた。致命傷ぢやないさうだ。かういはれると自分は急に元氣づいた。興奮から非常に快活になつた。若し致命傷だと聽いたらどうだつたらう。その時の心持は一寸想像出来ない。自分は弱つたらう。併し不斷考へてゐる程死の恐怖に自分は襲はれなかつたらう。そしてさういはれても尙自分は助らうと思

つて、何かしら努力をしたらうといふ氣がする。それは鼠の場合とさして變らなかつたに相違ないで、又そんな事が今有つたらどうかと思つて見て、猶且餘り變らない自分であらうと思ふと、氣分で希ふ所が、さう實際に直ぐは影響はしないものに相違ない。而もそれが本當に影響した場合は、それが何ともせられない場合でも、それでいゝのだと思つた。それは仕方のない事だ。そんな事があつて、又暫くして、或日の夕方、町から流に沿うて一人段々上へ歩いていつた。山陰線のトンネルの前で線路を越すと、道幅が狭くなつて、勾配も急になる。流も同様に急になつて、人家も全く見えなくなつた。もう歸らうと思ひながら、あの見える所迄といふ風に、角を一つ一つ先へ先へと歩いて行つた。物が總べて青白く、空氣の肌ざはりも冷々として靜かなのが、却つて何となく自分をそわ／＼させた。そのうちに段々と薄暗くなつ

て来た。もうこゝらで引返さうと思つた。自分は何氣なく側の流を見た。向側の斜に水から出てゐる半疊敷程の石に、黒い小さなものがゐた。ゐりだ。未だ水に濡れて、それはいゝ、眞黒な色をしてゐた。頭を下に、傾斜から水へ臨んでちつとしてゐた。からだから垂れた水が、乾いた石へ黒く一寸程流れてゐる。自分はそれを何氣なくしやがんで見てゐた。自分は何も驚かして水へ入れようと思つた。不器用（不器用な動作）にからだを振りながら歩く形が想はれた。自分はしやがんだまゝ、傍の小鞠程の石を取上げて、それを投げてやつた。自分は別にゐり狙はなかつた。投げる事の下手な自分は、狙つても逆も當らない事を知つて居るから、それが當る事などは全く考へなかつた。石はこつといつてから流に落ちた。石の音と同時に、ゐりは四寸程横へ飛んだやうに見えた。尻尾を反らして高く上げた。自分はどうしたのかしらと思つて見

てゐた。最初は石が當つたとは思はなかつた。ゐりの反らした尾が自然に靜かに下りて来た。すると、肱を張つたやうにして、傾斜に堪へて前へ突いてゐた。兩の前足の趾が内へまくれ込むと、ゐりも力なく前へのめつてしまつた。尾は全く石へついた。もう動かない。ゐりは死んでしまつた。

自分は飛んだ事をしたと思つた。蟲を殺す事をよくする自分であるが、その氣が全くないのに殺してしまつたのだから、自分に妙な、いやな氣を起させた。もとより自分のした事ではあつたが、如何にも偶然であつた。ゐりにとつては全く不意な死であつた。自分は暫く其處にしやがんでゐた。ゐりと自分だけになつたやうな心持がして、ゐりの身に自分がなつて、その心持を感じた。可哀さうにと思ふと同時に、生物の淋しさを一緒に感じた。自分は偶然に死ななかつた。ゐりは偶然に死んだ。

自分は淋しい氣持になつて、漸く足元の見える路を温泉宿の方に歸つて來た。遠く町外れの灯が見え出した。死んだ蜂はごうなつたか。其の後の雨でもう土の下に入つてしまつたらう。あの鼠はどうしたらう。海へ流されて、今頃は又水脹れのしたからだを、塵芥と一緒に海岸へでも打揚げられてゐる事であらう。そして死ななかつた自分は、今かうして歩いてゐる。自分はそれに對して感謝しなければ濟まぬやうな氣もした。併し實際喜の感じは湧上つては來なかつた。生きて居る事と死んでしまつてゐる事と、それは兩極ではなかつた。それ程に違はないやうな氣がした。もうかなり闇かつた。視覚は遠い灯を感じるだけであつた。足の踏むあたりも視覚を離れて、如何にも不確かであつた。たゞ頭だけが勝手に働く。それが一つはさういふ氣分に自分を誘つても行つた。(夜の光)

生と死は兩極の間に在るが、作者は死の極端は存かつた。(作者批)

姉崎嘲風

二四 光あれ

姉崎嘲風
名は正治。文
學博士。東京
帝國大學教
授。

一般に人間は此の世界に慣れすぎた。何物も、今ある如く昔から存し、萬事總べて成行のまゝに現れ來るものとして敢へて怪しまず。その日その日を過す。
兒童は世界新來の客として、驚異の眼を瞠つて、事々に疑問を起し、何物に對しても起原或は聯絡の説明を求め、それが、それも徐と世に慣れ、漸次に説明をつけて、終には疑をも起さず、好奇心をも動かさなくなる。然るに若し人があつて、俄かに此の世に生れ、而も成熟した心を以て四圍の世界を觀、人生の事を考へたならば、世界の一事一物、皆驚歎の種となり、疑問を起させるに違ない。
此の如き疑問に對して、今日の科學はそれと説明を與へは

するが、さて萬事萬物の究竟起原となれば、無始無終といふか、或は進化として説明するかしても、其の至極の始は、終に混沌の闇に入らざるを得ない。此に於てか、我等の想像力は、大能の神靈が世界を創造するといふ事を想はしめる。ユダヤの神話創世紀の開卷に此の想像を述べて曰く、



治正崎姉

萬有渾沌として天地は一の闇の中に閉

ざられ、水とも雲とも分かれぬ濃氣が全宇宙を籠めて居た。そこへ、闇の中に、

神光あれ。と宣ひければ、光ありき。神は光と闇とを分ち給へり。夕あり朝あり、これ首の日なり。

嗚呼、此の一言ほど有力な又不思議な言葉が他にあらうか。一言で常闇の天地に光明が生じ、未來億萬年に亙るべき晝夜の區別が出来た。それから、神が「水あれ」と云へば、水が出来、天の大空と地の大海とが二つに分れ、又神が土といひ、青草といひ、鳥を呼び、獸を呼べば、一切萬物が其の聲に従つて生じ、此の如くして天地と萬物とが成立つたと云ふ。

此は神話であり、想像である。随つて、萬物成立の説明としては、我々の理性には合はない。併し、理性的説明のみが唯一の解釋であるとは限らず、又宇宙の始のみが「光あれ」の言に發したとする必要もない。此の如き創造の事實は、我々の生活に於て日々に經驗し得ることではなからうか。

人の心は物に引かれ、事に動かされ、四圍と共に變じ、事情に従つて推移して止る所を知らない。見る物、聞く事、一として全然自

分で支配し得るものはない。其の上、思ふ事欲する所も變轉し、突發し、衝動し、依つて來る所を知らない。落付く先も、自分ながらに測り得ない。意馬は出沒し、心猿は制御し難い。若し自然に任せるならば、吾等の心は亂雜變轉の世界に彷徨する外はなく、唯現在刹那の意識は明かでも、其の前後左右は混沌の大漠に没する外はない。然るに、そこに何か心を統御するに足る觀念が浮かび、又は精神の底に透徹する靈感に接し、或は一生を支配すべき理想を體得すれば、混沌の闇は觀念理想の光明に破られ、精神の世界は靈の朝日に鳥歌ひ花咲ふ天地となる。此の如き精神の靈感は、聲こそなけれ、實に「光あれ」の天籟にも比すべき創造力を發揮して、今まで意馬心猿の跳梁に委した混沌は、光あり、力あり、一貫の命ある宇宙世界となる。斯く觀じ來れば、創世紀の空想は、單に世界萬物の始を説いたものではなく、刹那々々の我等が心にも起

るべき大創造を描き、我々各個の心靈が發揮し得べき原造の事實を示したのではないか。

浮世の紛々に心亂れ、氣濁つた時、我が心に斯くすべしとの決斷を得たならば、これ世務の混沌を照らす光ではないか。天然萬象を研究し、難題疑問の中に針路を失つて五里霧中に彷徨する際、一條の理路を發見し、快刀亂麻を斷つて真理の光明に逢着するも、亦「光あれ」の不思議ではあるまいか。若しくは又、藝術家が天然人事の中に美の靈を捕へ得て、畫帖の上に、又は木石を材にして之を表現する時、「光あれ」の創造力を示すものではないか。音楽家が天來の音に心耳を澄まして之を樂譜に捕へるのも、詩人がその靈感を歌ひ出すのも、亦「光あれ」の一聲、混沌の世界を破るに等しいものであらう。

精神の創造力、これ何時までも正體の捕はれない不思議であ

るが、而もまた實に人生に於ける高き貴きゆかしき生命の源泉である。萬物の生々を貫いて生命あり、世事の紛々を超えて光明ある人生の眞味、人間の眞價値は、一に此の創造力の賜ではないか。特に信念生活の力は、紛擾多端、罪障重疊の人生に直入の一路を開き、智慧の光に無明の暗を破り、慈悲の暖かみに煩惱の氷も解かず、攝取の光明といひ、救の恩寵といふも、一に此の小我が宇宙の大神靈と感應道交して、混沌の中に「光あれ」の御言に接する經驗を指すに外ならぬ。

思へば、人生始つて以來、無常の世相を超えて常住の光明に浴し、破綻百出の人生に、一貫の理想を發見し、五十年蜉蝣の此の世にも、永遠の生命を實にし得た人にして、其の信念開發の大事に際して混沌の闇の中に「光あれ」の御言に接した思をなさなかつた者が果して幾人あらうぞ。信念の力は此にある。人生の價値は、

實に此の如き光明の新生命が齎すのである。大死一番を経た大悟徹底悲痛煩悶の底に陥つた後の信心開發、罪を悔いて罪の己を殺し得た精神の復活、蘇生、言葉は異なり、方面は違つても、混沌を破る新光明を得たといふ靈の感化に至つては一であらう。「光あれ」これ單に太初の創世に限らぬ。理想の力が現れる處には「光あれ」の御言が常に聞え、其の不思議の創造力が絶えず躍動しつゝあるのである。(光あれ)

和辻 哲郎

我々の「生」は、我々の實である。それは理智の測り知らない深さと豊かさを持つてゐる。我々は理智の考量によつて軽々しく自己の生を判じてはいけない。我々は自己の生がどうなるか、何を生むか、總べて無知である。併し我々は信ずる事によつてそれを強め得ると知つてゐる。信ずる者の前には山さへも動くのだ。何事を起し得るかは豫想の限でない。(偶像再興)

二五 俚諺論

大西祝

羅馬の一詩人がエヒグラムを蜜蜂に譬へて、整あり蜜あり、軀は小さし。と言へるは、すべての俚諺にとは言ひ難きも、其の最も巧妙なるものには、恰當の語なるべし。俚諺の上乗なるものは、多くはこの三者を具ふ。言短くして意義味ふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。

人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺はおのづから律語をなす傾あり。我が國語にては、五又は七が自らなる律呂なれば、我が國の俚諺には、この律に従へるもの甚だ多し。雉子も鳴かずば撃たれまい。心の鬼が身を責める。といふ如く、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはいと多し。人と屏風はすぐには立たぬ。思ふ念力、岩でもとほす。身を捨ててこそ

浮かむ瀬もあれ。などは七七の調子をなして語呂頗るよし。十で神童、十五で才子、二十過ぎては只の人。といふも、その語に律あり。右と同じ理由により、同語または同音を重ねたる類のものも多し。例へば、多勢に無勢、短氣は損氣、弱り目に祟り目、處かはれば品



大西祝
大めよ。といふが如し。
西かく律を成し、尾韻又は頭音を合
視はすること、詩の句法に似たる所ありのみならず、俚諺に抽象の語少く

多くは具體的に言ひなして感動の強からんことを求め、又これが爲に屢、誇張の言を喜ぶなども、それが詩歌に似たる點なり。この故に、諺にて物の度量を言ふには、其の數又は量を定めて言ふを好む。七たび探して人を疑へ。人の噂も七十五日。預り物は半分

の主、などの類は數ふるに違あらず、數の中にて最も好んで用ふるは三の數なるべし。三度目が定の目。三年たてば三つになる。」「懺悔話をすれば三年の罪が滅びる。」「三人よれば文殊の智慧。」「朝起は三文の徳。」「その他なほ多かるべし。又「用心は臆病にせよ。」「黒犬に喰はれて灰の和滓わづに怖れる。」「などは、誇張して言ふによりて其の意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見實しやかならぬ語句、即ちパラドックスを用ふるを喜ぶ。この種の諺に深く味ふべきもの少からず、急がば廻れ。」「言はぬは言ふに勝る。」「逢ふは別れのはじめ。」「兄弟は他人の始り。」「論語讀の論語知らず。」「人を使ふは使はれる。」「など、その例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に、却つて相通ずる所あるを發見するは、深邃なる智慧の一特徴なり。パラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを相

並ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。骨折損の草臥儲。」「聞いて極樂、見て地獄。」「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥。」「長者の萬燈より貧者の一燈。」「などその例なり。反對を並ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相並べて、それを比照するは俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喻に富める所以にして、その比喻の極めて巧妙なる、詩人の作としても恥づかしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは、多くこの類にあり。今思ひ出づるに従うて、その三四の例を掲げんか。馬には乗りて見よ、人には添うて見よ。」「旅は道づれ、世はなさけ。」「といふ如きは、幾たび唱するも其の趣味の津々たるを覺ゆ。花は櫻木、人は武士。」「これ我が國民の、以てそが理想を誇るに足るものの一なるべし。佛法と藁屋の雨は出でて聞け。」「風流の心に富める國民ならで、誰か之をえ言ひいでん。之を口ずさみ見よ。如何に詩心、道心、宗教心の

相結びてなせる高雅幽玄なる妙趣の浮かび来るぞ。

かく二つの事を並べ出して相比照する事なく、只普通の暗喩を用ひたるものも頗る多し。例へば「商賣は牛の涎」「秘事は睫」といふが如し、而して更にその喩のみを掲げて他の意味を匂はせたるものも、その數多かるべし。蟹は甲に似せて穴を掘る。目糞鼻糞を嗤ふ」といふ如きは此の例なり。

かく比喩の用ひ様は種々あれど、その之を用ふるは寓言に於ける用ひ方とは同じからず。「目糞鼻糞を嗤ふ」といふが如きは、多少寓言に近寄れる所あるが如くなれど、俚諺と寓言とは、後者は敘事(物語)の體裁を具へ、前者は然らざる點に於て全く相異なり。同じく意を寓して比喩を用ふるも、寓言は之を出來事又は動作として語り、俚諺は時間に結ばずして、唯常恆の事實として語る。以上陳べたる所は、皆これ俚諺が、その意味の表現法が詩句に

似たる處あるを言へるなれど、唯その形に於て詩に似たる所あるのみにはあらず、又その想に於て詩趣を具ふるもの、尠からぬは、曩に掲げたる例を以ても認知し得べし。上述したる所は、主として俚諺をその形の上より見たるものなるが、更にその内容について研究せば、その興味は一層深かるべし。予輩は今詳細に此の方面を論ずるを得ず。たゞ聊かこゝに想ひ當れる二三の點を掲げて止まんと欲す。

一國民の言慣れたる俚諺の内容を深く研究すれば、その國民の歴史氣質、風俗、人情、學術、宗教、社會制度等、その一切の生活とその生活の理想とについて發見する所多々あるべし。この點に於て諸國民の俚諺を比較するは、いと興味ある事なり。我が俚諺の中、今即座に想ひ出づるもの三四を掲げんに、上に引ける「花は櫻木人は武士」といふ美しき諺は言ふも更なり。武士は食はねど高

源頼朝時代
武生(下江)に
武生(下江)に
武生(下江)に
武生(下江)に

楊子「武士は相見互」といふ如きは、我が國の歴史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべく、又之によりて其の如き理想を愛重したる全國民の氣風を察し得べし。泣く子と地頭には勝たれぬ」といふを見れば、千萬言の歴史的敘述に劣らず、我が國の歴史の或時代に於ける地頭といふ者の勢力の如何なりしかを察知し得べく、女に家なし、貞女兩夫に見えず」といふなどは、我が國に特生の諺とは言ふべからざるも、以て婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、さばらぬ神に祟なし。棄てる神あれば助ける神あり。神は正直のかうべに宿る。鬼神に横道なし。苦しい時の神のみ。などは宗教思想を示すべく、補綴合ふも他生の縁」といへば、以て佛教によりて注入されたる因果思想を見るに足るべし。此等は唯念頭に浮かび出づるに従つて掲げたる一例に過ぎず。

欲養親不在
孝行の時
親がない
親を愛ふ心に
今はおれ
何となく
吉田松院

歐洲諸國の諺には、夫婦の關係を言へるもの甚だ多く、我が國にては寧ろ親子の關係を言へるもの多きが如し。親の心子知らず。子を知るは親に如かず。子ゆるの闇に迷ふ。孝行をしたい時には親がない。可愛い子には旅をさせよ。子は三界の首枷。子が思ふよりは親は百倍も思ふ。と言ふなど、親の慈悲をいふや至れり盡くせり。その上に、子よりも孫は可愛い。と言へる、何の言か之に勝りて子孫の愛の濃かなることを表すものぞ。斯く親の慈悲を稱ふるも、又俚諺は能く人情の他面を言ふ。子を棄つる藪あれども身を棄つる藪なし。とは、何ぞ能く吾人の主我心を穿てる言ぞ。一般の人情に自利の念ほど強きはなかるべし。俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを看よ。而して其の中に如何に能く世俗の人情を穿てるものあるかを看よ。かたきの家にては口をぬらせ、轉んでもたゞは起きぬ。泣く子も目を見る。誠

聖人
孔子を指す。

に然り泣く子さへ自身を護るには油断せざるなり。油断大敵。小
を棄てて大に就け。長いものには巻かれよ。太きには吞まれよ。曲
らねば世に立たれず。などと云ふ。何れか利益の念を主とせざる。
聖人は「知らざるを知らずとせよ」と言ひ、俚諺は「知りて知らざれ」
と言ふ。鷹は死すとも穂をつまみ、など氣概を稱揚するもあれど、
俚諺の大體の教訓は賢かれ損をするなといふにあり。故に「立つ
て居る者は親でも使へ」と言ふ。

俚諺は事の一面を見て之を誇張して言ふの傾あれども、その
他面を言ふに躊躇せざるが故に、一見その判断の相反するが如
く思はるゝものあれど、斯く両面より言ふところ能く世態人情
の實相に適ひて、その判断概ね公平なり。好きこそ物の上手なれ。
といへど、「下手の横好き」と言ふを忘れず。親に似ぬ子は鬼子。と言
へば「形生めども心は生まず」と言ふ。斯く事の両面を叩いて、世相

批判
罵倒

俚諺

の内祕人情の裏面を穿たんと力むる、これ即ち俚諺が警戒と諷
刺とに富める所以にして、中には一言能く人情の裏面を評きて、
巧みに罵倒し了するものあり。

同様なる意味の俚諺を集むるも、亦一興ならんか。猿も木から
落ちる。「弘法も筆のあやまり」智者も千慮に一失あり。「龍馬のつま
づき」上手の手から水が漏る。などの類多くあり。同一の俚諺を言
ひかへたるの多き、針の孔から天のぞく。といふに越えたるはな
からん。管の孔から天のぞく。「竹の管から天のぞく」よしのずるか
ら天のぞく。など、その何れか一が原始のものならんか。

我が國の俚諺は、他國のと比して、その性質價值如何。此等の問
題を考ふる前には、先づ我が國の俚諺を採集せざるべからず。予
輩は早く適當の準備を具へたる人が、此の事に其の手を着けん
ことを切望して已まざるものなり。

大西博士全集
試行あり。

ロダン

佛國の大彫刻家

Francois Auguste Rodin

木村莊八
洋畫家、美術批評の權威

サロン

現代美術家の製作品を陳列するパリの有名な展覧會場

二六

ロダン

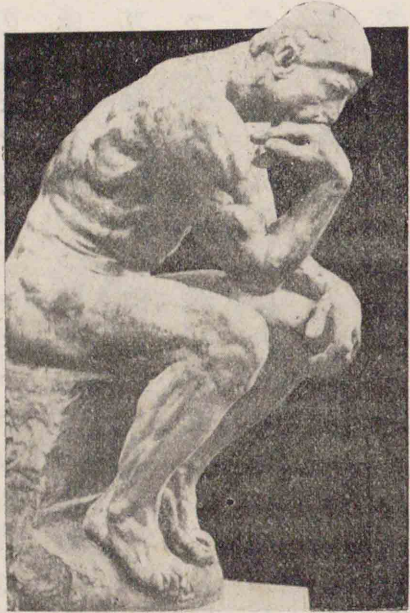
木村 莊 八

一八四〇年の十一月十四日巴里に生れたフランソアアウギユスト・ロダンは警察の書記官の子で、幼少の頃物質上の必要からブーヴェーの寄宿學校にやられてゐた。若しも近眼でなかつたならば、小さい篤學者にもなつてゐた事であらうが、彼は黑板に書かれる字もよく見えない程であつた。自然に學科——特に算術等が嫌ひになつて、其の時分から瞑想したり夢想したりする事を好み、小演說家を以て自任してゐた。

其の學校を去つて、巴里へ歸つて來たのは十四の歳である。彼はやがて裝飾技藝學校の素描科に入り、それに附屬してゐる肉づけ科にも出席して、直ちに技倆を發揮した。

一八六四年或人に勧められて、初めてサロンに出品すべく、彼

は男の頭像を造つて審査員の下に送つた。審査員はそれをはねてしまつたが、其の作品は後年鼻かけの人として藝術史上に重要な位置を占めたものである。



考へる人(ロダンの作)

ロダンはあらゆる舊習と官學的潮流と、同時代に見る職人的藝術家とを輕蔑した。自然は常に美しい。自然は凡て美しい。ロダンの師は唯、自然ばかりである。

ロダンの生活は極めて平靜で、常に透徹した一本道をぐいぐい押通してゐる。包含する所は飽く迄も包含し、自分の個性に合はない所は振向かずに放棄して行く。自分の内に要求する所に

從つて境遇をも周圍をも生かして行くので、他の方に依つて動かされる所は殆ど無い。二六時中自分の内から外へと常に及して行くので、先づ外から内へ受けて、それを更に生かして行く側の人では無い。梵高、ゴッホとロダンとの相違は此所にある。ゴッホは自分のぶつかかる物に、一々全軀全心の力を擧げてぶつかり、其所に、^{たゞ}記念碑を立ててゐる。それ故常に何等かの對壁にぶつかり通しの錯雜した生活をつゞけて行く事に自分から進んだ。ロダンは先づ自分を自分の欲する對壁にぶつけてかゝる。實際或事件が自分に振りかゝつて來ても、全力は自分の意志のある所に集中してゐて、追加的の事件は消滅するがまゝに消滅させて了ふ。ロダンの生活讚美には明るい華やかな調子があるが、ゴッホの生きる喜には悲壯な白兵戰の氣合がある。

が波打つてゐる。血つゞきと云ふ氣持、母體と云ふ氣持——ロダンは靜かに、正確に自分の持つてゐる愛を掘下げ、極めて人間的な、赤裸な光を生き、ものと云ふ領土に投じてゐる。氏はかうして藝術と生活と宗教とを少しも破調なく融合させて行つてゐる。

一九〇三年、氏は國際彫刻家畫家版畫家協會の會頭に選ばれた。翌年、ニューギヤレリーでは、考へる人の大銅像を初め、「夢」「聖ヨハネ」等が展覽された。

雜誌「生の藝術」は「考へる人」を買取り、巴里の所有として飾る事を國民に提議した。立所に一萬五千フランの金額が集つた。そこで、其の大銅像は當局者の手に移り、ロダンの希望通り、佛國の靈廟であるパントンオンの階段に、幾萬の群衆の喝采を受けながら据ゑられた。

一九〇九年には、ロダンの作品のみを充たす畫堂がニューヨ

トクに出来上つた。メトロポリタン、ミュージアムがそれである。又
 巴里では彼の賞讃者達が氏の七十回誕生祝賀會を開き、パンテ
 オンの考へる人の足下に花輪を捧げて、永遠に氏の健康を祝し
 た。此の粘土と大理石との世界統一者の黄金時代にあつて、彼が
 「佛國より日本國へ交誼を致す。
 最緻なる或は最大なる實在、例へば大洋雲嶽草木昆蟲の精靈
 を窺視し得たる日本の藝術は、又吾が踏む道なり。」
 此の書信に添へて小さき崇高な三個のブロンズを送り越し
 た事も、消し難い喜の記憶となつてゐる事であらう。(ロダンの藝術)

私は自分の見たものを自分の記憶と自分の精神とへのろの
 ろと彫りつける。(ロダンの言葉)

ロダンの青銅像



鋤を執つた人

田中義成
文學博士。大
正八年、年
六十。

二七 北畠親房

田中 義成

吉野朝の柱石たる北畠親房は、正平九年四月十八日、大和賀名生に永眠せり。實に吉野朝を建設せしは親房なり。故に吉野朝に於ける政治的經綸及び軍事的計畫は、皆親房より出でたり。而してその作戰計畫の如き、常に大規模に屬し、首として南軍の根據を奥羽と九州とに置きしが如き、諸王子を各地方に派して、地方南軍の中心としたるが如き、又自ら常陸に赴きて東國を經略し、足利氏の根據を覆さんと謀りしが如き、或は東西夾撃の策を樹て、或は尊氏・直義兄弟の不和を利用して諸將を操縱し、又は直冬の勢力を利用して、一旦にもせよ、京都を回復せしが如き、苟も乗ずべき機會あれば之を逸せず、しかも一時的とはいへ、常に勝利を占めて北軍を苦め、尊氏をして一日の安を得しめざりしは、實

茶道精神
茶子一課
命言業
本道之程

名分 不肖 小生 拙者

可以安藝 國海田庄地 頭職一便補 高野山蓮華 乘院勸學料 所事 右爲二代々 祖考及亡息贈從一位右大臣 等、可於當 山一建一立一 院、始置追善 勤行、由年來 之素意、心中 之願念也。而 如、聞者、當 院學業、始爲 一山傳法之惠 命、料所錯亂 之後、學頭學 衆之依怙一向 如無云々。今 思此事、不 勝嘆息。然

乃、聖開、彼發 願、欲、使補、 件、關分、仍、以、 當庄地頭職、 所、宛、料、所、 也、情、案、 物理、從、新、造 寺院、始、置、動 行、不、如、下、繼、 欲、絶、之、綫、一 興、中、欲、廢、之 學、上、高、祖、照、 見、此、志、可、感 者、亡、魂、得、 達、其、理、不 疑、歟、但、料、所 復、本、學、衆、安 堵、者、且、應、衆 望、且、廻、思 慮、追、可、計、 沙汰、者、其 勒、事、狀、啓 白、如、件。

に親房の謀略に出づ。

要するにこの期間の戦争は親房と尊氏と二人の舞臺なり親

可以安藝國海田庄地頭職便補高野山蓮華乘院勸學料所事

右爲二代々祖考及亡息贈從一位右大臣等、可於當山一建一立一院、始置追善勤行、由年來之素意、心中之願念也。而如、聞者、當院學業、始爲一山傳法之惠命、料所錯亂之後、學頭學衆之依怙一向如無云々。今思此事、不勝嘆息。然乃聖開彼發願、欲使補件、關分、仍、以、當庄地頭職、所、宛、料、所、也、情、案、物理、從、新、造寺院、始、置、動行、不、如、下、繼、欲、絶、之、綫、一興、中、欲、廢、之學、上、高、祖、照、見、此、志、可、感者、亡、魂、得、達、其、理、不疑、歟、但、料、所復、本、學、衆、安堵、者、且、應、衆望、且、廻、思慮、追、可、計、沙汰、者、其勒、事、狀、啓白、如、件。

不肖之身、自稱之故、雖有其憚、先皇深被仰付之間、云當今御事、云

北島親房筆蹟

房が大規模の計畫に對して、能く之に對抗せるは尊氏なり。尊氏の戰略については、こゝに略するも、畢竟この鬭争は親房尊氏兩人の對抗と見るを得べし。故に親房は一身の存亡を以て吉野朝の存亡とせり。其の趣旨は、結城文書の中、興國三年十月十六日、親房が關城より結城親朝に與へたる書狀に見ゆ。曰く、

竹園御事、爲一身之負累、諸方依之、伺此境之安危、候忽失一命者、天下之御方一時可落力之條、殆無疑貽歟。

此に由つて之を視れば、親房は後醍醐天皇より深重なる御依託を蒙り、一身を以て君國に捧ぐるも、自己の生死は直ちに天下宮方の興廢に關するを以て、自ら其の身を重んぜるなり。其の自ら任ぜるの如何に重きかを知らるべし。而して其の慷慨憂國至誠奉公の情に至つては、亦往々其の詠歌に見はる。當時公卿將士の和歌中、親房ほど熱情の溢れたるは少し。吉野朝將士の和歌は新葉和歌集及び李花集に載せたり。試みに親房の一二を擧ぐれば、露にぬれ霧にしほれてあしびきの山分け衣ほすひまもなし、かたいとの亂れたる世を手にかけて苦しきものは我が身なりけり。

通し、和漢古今の治亂得失の迹に明かなる事は、其の著神皇正統記を見て知るべし。尺素往來に、親房が玄惠法印に資治通鑑を受け、通鑑に精通せし事見えたり。されば親房の史論は、往々通鑑に淵源せし事見えたり。通鑑の開卷第一には名分論を掲げたるが、親房が正統記の論旨は頗る之に本づくに似たり。即ち正統記の精神は大義名分を明かにするに在り。又通鑑の名分論の中には、名器を惜むべしといふ事に就いて論ぜるが、親房の職原抄に濫りに名器を授くべからずとの趣旨を述べたるは、全く通鑑の精神を取りたるならん。其の吉野朝を建設せるも通鑑より得たる知識なり。又神皇正統記職原抄を見れば、日本歴史に精通せる事論を待たず。されば和漢内外の歴史を通觀して、巧みに之を治國經綸の上に運用せし事知るべきなり。故に當時敵方と雖も、親房に對しては特別の敬意を表したり。凡そ敵方にては、吉野朝の官

位を認めざるに拘らず、親房のみは敵方にても之を認めて北畠准后と稱せし事、三内口訣に見えたり。此に由りて之を視るも、其の人格の高き、天下齊しく之を景慕せしを知るべし。

而してその勤王の精神に至りては、子孫相繼いで渝らず。長子顯家は親房に先立つて戦死せるが、次子顯信の子孫は陸奥に残りて、後屢義兵を起し、其の後裔は津輕郡波岡に住し、天文永祿の頃まで存續して、遂に南部氏の爲に亡されたり。第三子顯能の子孫は伊勢に残りて伊勢國司と稱し、屢義兵を起し、後裔は織田信長に征服せられたり。されど親房の同族にして、而も近親なる久我家は今に至るまで現存し、彼の明治維新の元勳なる岩倉具視公は實にこの家より出でたる人にして、祖先を尋ねれば親房の血族なり。此の人が明治中興の偉業をなせる中心人物なれば、親房の宿志は公を待ちて遂げられたりといふべし。(南北朝時代史)

芳賀矢一
文學博士。國
學院大學長。
東京帝國大學
名譽教授。

三 二八月雪花

芳賀矢一

煌々たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫赫として仰いで見ること出来ないが、月は眺めて親み易い。太陽が一たび出れば、群陰皆影を伏して、大小の有象無象悉く照破される光景であるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の分別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清涼の光である、皎潔無垢崇美と稱ふべき優しい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい。此の光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じず、詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々

村田春樹

うちむかふ云々
荷田蒼生子の
歌。

花ならば云々

は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の人心の胸懷に泌みわたることは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。うちむかふ月は一つの影ながら浮かぶは千々の思なりけりである。

東西古今、喜悲苦悶の情熱は、幾萬回となく幾億回となく此の光に向かつて、慰へられた。之を嗟嘆し、之を吟咏した詩歌の感吟は、世界各国の言語に充ち満ちて居る。天文學者は曰ふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。と。此の冷たい光が古往今來どれ程の暖かみを人間に與へたか、又現に與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、其の純潔な色を以て乾坤を一つにする。ことは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや花ならば咲かぬ梢もまじりなむ。

齊家
繪巻

花ならば咲か
ぬ梢もまじら
ましなべて雪
ふるみ吉野の
山。(僧仙覺、
新續古今集)
三千世界云々
宋の僧劉師道
の句。

なべて降りにし白雪のいとふやうに眼に入る者すべて其の下
に包まれてしまふ。三千世界銀成色、十二樓臺玉作層の美観は一
切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を
抱かしめる。天から落ちて來る此の純白の色に比べては、地上の
花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り紛々と飛ん
で、唯一條の川水を残して、山といはず、野といはず、瞬く中に瓊玉
を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭
の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。
花紅葉色々の眺は元より美しいに相違ない。花の散つた後の新
緑の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉も
無い冬枯の時に、地上の萬物が此の銀色に蔽はれるのは、眞に對
照の妙、變化の奇造化の巧を悉したるものではないか。一年中蓮の
花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界程楽しいもので

培ふ

は無い。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、
春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花の
さまざま、これを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲
亂れるのは、人生としてはあまりに贅澤な感じもする。花は其の
美しい色の外に芳しい匂さへ有つて居る。我等の食用のために
作つた菜や大根や、どの花でも無限の詩趣を備へて居る。富貴の
庭園に培ふ花の價を生じたのは無理はないが、山の花野の花、い
づれも月や雪と同じ様に、一文、錢を要せぬのである。人世に花な
くんば、どれほど寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の
内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、
其の濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花をもつてし、墓前
にも花を手向けて、死者の靈をも慰めるのである。月雪の眺は、其

花をし見れば云

年ふれば齡は
老いぬしかは
あれど花をし
見れば物思も
なし(藤原良房、古今集)

山櫻云々

康資王の母の
歌(新古今集)

冬ながら云々

清原深養父の
歌(古今集)

の皎潔を愛し、其の清淨きよけつを貴ぶが、花は其の艶麗うつくし華美はびらかを以て人生

を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々しい、華美、華麗

華奢等の語は、皆花に基づいたものである。古今東西の詩歌は舉

げるだけ愚である。余は唯、花をし見れば物思もなし、といふ古歌

を以て、すべてを總括し得べしと信ずる。

月、雪花三つの眺は、各、其の特長がある。いづれを前、いづれを後

といふことが出来ぬ。

山ざくら花の下風吹きにけり、木のもとごと木の下の風を消へて後の雪のむら

ぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあ

る空の天方は今度春のありは花

これは雪を花に譬へたのである。

笠は重し云々
謡曲「葛城」の
句。

笠重し香ばし
楚地の花
肩の上の笠には無
影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

笠は重し、吳山の雪、鞋は香ばし、楚地の花、肩の上の笠には無

影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。花を賞して月を愛せぬ

人は無い。月花を愛して雪を賞でぬ人も無い。

思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に

鎖されてゐる北極に近い地では、氷は即ち人の家である。此の地

方の人は寸紅の目を樂ませるものは無い。又これに反して、全く

氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民

は、瓊玉を綴る奇觀奇見は見た事がない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀

を呈して、夜更を知らぬ繁華はんかな倫敦の住民も、秋冬の半年は美し

い月の光を見る見ことが出来ぬ。我等日本人が昔も今も此の三

つの眺を恣にすることを得るのは、眞に天賦の幸福ではあるま

世々を経て云々
伊藤仁齋の
歌。
年々歳々云々
唐の劉延芝の
詩句。
白頭云々
唐の雍陶の詩
句。

月雪花の眺は古人の歴史が加つて一層の感興が増す。世々を
経てながめし人の數にまた我をもゆるせ秋の夜の月。月は古來
の歴史を照らす鏡である。年々歳々花相似。歳々年々人不同。白頭
縦作花園主。醉折花枝是別人。鬢の霜頭の雪。人生の感は花を見て
ます。繁く雪を見ていよ。多い。二千五百年以來。月雪花三
つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は如何に多くの感興を我
等に傳へたるよ。如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

(月雪花)

夕べの山の常陰より、さらでも峻しき岨づたひを道しるべ
する山人の笠は重し、吳山の雪鞋は香ばし、楚地の花肩上の
笠には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折りつ
つ、歸る姿や山人の笠も薪も埋れて、雪こそくだれ谷の道を、
たどり、歸り來て、柴のいほりに着きにけり。(論曲葛城)

吉村冬彦

本名は寺田寅
彦。東京帝國
大學教授。理
學博士。

一月廿六日

大正十三年

今上陛下御婚

儀祝日。

中橋廣小路
東京市京橋
區。

二九 花 火

吉村冬彦

一月廿六日の祝日の午後三時頃に、私はたゞあてもなく日本
橋から京橋の方へ、あの新開のバラック通を歩いて居た。朝よく
晴れて居た空は、いつの間にかすつかり曇つて、濕りを帯びた弱
い南の風が吹いて居た。丸の内の方の空にあたつて時々花火が
揚つて居るので、揚る度に氣を附けて見て居た。丁度中橋廣小路
の邊へ來た時に揚つたのは、いつもの唯の簡単な晝花火とは違
つて、餘程複雑な仕掛のものであつた。先づ親玉から子玉が生れ、
其の子玉から孫玉が出て、それから又曾孫が出た。そして其の代
のかはり目には、赤や青の烟の塊が飛出すのであつた。併しそれ
らの色のついた雲は、すぐに消失せて、黒い烟だけが割合に永く
あとに残るやうであつた。

鱸の方の横木に凭れて立つて居る和服にマント、鳥打帽の若い男が一番の主人株らしい。多分今日のプログラムを書いてあるらしい紙片を手に持つて居る。其の傍に花火を入れた箱があつて、助手が其處から順々に花火の玉を出して打手に渡す。

始に小さな包のやうなものを筒口へ抛り込んで、すぐ其の上へ銀色をした球を落し、又其の上へ、掌から何かしら粉のやうなものを入れる。次にチヨッキの隠袋から何か小さなものを出して、火繩でそれに點火したのを、手早く筒口から投入すると、半秒足らず位の後に、爆然と烟が迸り出て、鈍い爆音が聞える。烟が綺麗な渦の環になつて、ふわ／＼と揚つて行く。すると高い處で彈丸が爆發して、それから所謂花火の現象になるのである。

段々眼が馴れて來ると、彈丸が揚つて行く途中の経路を明瞭に認める事が出来る。そして破裂する時に、先づ一方へ閃光のや

うに迸り出る火焰も見え、外被が兩分して飛分れる處も明かに見る事が出来る。風の影響もあるだらうが、それよりも寧ろ筒口を出る際の、偶然の些細な條件の爲に、時々、彈道が上の方でひどく彎曲して、とんでもない方へ行つて開く事もある。

一番小さな筒と、其の次のとが、最も頻繁に使はれる。一發打揚げたものの烟が、大方消える時分に、次のを揚げるといふ順序であるが、筒の大小は變つても、揚るものは大抵同じやうな平凡なものが多い。同じ位の時間の間隔を置いて、連續的に五回爆發するのが一番多いやうであつた。續けて五回音がして、空中に五つの烟の圓塊が團子のやうに並ぶだけだと云はば、それ迄のものである。

「音さへすりやあ、いゝんだね。」音さへすりやあ、いゝんだよ。こんな事を云ひながら、それでも矢張未練らしく、いつ迄も見物して

居る職人の仲間もあつた。見物して居る連中を見渡すと、殆ど労働者階級の人らしく、兵士や女子も少しは交つて居たが、所謂智識階級に屬するらしい人は一人も見當らなかつた。智識階級の人はかういふ種類の見物には餘り興味を持たないのか。それとも、花火の技術や現象などは疾うにもう知つて居るから、今更こんな處で見物する必要がないのか。さうではなくて、寧ろそんなものをぼんやり呑氣に見て居るやうな暇がないのだらうと思つて見た。尤も向河岸の官衙の裏河岸を見ると、かなり立派な役人達で、呑氣さうに見物して居るのも大勢居た。河一つ隔ててかう事柄の違ふのは、果してどういふ譯だらうとも思つて見たりした。

五回の爆聲の間の四つの時間の間隔は、決して一樣にはならないものらしい。其の長短がいろ／＼の偶然的な結合によつて

起るのが、先づ面白かつた。それから五つの烟の塊が空中に描く屈曲した線が、色々の星座のやうな形をして、又それが垂直に近くなつたり、水平に近く出たり、或はいろ／＼な角度に傾斜したりするのにも面白かつた。其等の塊が風に流されて行く間に、段々相對的位置を變へて行くのが、上層の風の構造を示すものとして、特別な興味があつた。嘗て誰かが或關東の山の上で花火を揚げて、高層氣象の觀測をやらうといふ提案をした事を思ひ出して、なる程これならば存外ものになりさうだと思ひながら見て居た。

なほ面白いのは、一つ一つの烟の團塊の變形である。此がみな複雑な渦動の團塊であつて、むつかしい運動を續けながら、段々に擴り散つて行くのである。昨年九月一日、被服廠跡で起つた火焔の渦卷を支配したと同じ法則が、此處でもそれを支配して居

るのだらうと思つて、一所懸命に眺めて居たが、此の模糊とした
烟の中から、さう手取早く要領を得た法則を讀取る事は、容易な
仕事ではないのであつた。

五回に一回位は、風船に旗を吊したものとや、相撲取や兵隊など
の人形の出るのがあつた。人形がゆらりゆらり、御辭儀をしたり、舉
げた兩手をぶらぶらさせながら、緩やかに廻轉したりしながら
下りて行くのは、一寸滑稽な感じのするものである。それが向河
岸の官衙の構内へ落ちさうになると、其處の崖で見て居た中年
の紳士の一人は、急いで驅出して行つて、建物の向に消えた。まさ
かあれを取るために、あゝ急いで驅けて行つたのでもあるまい
が。

其の内に一つ、いつもとは違つて、圓筒形をした玉を込めて居
るので、今度は何か變つたものが出るだらうと注意して見て居

鍵屋
花火を製造す
る老舗。

た。打揚げられた圓筒は、迅速に旋轉しながら昇つて行つたが、開
いたのを見ると、それは夜の花火によくあるやうな傘形に、或は
しだれ柳のやうに、空に天蓋を擴げるのであつた。此について一
つ不審に思つた事は、あれがどうして、いつでも傘のやうに垂直
線の周圍に對稱的に擴るかといふ事である。何でもない事のや
うに思つて居たが、考へて見ると、此はさう簡単な問題ではなさ
さうである。あの圓筒形が其の筒の軸と直角な軸の周圍に廻轉
しながら昇るといふ事と關係があるらしいとは思ふが、本當の
事は鍵屋の職人にでもよく聞いて見た上でなければ、判斷が出
來ない譯である。昔初めて此の花火を發明した人は、偶然かも知
れないが、やつぱり少しはえらい人だつたらうといふ氣がした。
一番大きな筒の順番はなか／＼廻つて來なかつた。かれこれ
半時間の餘も見て居たが、一向に此方へは手を附けない。自分の

周圍で見て居る連中にも、矢張それが氣になるらしい事をいひ合つて居るのがあつた。私は、自分が子供の時に九段上の廣場で見た手拭を擦つてこしらへた蛇を地上において、それが今に本當の蛇になると云つて、其の周圍に圓を描いて歩きながら、笛を吹いて往來の暇人を釣つて居た妙な男の事を思ひ出した。そして其の昔の心持と今のと何處か似通つたものを探りあてて、思はず微笑したのであつた。

併し、どう／＼其の一番大きな筒が裝填される時が來た。今度は大きいぞ、大きいぞ。と云ふ聲が、群衆の中で、其處からも此處からも起つた。

かなり大きな音と共に飛出した彈丸は、風の音を立てて昇つて行つて、突然開いた。

何が出るかと思つて、緊張して居る大勢の頭上の空中に、一團

の大きな黄色の野猪のやうな烟の團塊が一つ出來た。そして唯それだけであつた。烟は次第々々に亂れて擴り散つて、唯一抹の薄い烟になつて、やがて消えてしまつた。

花火船の鱸にしがんで居た印絆纏の老人は、其處に立ててあつた、赤地に白く鍵屋と染出した旗を抜いて、頭の上でぐるぐると大きく振廻した。もうおしまひといふ合圖らしい。

船首の技手は筒の掃除をする。若い親方はプログラムを疊む。見物はおもひ／＼に散つて行つた。散つたあとの河岸に、誰かが焚きすてた焚火の灰が僅かに燻つて、ゆるやかな南の風になびいて居た。

一番大きな筒から打揚げる花火は、一番面白いものでなければならぬといふ理窟は、何處からも出て來ない譯であつた。それでも、何だか少し欺かれたやうな氣がしたのは、存外自分ばかり

りではないだらうと思つた。

そして自分は、此までに此とよく似た幻滅を感じさせられた
いろ／＼の場合を想ひ起しながら、又あてもなく、祝日の人通に
賑ふ銀座の方へ歩いて行つた。(雑誌「中央公論」)

○ 北原白秋

○ ちはやく冬のマントをひきまはし銀座いそげば降る
雲かな

○ 中村憲吉

○ 電線に雨そゞごととき音をして電車いくつも来ては停
りぬ

三〇 萩大名

大名 立烏帽子、素襖袴、小さ刀、

三人 冠者 半袴

亭主 長袴

大名罷り出でたるは隠れもない大名。この中御前に詰めてあれ
ば、心が何とやら屈してござる。太郎冠者を呼出し、何方へぞ遊山
に参らうと存ずる。あるかやい。冠者、御前に。大名、汝を呼出すは別
儀ではない。何方へぞ遊山に行かうと思ふが、何とあらう。冠者は、
内々は御意なうても、申し上げたう存ずる所に、一段でござりま
せう。大名よからうな。冠者は、大名、何と、西山、東山はいつもの事、様
子の違うた所へ行きたいが、何處もとがよからうな。冠者、まこと
に御意の通り、西山、東山はいつもの事でござる。されば、何處もと

がようござりませうぞ。はあ、思ひつけてござる。これよりも下京
 邊に、心やさかたな御方がござる。殊の外の庭ずきでござる。これ
 への御遊山がようござりませう。大名、おう、これが一段よかる。そ
 れへ向けて行かうぞ。冠者は、さりながら、これへござれば、お歌を
 なされねばなりません。大名、それは如何やうな事を詠むぞ。冠者
 『三十一文字の言の葉を傳へた事でござる。大名、あゝ、こりやなる
 まいわい。冠者は、申し上げます。大名、何とした。冠者、某土京邊を通
 つてござれば、若い衆の見物にござらうとあつて、萩の花につい
 て句づくろひをなされたを聞いて参りましてござる。御前に教
 へませう。大名、やい冠者、其の庭にも萩の花があらうかな。冠者、殊
 に亭主好きまするのが萩でござりまする。大名、ふん、其の儀なら
 ば急いで教へい。冠者、畏つてござる。七重八重九重とこそ思ひし
 にとよ咲出づる萩の花かな』と申す事でござる。大名、ふん、してそ

ればかりか。冠者はあ。大名、いや、これほどの事ならば詠まうほど



大 萩 名

に、急いで來い。冠者、畏つてござる。大
 名、來い來い、やい冠者、して今の歌の
 いひ出しは何であつたぞ。冠者、忘れ
 さつしやれてござるか。七重八重』で
 ござりまする。大名、おう、それぢや、し
 て其の後は。冠者、申し殿様、これでは
 なりますまい。大名、おう、なるまいわ
 い。急いで戻れ。冠者、申し殿様。大名、何
 ぢや。冠者、さりながら、ものによそへ
 たら覚えさつしやれませうか。大名

『よそへものによつて覚えうす。冠者、即ち扇の骨によそへませう。
 『七重八重』と申す時に、七本八本廣げませう。九重』と申す時に九本

廣げませう。」とよ咲き」と申す時に、皆廣げませう。大名おう、これはよいよそへものぢやわい。やい、して又其の後があるぞよ。冠者はあ、これは猶よそへものがござる。大名それは何によそへるぞ。冠者すなはち身共をば臚脛ばかり伸び居つてと、厚く折檻なされます。其の脛をば思ひ出さつしやれませう。大名おう、是が一段ぢや、來い來い。冠者とつとござりました。すなはちこれでござります。それに待たしやれませ。大名やい冠者、亭主に、大名ぢやほごに、これへ迎に出よといへ。冠者、畏つてござる。御亭内にござるか。亭主、いえ、冠者殿何としてござつたぞ。冠者、其の事でござる。頼うだ人が此方の庭を聞及うで、見物にござるほどに、表へ迎に出さつしやれい。亭主、心得ましてござる。はつ、これは又、見苦しい所へ御腰掛けられうとござります。辱うこそござります。大名、やい冠者、ありや亭主か。冠者はあ。大名、御亭、不案内におぢやる。

かう通ります。亭主はつ。大名やい、太郎冠者、床机々々。冠者はつ。大名やい、亭主に、これへ出られいといへ。冠者はつ、御亭、これへ出さつしやれい。亭主、畏つてござる。大名、御亭々々、聞及うだよりもいかう庭が見事でおぢやる。亭主はつ、この中は手入もいたさぬによつて、いかう汚穢うござります。大名、いや、さうもおぢやらぬい、なう御亭、あの向な松は、女松でおぢやるか、男松でおぢやるか。亭主、いや、あれは男松でござります。大名、ふん、いかう見事でおぢやる。やい、冠者、見事なな。冠者はつ、大名、あの左の方へすつと出た枝を見たか。冠者、なか、見ましてござる。大名、鋸おくせい、引切つて心に立てうに。冠者は、御亭、不案内におぢやる。亭主、これ、冠者、何でかござるぞ。亭主、いや、あの殿様に仰しやれませうには、いづれもの御腰掛けられては、あの萩の花につけて短冊を掛けさつしやる。殿様にも遊ばしませいと仰

しやれい。冠者心得ましてござる。申します。大名何とした。冠者
「亭主申します。程には、いづれも短冊をなされます。程に、花
につけてお歌をば詠まつしやれいと申します。大名ふん、亭主
にこれへ出よといへ。冠者はつ。大名御亭。只今は歌を詠めと仰し
やる。久しう詠まぬが何とおぢやる。一つ詠まうか。亭主遊ばしま
せう。大名かうもおりやろか。七重八重九重とこそ思ひしにとへ
咲出づる萩の花かな。亭主あゝこれはいかう出来さつしやれて
ござります。大名亭主、身は歌よみで居りやるいの。亭主あゝ、い
かう出来さつしやれてござる。大名やい冠者、亭主が出来たてて
いかう喜ぶは、汝は何方へぞ行け。暇を出すほごに、緩りと行て寛
いで来い。冠者畏つてござります。亭主申し殿様。大名御亭、何で
おぢやるぞ。亭主只今短冊に書きます。も一度吟じさつしやれ
ませう。大名おう心得ておぢやる。七重八重九重とこそ思ひしに、

とへ咲出づる、出づる。いや、冠者奴はごこもとに居るぞぢやまで
い。亭主申し殿様、御歌に冠者はいりますまい。急いで後を詠まつ
しやれませい。大名して短かうおぢやるか。亭主なか、字が足
りませぬ。大名したらば、出づるを幾つも書いて置きやれ。亭主い
や、それではなりません。大名はて、冠者奴がはや戻り居らいで、
亭主申し殿様、急いで詠まつしやれませい。大名こゝな奴は諸侍
に手を掛け居つて、憎い奴の。亭主でも字が足りませぬ。大名あゝ、
思ひ付けたは。亭主何と。大名もの。亭主何と。大名太郎冠者が向
膳に某が鼻の先。亭主何でもないこと。とつとといかませ。

(狂言記)

呑みこみのわるさは是非なくはぎで捨て

矢野文雄
號は龍溪、文
學者。

川柳點

矢野文雄

銀句

季節が(寂)う諸君
重鳥獸植物気候

わ
か
り

切
り

あ
ら
ま

あ
ら
ま

あ
ら
ま

川柳

箱
味
が
入
る

今年こそ大晦日には早く仕事をしまひ、ゆつくりと年を取るべしと、何れの家も大晦日には其の心掛をなせども、何がさて一年の終の日として、折角の外向の用を濟ませば、家内の用向、元日の支度に、到頭夜に及び、大騒の中に舊年新年の境目なる十二時の時計は鳴りて、舊年の終の事を爲しつゝ、はや既に新年に入る類は、何れの家も珍らしからぬと見え、古き川柳にも、
据風呂あけ風呂に下女が入るうち春になり
蓋し家内總仕舞の殿として、下女が風呂に入る頃は、はや十二時を過ぐるごとと見えたり。昔も今も變らぬものは此等の有様なり。川柳ほど氣の利きたるものはなし。
歌がるた人といふ字に手が五つ

これも昔の句ながら、今も同様かるたの句の頭字の人と云へるには、五つどころか、一時に十の手も出づべし。又曰く、

一日の御慶炬燵へとりよせる

旦那様歸宅の後、夜分に入り、どれ／＼新年の名刺を持つて來よ、といふは、何れの家も似たるものなるべし。又曰く、

上るなと言はぬばかりの帳を出し

これは今の若き人には分らぬかも知れず、今なれば、

上るなと言はぬばかりの箱を出し

ともいふべし。これは名刺入れの箱と知るべし。

凡そ川柳は突如として來り、初より其の題を言はぬところに

妙味あり。

芭蕉は飛込み道風は飛上り

若し此の句の前に題を蛙と書きたらんには、興味薄かるべし。其

文王
周の武王の
父。

の出し抜けなる所面白し。
釣れますかなどと文王そばへ寄り
の如き有名の句も、其の突如として出づる所に妙あるのみ。
釣などもして見る馬鹿な軍學者
常に文王が來るとは限らず。大公望氣取の軍學者も困つたもの
なり。

早太
源頼政の臣に
て、鶴退治を
以て名高き猪
早太。

其の暗さ早太櫻に突當り
まさか暗しとて、紫宸殿の大庭の櫻に突當る程にもあるまじけ
れども、何かなしにをかし。

以上の諸句は川柳として先づ品のよき方なり。若し其の秀逸
と稱せらるゝものを數ふれば、いづれも皆品あしく、士君子の間
に語り難きもののみ。川柳として下品の境より脱せしめば、蓋し
詩歌中の珍ならん。(出たらめの記)

北原白秋
名は隆吉。文
學者。

叙事詩
抒情詩

三三 落葉松

北原白秋

落葉の幽かなる、その風の細かに寂しく物あはれなる、たゞ心
より心へと傳ふべし又知らむ、その風は、そのさゝやきは、又我
が心のさゝやきなるを。

一

からまつの林を過ぎて、
からまつをしみと見き。
からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかりけり。

二

からまつの出でて、
からまつの入るぬ。
からまつの入りにて、

また細く道はつゞけり。

三

からまつの林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨のかゝる道なり。
山風のかよふ道なり。

四

からまつの林の道は
われのみか、ひともかよひぬ、
ほそくくと通ふ道なり。
さびくといそぐ道なり。

五

からまつの林を過ぎて、

ゆるしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり。
からまつとさゝやきにけり

六

からまつの林を出でて、
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
からまつのまたそのうへに

七

からまつの林の雨は
さびしけどいよゝしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる、
からまつの濡るゝのみなる。

世の中よあはれなりけり。
常なけどうれしかりけり
山川に山がはの音。
からまつにからまつの風。(水盛集)

ほろびの光

伊藤左千夫

おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しとくと柿の落葉
深く

鶏頭のやゝ立ちみだれ今朝や露のつめたきまでに園さ
びにけり

今朝の朝の露ひやゝと秋草やすべてかそけき寂滅の
光

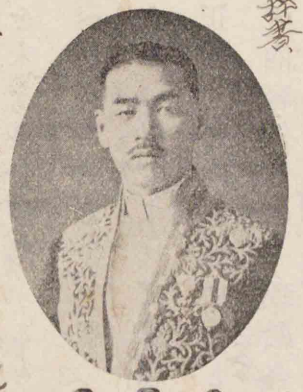
上田敏
柳村と號す。
文學博士。大
正五年歿、年
四十四。

三三 詩文の格調

上田敏

道徳に於て、徒らに格言箴戒を口にして善行を實修せざるも
のが價值なき如く、詩文に於ても、單に内容思想を偏重して格調
を末なりと排斥するものは、未だ真正の洞察を得たる人といふ
べからざるなり。修學の法粗鹵にして素養訓練を煩はしとする
人々は、動もすれば思想を偏重する弊に陥り易きものなれど、眞
正なる妙趣を味はんと欲する士は、かまへて此の邪徑に蹈入ら
ず、内容外形の一致融合に始より留意せらるべし。最も効果ある
詩文の防腐劑は、實に其の格調なり。古より一ふしある識見を吐
露し稱讚すべき議論を唱道せし人は、其の數量り知るべからず
といへども、須臾にして世の記憶より消滅するは、ひとへに格調
に於て未だしき所あればなり。

然れども吾等の唱道する格調といふものは、たゞ艶麗なる詞章を列ね、流暢なる語勢を加ふる義に、あらず。詩文の語は、樂律の音と類を異にしたゞ、聽覺に快感を惹起すを以て、能事畢れるにあらず。此處に格調といふは、寧ろ思想發展の徑路に、絶倫の氣風ありて、雄偉勁健なるを意味す。されば



格調の美を有せんと欲せば、思想の美なかるべからず。又思想の秀たるを形作らんとせば、必ず同時に格調の秀たるを形作らざるべからず。

典雅沈靜は格調の精髓なり。靜列にして從容迫らず、勢餘ありて氣舒びたるは詩文の上乗なるものか。激越にして沈靜なき文は常に粗笨未熟の蹤あり。護摩壇に燃ゆる黒烟の如き詩文は秀逸の作にあらず。黄金白銀の扉に映じたる燈明の澄耀きて敬虔

岷江
支那四川省に
在る大河。

ダンテ
Daute
伊太利の
詩人。

の意を啓示する如きをこそ眞正の模範と稱すべけれ。典雅なる詩文には、清秀の態あり、沈靜のもの亦必ず莊重の風を具ふ。格調の美はまた大いに感情の節抑に因りて増加せらる。怨嗟哀愁の調は素より幽麗の妙ありて、詩文の一要素なれど、かの悲哀の極に達して號叫の狀を呈するものは、婦女の痴態にして性情の薄弱なるを示し、遂に莊重の美を損するに至らん。長江の水汪洋として細波なく、激湍なき如く、秀拔の詩も亦岷江の楚に入りたるを學びて、萬斛の悲愁を蓋ふに從容の態を以てすべし。情熱の微弱なるは素より詩文の域に入らずと雖も、熾烈なる感情を節抑したるものは、益、其の美を増加するものにして、吾等が古代ギリシヤの美術に於て、最も尊重するも此の美性なり。イタリヤの詩人ダンテが、地獄の呵責をまのあたり見たる如く書きなしたる神曲といふ詩が、其の格調に於て、激稱せらるゝも、偏に此

の詩人が意志力の旺盛にして、節抑の美德、いつも篇中に顯れたればなり。

秀拔なる格調の原因として、簡素を獎説するものあり。これまことに道理ある議論にして、艶美絢爛の文は、大方雄勁の調なく、深大なる感觸を與ふること能はざるを常とすれど、濃艶一轉して、莊麗となり、華美形を變じて、燦然たる詞章の綾を成さば、堂々たる臺閣の風を備へて、魁偉の勢あるべく、終に格調の上乗なるものを生ぜん。イギリスの文章の例を取れば、ギボンが羅馬帝國衰亡史の如きは、簡素に因らずして、而も秀拔の格調を捉へ得たるものなり。

Gibbon 英國の歴史家。
Mathew-Arnold 英國の批評家。

イギリス近代の一大批評家マシュー・アーノルドが、詩歌の巧拙を判ずる唯一の試金石は、古來の秀句より外にあるべからずと説きしは名言なり。居常名篇傑作を精讀して、其の秀逸なる格

Milton 英國の詩人。

調を鑑賞し慣れたるものは、其の趣味不知不識の間に發達して、精微なる批判力を養成し來るものなれば、一朝詩文の品騭を試みんと欲するに當りて、直ちに犀利明快の裁斷を下すことを得るなり。されば詩文に志す人々は、常に名家の筆路に細心の研究を施し、能く其の格調の美に留意して、縹渺たる神韻を逸する事なく、充分其の妙趣を掬せんと勤むること肝要なり。今茲にイギリスの詩文を味はんと欲する人、先づミルトンの作を精讀し、其の格調に於て發明する所あらば、餘の詩人を研究するに於て大なる助を得べし。蓋しミルトンの如きは、世界の文學者中にも最も格調の點に於て成功したる詩人の一人なればなり。而も格調の論、獨り瀛西の詩文に止るべからず、古往今來廣く東西の文學に施して、恃らざる見と信するなり。(文藝論集)

三四 鉢木

シテ 佐野源左衛門常世
ツレ 同 妻
ツレ 旅僧、實は最明寺時頼
ツレ 同 者
狂言 右 從 者

観世流
寶生流
金銅流
長考流
金春流

信濃なる云々

信濃なる淺間の嶽に立つ煙遠近人の見やはとがめぬ。

(伊勢物語)

大井山・離れ坂・碓氷川・板鼻

共に信濃より碓氷峠に到る

途中の地を經て上州高崎に至る地名。友

の里は伴野庄をいへり。

佐野の渡

高崎より二十

町程の東にあ

ワキ次第、ゆくへ定めぬ道なれば、來し方も何處ならまし。

ワキ、是は一處不住の沙門にて候。我この程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづ此の度は鎌倉に上り、春になり

修行に出でばやと思ひ候。

道行、信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大

井川、捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離れ坂墨の衣の碓氷川

下す筏の板鼻や、佐野の渡りに着きにけり。

ワキ、急ぎ候ほどに、上野國佐野の渡りに着きて候。あら笑止や、又

雪の降來りて候。此の所に宿を借らばやと思ひ候。いかに此の屋の内に案内申し候。

ツレ、誰にてわたり候ぞ。

ワキ、これは修行者にて候。一夜の宿を御かし候

候。易き御事にて候へ

ども、主の御留守にて候

ほどに、御宿は協ひ候ま

じ。

鉢木
十二月
修行の定めぬ道なれば、來し方も何處ならまし。
この一處不住の沙門にて候。我この程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづ此の度は鎌倉に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候。

木論流世観

ワキ、さらば御歸まで是に待ち申さうするに候。

ツレ、それはともかくもにて候。妾は外面へ出でむかひ、此の由を

申さばやと思ひ候。

雪は鵝毛に云々
雪似鵝毛飛
散亂人被鵝
幣立徘徊
(和漢朗詠集)
細布衣陸奥
陸奥の希婦
(けふ)の里の
名産。

シテ、あ、降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候らむ。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴幣を着て立つて徘徊すといへり。されば今降る雪も、もと見し雪に變らねども、われは鶴幣を着て、立つて徘徊すべき袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥のけふの寒さを如何にせむ。あら面白からずの雪の日やな。あら思ひよらずや、この大雪に何とて是に佇みて御入り候ぞ。

ツレ、さん候。修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候ほどに、御留守の由申して候へば、御歸まで御待ちあらうずるよし仰せ候ほどに、是まで参りて候。

シテ、扱その修行者はいづくに渡り候ぞ。

ツレ、あれに御入り候。

ワキ、我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪にて前後を忘れて候ほどに、一夜の宿を御貸し候へ。

シテ、やすき御事にて候へども、餘りに見苦しく候ほどに、御宿は協ひ候まじ。

ワキ、いや、見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御貸し候へ。

シテ、とめ申したくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候ほどに、なか、御宿は思ひもよらぬ事にて候。是より十八町あなたに、山本の里とてよき泊の候。日も暮れぬさきに一足もはやく御出で候へ。

ワキ、扱はしかと御貸しあるまじいにて候か。

シテ、御いたはしくは存じ候へども、御宿はまゐらせがたう候。

ワキ、あら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ものかな。

ツレ、あさましや、我等かやうに衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ、後の世の便りともなる

駒とめて云々
藤原定家の
歌。新古今集
にあり。

べけれ。然るべくは御宿を参らせ給ひ候へ。

シテ左様に思召さば、何とて以前には承り候はぬぞ、いや此の大
雪に遠くは御出で候まじ。某追つ付きとめ申し候べし。なう、
旅人御宿参らせうなう。餘りの大雪に、申す事も聞えぬげに候。痛
はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失
ひ、一所にたゞずみて、袖なる雪を打拂ひ打拂ひし給ふ氣色。古歌
の心に似たるぞや。駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし、佐野の渡りの
雪の夕暮。かやうによみしは大和路や、三輪が崎なる佐野の渡り、
地是は東路の佐野の渡りの雪の暮に、迷ひ疲れ給はんより、見苦
しく候へども、一夜は泊り給へや。歌げに是も旅の宿、假初ながら
値遇の縁、一樹の蔭のやどりも、此の世ならぬ契なり。それは雨の
木蔭、これは雪の軒舊りて、憂寝ながらの草枕、夢より霜や結ぶら
ん。

盧生が見し云々
支那の蜀の國
に盧生といふ
青年あり、邯
鄲の市にて道
士呂翁の枕を
借りて眠り、
榮華五十年の
夢を見しが、
そは僅かに主
人が黄梁を炊
ぐ間に過ぎざ
りしといふ故
事。

シテいかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ、参らせ
うずる物もなく候はいかに。

ツレ折節これに粟の飯の候程に、苦しからずば参らせられ候へ。

シテさらば其の由申し候べし。いかに申し候。御宿をば参らせて
候へども、参らせうずる物もなく候。折節これに粟の飯のある由
申し候。苦しからずばきこし召され候へ。

ワキそれこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。

シテなう、きこし召されうずると仰せ候。急いで参らせ候へ。

ツレ心得申し候。

シテ總じて此の粟と申す物は、いにしへ世にありし時は歌によ
み、詩に作りたるをこそ承りて候に、今は此の粟を以て身命を繼
ぎ候。げにや盧生が見し榮華の夢は五十年、その邯鄲の假枕、一炊
の夢のさめしも粟飯炊ぐ程ぞかし。あはれや、げに我もまた暫し

なりともうちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、なう御覽ぜよ、かほどまで、地住みうかれたる故郷の、松風寒き夜もすがら、寝られねば夢も見ず、何思ひ出のあるべき。

シテ夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあてまゐらせ候べきや、思ひいだしたる事の候。鉢の木を持ちて候。これを切り、火に焚いてあて申し候べし。

ワキげに、鉢の木の候よ。

シテさん候。それがし世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集め持ちて候ひしを、斯様の體にまかりなり、いや、木ずきも無用と存じ、皆人に參らせて候。さりながら、今も梅櫻松を持ちて候。あの雪持ちたる木にて候。某が祕藏にて候へども、今夜の御もてなしに、これを火に焚きあて申さうずるにて候。

ワキいや、これは思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう

候へども、自然又お事世に出で給はん時の御慰みにて候間、なかか思ひもよらず候。

シテいや、とても此の身は埋木の、花咲く世にあはん事、今此の身にてはあひがたし。ツレたゞ徒らなる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、シテこれぞまことに難行の法の薪と思しめせ。ツレしか

も此のほど雪降りて、シテ仙人に仕へし雪山の薪、ツレかくこそあらめ、シテ我も身を、地捨人の爲の鉢の木、切るとてもよしや惜しからじと、雪打拂ひて見れば、面白やいかにせん。先づ冬木より咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、こと木より先づ先立てば、梅を切りや初むべき。見じといふ人こそうけれ山里の折りかけ垣の梅を、だに情無しと惜みしに、今更薪になすべしとかねて思ひきや、櫻を見れば、春ごとに花少し遅ければ、此の木やわぶると心をつくし育てしに、今は我のみわびて住む、家櫻切り

埋木の云々

埋木の花さく

こともなかり

しに身のなる

はてそあはれ

なりける。

源頼政、平家物語

窓の梅の云々

池、凍、東頭、風

度解、窓、梅、北

面、雪、封、寒、菅

原、淳、成、和、漢

朗詠集

見じといふ人

そ云々

山里の折りか

け垣の梅の花

いかなる人の

見じといふら

む。

菅家後集

老年養老期
國語試題
解

くべて、緋櫻になすぞ悲しき。シテさて松はさしもげに、地枝をた
め葉をすかしてか、りあれと植ゑおきし、其のかひ今は嵐吹く、
松はもとより煙にて薪となるもことわりや、切りくべて今ぞみ
垣守衛士の焚く火はおためなり、よくよりてあたり給へや。

ワキ、近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候。

シテ、御出でにより我等も火にあたりて候。

ワキ、いかに申し候、主の御名字をば何と申し候ぞ、承りたく候。

シテ、いや某は名字もなき者にて候。

ワキ、何と仰せ候とも、常人とは見え給はず候、自然の時の爲にて
候、何の苦しう候べき、御名字を承り候べし。

シテ、此の上は何をかつ、み候べき、是こそ佐野の源左衛門尉常
世がなれる果にて候。

ワキ、それは何とてかやうの散々の體にはなり給ひて候ぞ。

シテ、其の事にて候、一族ごもに押領せられて、かやうの身となり
て候。

ワキ、なう、それは何とて鎌倉へ御上り候ひて、其の御沙汰は候は
ぬぞ。

シテ、運のつくる所は、最明寺殿さへ修行に御出で候上は候、かや
うにおちぶれては候へども、御覽候へ、是に武具一領、長刀一えだ、
又あれに馬を一疋つないで持ちて候、これは唯今にてもあれ、鎌
倉に御大事あらば、ちぎれたりとも、此の具足取つて投げかけ、鏑
びたりとも、長刀を持ち、瘦せたりとも、あの馬に乗り、一番に馳せ
参じ着到に、さして合戦始らば、地敵大勢ありとも、一番に破
つて入り、思ふ敵と寄りあひ討ちあひて、死なん此の身の此のま
まならば、徒らに飢に疲れて死なん命、なんぼう無念の事さぶぞ。
ワキ、よし、や身のかくては果てじ唯頼め、我世の中にあらん程、ま

最明寺殿
北條時頼。剃
髪して最明寺
入道といふ。

唯頼め云々
なほ頼めしめ
ちが原のさし
も草われ世の
中にあらむか
きりは、新古
今集

づこそまわり候はめ暇申して出づるなり。
ツレ名残惜しの御事やはじめはつゝむ我が宿のさも見苦しく
候へどしばしは留り給へや。

ワキ留る名残のまゝならばさて幾度か雪の日の、ツレ空さへ寒
きこの暮に、ワキいづこに宿をかり衣、ツレ今日ばかり留り給へ
や。ワキなごりは宿に留れども暇申して、ツレ御出でか。地さらば

よ常世。シテまた御入り。地自然鎌倉に御のぼりあらば御尋あれ
ばうがる法師なり。かひなくはなれども公方の縁になり
申さん御沙汰捨てさせ給ふなど言捨てて出船のともに名残や
惜むらん。

中入

シテいかにあれなる旅人鎌倉へ勢の上ると、ふはまことかな
におびたゞしく上る。さぞあるらん。東八個國の大名小名思ひ思

セら分執権頼朝
藤原頼朝

ひの鎌倉入りさぞ見事にて候らん。白金物打つたる絲毛の具足
に、金銀を展べたる太刀かたな、飼ひに飼うた馬に乗り、乗替中
間きらびやかに、うち連れうち連れのぼる中に、常世が常にかは
りたる馬物の具や打物の物そのものにあらざる氣色さぞ笑ふ
らん。さりながら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、
勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや。地急げども急げども、弱きに
弱き柳の絲、シテよれによれたる瘦馬なれば、地うてどもあふれ
ども、先へは進まぬ足弱車の、乗り力なければ追ひかけたり。

ワキいかに誰かある。
ツレ御前に候。
ワキ國々の軍勢どもは、皆々來りてあるか。
ツレさん候。悉くまわりて候。
ワキ其の諸軍勢のなかに、いかにもちぎれたる具足を着錆びた

る長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いでこなたへ來れと申し候へ。

ッレ、かしこまつて候。いかに誰かある。

狂言、御前に候。

ッレ、君よりの御錠ちとせには、諸軍勢のなかに、ちぎれたる具足を着錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者あるべし、急いで尋ねて御前に参れとの御事にて候。

狂言、畏つて候。いかに申し候。

シテ、何事に候ぞ。

狂言、上意にて候。急いで御前へ御参り候へ。

シテ、何と某に参れと候や。

狂言、なか／＼のこと。

シテ、あら思ひよらずや。これは定めて人違にて候べし。

狂言、いや／＼、そなたの事にて候。其の仔細は諸軍勢の中、いかにも見苦しき武者をつれて参れとの上意に候が、見申せば、其方ほど見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御参り候へ。シテ、何と、たとへば諸軍勢の中に、いかに見苦しき武者に参れと候や。

狂言、なか／＼のこと。

シテ、さては某にて候べし。畏り候と御申し候へ。

狂言、心得申し候。

シテ、げに／＼、これも心得たり。某が敵人、謀叛人と申し上げ、御前へめし出され、頭を刎ねられたためなよし／＼、それも力なし。いで／＼御前に参らんと、大床さして見渡せば、地今度の早打に上り参れる兵、きら星の如く並み居たり。さて御前には諸侍、その外數人並み居つ、目をひき、指をさし、笑ひあへるその中に、シテ、横

縫のちぎれたる、地古腹巻に鑄長刀やうく／＼に横たへ、わるびれたる氣色もなく、参りて御前にかしこまる。

ワキやあ、いかにあれなるは佐野の源左衛門尉常世か。是こそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ。見忘れてあるか。いで汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも其の具足取つて投げかけ、鑄びたりとも其の長刀を持ち、瘦せたりとも其の馬に乗り、一番に馳せ参すべきよし申しつる。言葉の末を違へずして参りたるこそ神妙なれ。まづ／＼今度の勢づかひ、全く餘の儀にあらず。常世が言葉の末、眞か偽か知らん爲なり。又當參の人々も、訴訟異あらば申すべし。理非によつて其の沙汰いたすべきところなり。まづ／＼沙汰のはじめには、常世が本領佐野の庄、三十餘郷返し與ふるところなり。又何よりも切なりしは、大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火にたきあ

てし志をば、いつの世にかは忘るべき。いで其の時の鉢の木は梅、櫻松にてありしよな。その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝、あはせて三個の庄子々孫々にいたるまで、相違あらざる自筆の狀、安堵に取添へたびければ、シテ常世は之を賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ。始め笑ひしともがらは、是程の御氣色、さぞ羨ましかるらん。地さて國々の諸軍勢、皆御いとま賜はり、故郷へとてぞ歸りける。シテその中に常世は、地よろこびの眉を開きつゝ、今こそ勇め、この馬に打乗りて、上野や佐野の船橋、とりはなれし本領に安堵して歸るぞ嬉しかりける。(謡曲)

○
妙なるといふは形なき姿なり。形なき所妙體なり。幽玄の花風

を離るべからず。(世阿彌元清)

高山樗牛
名は林次郎
文學博士。明
治三十五年
歿年三十二

三五 世界の四聖

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば、誰かこれを能くせん。釋迦孔子ソクラテス基督の四人、世呼びて世界の四聖と稱す、宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生れき。父は淨飯王、母は麻耶夫人、その本名を悉達多といへり。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。その身一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳、妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて道を修むること六年、終に人生の奧義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に本づく。

淨觀。原真。佛。死。無難。身。子。孫。大個。年。古。



釋 迦

歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その洪大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をしてその歸依する所を知らしめたり。

蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒らに思索の高遠を欣びて、人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。その流派を樹てて相争ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ、未だ一世の元々をして

孔子は名を丘といふ。孔子はその尊稱なり。今を距る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生れき。幼より學を好み、禮を習へり。壯年の頃、魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて、夙に令聞あり。學徳愈進めり。魯の定公の時に至り、擢んでられて大司寇の職に就く。治

績大いに擧り、内外その風采を想望す。時に齊侯、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊説を試みぬ。當時の支那は所謂春秋の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にしてその君を弑するものあり、子にしてその親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義



孔子

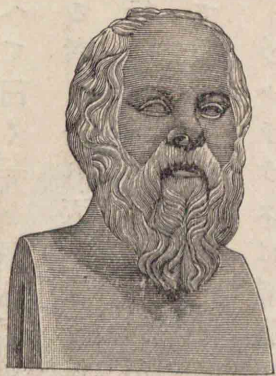
あるなし。教化の陵夷、風俗の頹廢、未だ曾てこの時の如きはあらざりき。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に回さんとす。志や高且大なりと謂ふべし。此の如くにして四方に

漂浪すること十三年、時非にして道容れられず。世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、嗚呼わが道遂に窮す。世遂に我を知る者なきか。と。門弟子貢慰めて曰く、何ぞ夫子を知る者なからん。と。孔子對へて曰く、天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。わが道行はれずんばわれ何を以てか後世に見えん。と。幾ばくもなくして歿せり。時に年七十三。

ソクラテスは希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なりき。その生れたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔つること八九十年なり。東西の聖人、餘りに時を隔てずして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に止り、道德は空文の上

詭辯學派
西曆前第五世紀の後半において、一時希臘に勢力ありし學派。その始祖をプロタゴラスといふ。

にのみ尙ばれたり。その状なほ釋迦當時の印度の如く、人生社會の實際に關しては、殆ど裨益する所なかりき。ソクラテスは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄諄として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、即ちその獨得の論法を以て、辯難攻撃して、一步も假借せず、侃諤の正義、その稀代の雄辯と相伴ひて、一世を風靡せり。然るに喬木は風に折らる、喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざる者相謀りて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。その訴狀に曰く、ソクラテスは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし。と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國



ソクラテス

アスクレピオス
Asklepios
神 醫術の

民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く、命のみ。と。その獄中にあるや、常にその門弟子を集めて、生死、靈魂、未來のことを説き、人の脱獄を勸むるに對しては、輒ち答へて曰く、予はたゞ正義に導かれんのみ。死はた何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上にあるを知らずや。と。終に從容として毒を仰いで歿せり。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、爾、一鶏を以てアスクレピオスの神に捧げよ。と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスは、此の如くにして逝きぬ。年七十。

基督は本名を耶蘇といふ。基督は膏灌がれたる者。といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のペトレヘムに生れき。その

生後四年を以て、西曆紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母はマリヤといへり。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へた



基督

り。抑、當時は羅馬帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽の中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇の淫祠を崇拜して、益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて、空しく人を惑はすのみ。茲に於て、一世の人心は缺焉として、偉人の現出して、この暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然

としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶學者官吏等、これを喜ばず、以て猥りに新法異説を唱へて、民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔刑に處せり。基督豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ、彼等を許せ。彼等はその爲すべき所を知らざればなり」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「エルサレムの女子よ、我がために哭くことなかれ。唯己と己の子とのために哭け」と。此の如くして、基督は三十三年の短き生涯にて、十字架上の露と消去りぬ。基督の死後、その弟子等は、激烈なる迫害に抗抵して、その教を天下に弘めぬ。基督教即ちこれなり。以上は四聖の略傳なり。その人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し崇拜すべき所なり。四聖の内、釋迦を除いては、いづれも轉軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に

得ず、その經論を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘なりといふべし。然れども、これらの人々の志しし所は、天下後世にあり。現世の禍福と一身の安堵とは、毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや、晏然として猶歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却りて「わが道行はれずばわれ何を以てか後世に見えん」と嗟歎せり。釋迦は衆生のためにその妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、「正義を信ずる者に取りて、死はた何爲るものぞ。我をして一日の生あらしめんか、乃ちその一日も國民の迷を覺さざるべからず」と。基督は己を罪に陥れたる者のために神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の洪大にして無邊なる。

身を修め云々
大學に出づ。
孝は百行のな
り。
古文孝經の序
に出づ。

四聖はその生れたる處と時とを異にす。故にその教理にも、また多少の差違なきを得ず。今その要を擧ぐれば左の如し。
釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死、いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して、苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は我の一念に執着するにあり。故に吾人は我の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。
孔子の教は身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して、身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生れながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を

受けて、身既に修らば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治るべく、國治らば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテスの教は、所謂知徳合一説なり。おもへらく、真正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとは、もと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識・道德の真正なるものにあらず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正義自らその中にあり。正義は靈魂の満足なり。靈魂は肉體と異なりて、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ時、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず。然れども富貴は道德の中にあり」と。

基督の教は「愛の教なり」と稱せらる。所謂山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。曰く、心の貧

しきものは福なるかな。天國はその人の有なればなり。悲むものは福なるかな。その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな。その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな。その人は憐を得べければなり。心の清きものは福なるかな。その人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉じてこれに向けよ。汝の隣人を慈みて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために、義をその前に行ふなかれ。右の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。僞善者の行に倣ふなかれ。隠れたるを鑑み給ふ神は、あらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞおの目にある梁木を見ざる。汝等求めよ。然らば與へられん。尋ねよ。然らば遇はん。叩け。然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪シムルに至る

門はその路大きく、これに入る者は多し。嗟呼、いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得るものの少きぞ。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聴けども行はざるは、砂上に屋を建つる愚人の如し。と。基督教の精髓は、後世の人さまざまの色彩を加ふれども、實にこの山上の垂訓に基す。此の如きは、四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその教の今尙凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは、實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。その遺徳の高大なる、それ何を以てかこれに比せん。

(釋牛全集)

三六 大死一番

德 富 蘇 峯

德富蘇峯
名は猪一郎。
貴族院議員。
國民新聞社
長。



德 富 蘇 峯

を恃む外に方便も手段もあらざればなり。よし千百の方便手段ありとするも、その自力主義踐行の後に於て、始めて其の効用を見るべければなり。

然りと雖も、吾人の所謂自力主義は決して自滿主義にあらず、自足主義にあらず。何ぞ況や鎖國主義をや、排外主義をや。吾人は我が短を補ふべく、世界の總べての長を採らざるべからず。吾人は飽くまで籠城割據の風を破りて、世界と步趨を一にせざるべからず。然もこれ唯内に自ら主持する

所ありて、而して後、外に向かつて之を求むべきのみ。

吾人は、我が國民が精神的に獨立し、而して後、世界的に協調せんことを望む。精神的の獨立とは何ぞや。日本國民は日本國民として、其の獨得の立脚地に於て内外一切の經綸を定むることこれなり。東洋のドイツにあらず、東洋の英米にあらず、日本は東洋の日本としてなり、日本の日本としてなり。即ち我自ら我が固有の歴史的系統に則り、我自ら我が國民的見地に據りて裁斷を下すにあるのみ。此の如く、内既に支持する所あり、乃ち外に向かつて其の益を求む、必ずしも英米と云はず、必ずしも獨佛と云はず、世界の長は皆採りて以て我が有と爲すべし。復何をか顧慮し、何をか遲疑せんや。

惟ふに、我が國當今の憂は、第一、國民の情氣滿々たることなり。別言すれば、國民猛志を消磨し、小成に安んずるにあり。曰く、日本

は既に五大國の一に位せり。曰く、日本は既に東洋の盟主たり。曰く、日本は既に富強なりと。而して更に磨礪自彊し、此の國運を進一轉せしむるを閑却しつゝあるなり。

第二、世界の大勢を根本的に謬解したるにあり。曰く、世界は泰平なり。今後は戦争らしき戦争は絶無なるべし。國際的葛藤は國際聯盟によりて自動的に按排せらるべしと。彼等は其の待つあるを待まず、其の來るなきを待み、其の待むべきを待まず、待むべからざるを待むなり。

第三、我が日本帝國は世界に孤立せり。孤立といはんよりも多くの者より排斥せられつゝあるなり。これ必ずしも日本國民の罪とのみ云ふべからず。然も其の原因はいづくにあるにもせよ、事實は正しく此の如し。而して我が國民は、此の如き不愉快なる事實を正視し、認識し、之に處する所以の道を講ぜざるは何ぞや。

第四、我が國民は物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ぢ、自國の缺陷を補ふことを怠めず、進んで世界に向かつて自國の真相を闡明し、世界の誤解を正すことを努めず、唯その日暮しに一時の苟安を偷取しつゝ、あるは何ぞや。

第五、一寸の蟲にも五分の魂あり。如何に世界の迫害を被るとも、我が國民にして自ら道義的大自信あらば、何をか懼れ、何をか憚らんや。今日の憂は、日本帝國が世界的迫害の中心たるに非ずして、日本國民の道義的自信力の失墜にあり。

蓋し、吾人が自力主義なるものは、内に國民の道義的自信力を扶植し、先づ自ら不敗の地位を占め、而して後、徐ろに外に向かつて我が志を行ふにあるのみ。此の如くして世界と協調を保つべく、此の如くして東洋の盟主たるべく、此の如くしてアングロサ

クソン民族と角逐して世界の文明に貢獻し、大和民族の天職を全うするを得べきのみ。今日の如く、我が國民自ら信ぜずして他を信じ、自ら頼まずして他を頼み、放恣、怠慢、強ひて自ら欺いて眼前を糊塗し去らんとし、此の如くして止むなくんば、我が帝國は精神的に死亡するなり。

世界の歴史は進歩の歴史なり、改善の歴史なり、向上の歴史なり。吾人は如何に一方に痛楚號泣するが如き現象を見るも、他方には光明と平和との到來を疑ふ能はざるなり。但し之を果さんが爲には、非常なる危険、非常なる艱難、非常なる苦痛を経ざる可からず。即ち今や吾人は此の一大試煉の時期に遭遇するものなり。當面の問題は、我が日本國民が果して之に及第するか否かに在るのみ。

嘉永安政の際に於て、我が日本は全く内憂外患の危機に擠さ

れたりき。然も我が先人は種々の失敗過誤を累ねたるに拘らず、遂に之を排除して維新中興の新局面を開き、顧ふに明治半百年に互れる國運の増進は、固より明治天皇聖徳の致す所なるも、亦嘉永・安政より元治・慶應に至る國歩の艱難によりて之を培養したるものと云はざるを得ず。人は艱難に生きて安逸に死す。國も亦然り。英佛兩國の現時に於て再生復活しつゝある所以、亦固より大戦の大試煉を経來りたるが爲のみ。吾人は之を我が國の過去に徴し、之を英佛諸國の現在に徴し、我が帝國の前途に横たはる無数の危殆困難を豫想して、毫も自ら失望落膽せず。若し然る可き理由あらば、之は無数の危殆困難其の物にあらず、寧ろこれに氣付かず、空々寂々悠々寛々として、苟且偷安を事とする我が國民的精神の潰破これのみ。

我が國民が自ら冒進するにせよ、はた回避するにせよ、何れに

しても我が國民的の一大試煉の時期は既に到來しつゝあるなり。此の上の問題は、果して國民的の一大決心、一大努力、一大奮闘もて之に打克たるべきかにあり。吾人は先づ我が國民が國運の消長興廢の十字街頭に立つことを自覺せんことを望む。次に此の國家的の一大危機に向かつて勇進し、潔く此の一大試煉に及第せんことを望む。然もこれ決して容易の業にあらざるなり。吾人日本國民は、何れも國家的に大死一番して、而して後其の再生復活を期せざるべからず。如何に國家の難局を逃避するも、來る可きものは遂に來らざるを得ざるなり。吾人は寧ろ今日に於て之を覺悟し、鐵石の心腸もて之に當るの決心なかる可からざるなり。輕しく其の趾を擧ぐる勿れ、漫りに其の腕を扼する勿れ。忍ぶ可きは忍べ、耐ふ可きは耐へよ。只我が大和民族たるものは、世界公論の容す所に據り、天下の大道を行ひ、國際共通の正義を旨とし、

以て我が所信を遂げよ。吾人は我が力を恃むとともに、我が正義を恃みとす。此の如くして與國の我を扶くるあらば、與國と共にす可し。苟も與國なくんば、我躬ら往く可き道を往かんのみ。吾人は決して外患を恐れざるなり。若し眞に畏る可きものあらば、之は内憂にあり。内憂の中殊に畏る可きは、國民的志趣の消磨にあり。知らず、我が國民は大死一番、以て自ら新生命を贏ち得るの覺悟あるか。活裏死あり、死中活あり。生を欲する者は死を敢へてするものは生、國家の前途を解決すべき祕機は、只此の死生の二字中にあり。(大戰後の世界と日本)

○
大寺の香の煙はほそくとも、空にのぼりてあまぐもとなる、
あまぐもとなる。(獅子舞歌)

三七 おらが春

小林 一 茶

おらが春

昔、丹波の國普甲寺といふところに、深く淨土を願ふ上人ありけり。年の始は、世間は祝をしてさめければ、われもせんとして、大晦日の夜、ひとり使へる小法師に、手紙したゝめ渡して、あすの曉にしかくせよと、きと言ひをしへて本堂に泊りにやりぬ。

小法師は、元日の旦、いまだ隅々は小暗きに、初雞の聲と同じく、がばと起きて、教のごとく表門を丁々と敲けば、内より「何處より」と問ふ時、西方彌陀佛より、年始の使僧に候。と答ふるよりとく、上人はだしにて踊り出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座に請じて、きのふみづから認めし、かの手紙をとりて、恭しく押戴きて讀みて曰く、

小林一茶
信濃の俳人。
通稱は彌太郎。俳諧寺と號す。文政十年歿、年六十五。

それ世界は衆苦充滿に候間、とくわが國に来るべし。聖衆出迎へて待入り候。

と讀みをはりて、おうくと泣かれけるとかや。

あまのついでに
みんあつ
目おろさちう位
てそのま月
一人か
遠、笑、うふな
文正二年正月一日

小 林 一 茶 筆 蹟

禮とすると聞くからに、佛門に於ては祝の骨頂なるべし。

それとは些か變りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境涯ながら、鶴龜にたぐへての祝ひづくしも、厄拂の口上めきて空々し

この上人、みづから企

みこしらへたる悲に、み

づから嘆きつゝ、初春の

淨衣をしぼりて、滴る涙

を見て祝ふとは、ものに

狂へる様ながら、俗人に

對して無常をのぶるを

くおもほゆれば、から風の吹けば飛ぶ屑家は、屑家のあるべきやうに、門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあまた任せになん迎へける。

めでたさも中位なりおらが春

こぞのさつきに生れたるわが娘に、一人前の雜煮の膳を据ゑて、

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

露の世ながら

樂極りて愁起るは浮世の習なれど、いまだ樂半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛なるみどり子を、寐耳に水のおし來るとき、あらしくしき痘の神に見込まれつゝ、いま水膿のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨にしほれたるに等しく、側に見る目さへ苦しげにぞありける。これも二三日経たれば、痘

はかせぐちにて、雪解の峽土のほろ／＼落つるやうに、瘡蓋といふもの取るれば、祝ひ難して、さんだら法師といふを作りて、笹湯浴びせる眞似かたして、神は送り出したれど、ます／＼弱りて、昨日より今日は頼み少く、終に六月二十一日の朝顔の花と共に、この世をしほみぬ。母は死顔にすがりて、よ／＼と泣くもむべなるかな。この期に及んでは、行く水の再び歸らず、散る花の梢に戻らぬ悔いごとなどと、あきらめ顔しても、思ひきりがたきは恩愛のきづななりけり。

露の世は露の世ながらさりながら（おらが登）

信濃では月と佛とあらが蕎麥

一 茶

兩國橋

下見ても方圖がないぞ納涼舟

同

森鷗外

名は林太郎。

醫學博士・文學博士・陸軍軍醫總監・帝國美術院長・東京帝室博物館長等に歴任。大正十一年歿、年六十一。

貞觀

唐の太宗の時の年號。

新唐書

二百二十五卷。舊唐書を改修したるもの。

舊唐書

二百卷。

三八 寒山拾得

森鷗外

唐の貞觀の頃だと云ふから、西洋は七世紀の初、日本は年號と云ふもののやつと出來掛つた時である。閩丘胤と云ふ官吏がゐたさうである。尤もそんな人はゐなかつたらしいと云ふ人もある。なぜかと云ふと、閩は台州の主簿になつてゐたと言ひ傳へられてゐるのに、新舊の唐書に傳が見えない。主簿と云へば、刺史とか太守とか云ふと同じ官である。支那全國が道に分れ、道が州又は郡に分れ、それが縣に分れ、縣の下に郷があり、郷の下に里がある。州には刺史と云ひ、郡には太守と云ふ。閩が果して台州の主簿であつたとすると、日本の府縣知事位の官吏である。さうして見ると、唐書の列傳に出てゐる筈だと云ふのである。しかし閩が居なくて、話が成立たぬから、兎も角も居たことにして置くので

ある。

さて閻が台州に着任してから三日目になつた。長安で北支那の土埃を被つて、濁つた水を飲んでゐた男が台州に来て、中央支那の肥えた土を踏み、澄んだ水を飲むことになつたので、上機嫌である。それに此の三日の間に、多人數の下役が来て、謁見をする。受持々々の事務を形式的に報告する。その慌しい中に、地方長官の威勢の大きいことを味つて、意氣揚々としてゐるのである。

閻は前日に下役の者に言つて置いて、今朝は早く起きて天台縣の國清寺をさして出掛けることにした。これは長安にゐた時から、台州に着いたら早速往かうと極めてゐたのである。

何の用事があつて國清寺へ往くかと云ふと、それには因縁がある。閻が長安で主簿の任命を受けて、これから任地へ旅立たうとした時、生憎恠へられぬ程の頭痛が起つた。單純なレウマチス

性の頭痛ではあつたが、閻は平生から少し神經質であつたので、かゝりつけの醫者の藥を飲んでもなかく、直らない。これでは旅立の日を延ばさなくてはなるまいかと思つてゐると、そこへ小女が来て、只今御門の前へ乞食坊主がまゐりまして、御主人にお目に掛りたいと申しますが、いかゞ致しませう。と云つた。

「ふん、坊主か。」と云つて、閻は暫く考へたが、兎に角逢つて見るから、こゝへ通せ。」と言ひつけた。

元來閻は科擧に應ずるために、經書を讀んで、五言の詩を作ることを習つたばかりで、佛典を讀んだこともなく、老子を研究したこともない。併し僧侶や道士と云ふものに對しては、何故と云ふこともなく、尊敬の念を持つてゐる。自分の會得せぬものに對する盲目の尊敬とでも云はうか。そこで坊主と聞いて、逢はうと云つたのである。

間もなく這入つて來たのは、一人の背の高い僧であつた。垢つき弊れた法衣を着て、長く伸びた髪を眉の上で切つてゐる。目に被さつてうるさくなるまで打遣つて置いたものと見える。手には鐵鉢を持つてゐる。

僧は黙つて立つてゐるので、閻が問うて見た。わしに逢ひたいと云はれたさうだが、何の御用かな。

僧は云つた。あなたは台州へお出でなさることにおなりなすつたさうでございませぬ。それに頭痛に悩んでお出でなさると申すこととございませぬ。わたくしはそれを直して進ぜようと思つて参りました。

いかにも言はれた通りで、其の頭痛のために出立の日を延ばさうかと思つてゐますが、どうして直してくれられる積りか。何か薬方でも御存じか。

「いや、四大の身を悩ます病は幻でございませぬ。只清淨な水が此の受糧器に一はいあれば宜しい。呪で直して進ぜませぬ。」

「あゝ、呪をなさるのか。かう云つて少し考へたが、仔細あるまい。一つまじなつて下さい。」と云つた。これは醫道の事などは平生深く考へても居らぬので、どう云ふ治療ならさせる。どう云ふ治療ならさせぬといふ定見がないから、唯自分の悟性に依頼して、其の折々に判断するのであつた。勿論さう云ふ人だから、掛りつけの醫者と云ふのも、善く人選をしたわけではなかつた。素問や靈樞でも讀むやうな醫者を捜して極めてゐたのではなく、近所に住んでゐて呼ぶのに面倒のない醫者にかゝつてゐたのだから、ろくな薬は飲ませて貰ふことが出来なかつたのである。今乞食坊主に頼む氣になつたのは、何となくえらさうに見える坊主の態度に信を起したのと、水一はいでする呪なら、間違つた處で危

素問
支那最古の醫
書。
靈樞
支那古代の醫
書。素問と共
に内經と稱
す。

險な事もあるまいと思つたのとのためである。

閻は小女を呼んで、汲みたての水を鉢に入れて來い。」と命じた。水が來た。僧はそれを受取つて、胸に捧げて、ちつと閻を見詰めた。清淨な水でも好ければ、不潔な水でも好い。湯でも茶でも好いのである。不潔な水でなかつたのは、閻がためには勿怪の幸であつた。暫く見詰めてゐるうちに、閻は覺えず精神を僧の捧げてゐる水に集注した。

此の時、僧は鐵鉢の水を口に銜んで、突然ふつと閻の頭に吹きかけた。

閻はびつくりして、背中に冷汗が出た。

「お頭痛は。」と僧が問うた。

「あ、癒りました。實際閻はこれまで頭痛がする、頭痛がすると氣にしてゐて、どうしても直らせずにゐた頭痛を、坊主の水に氣を

取られて、取逃してしまつたのである。

僧は靜かに鉢に残つた水を床に傾けた。そして、そんならこれでお暇をいたします。」と云ふや否や、くるりと閻に背中を向けて、戸口の方へ歩き出した。

「まあ、一寸。」と閻が呼留めた。

僧は振返つた。「何か御用で。」

「寸志のお禮がいたしたいのですが。」

「いや、わたくしは群生を福利し、驕慢を折伏するために乞食はいたしますが、療治代は戴きませぬ。」

「なる程。それでは強ひては申しますまい。あなたはどちらの方がか、それを伺つて置きたいのですが。」

「これまで居つた處でございますか。それは天台の國清寺で。」

「はあ、天台に居られたのですな。お名は。」

普賢
文珠
共に菩薩の
名。毘盧遮那
如来の左右に
侍し、文珠は
智慧の表現、
普賢は行願の
表現とせら
る。

「豊干と申します。」

「天台國清寺の豊干と仰しやる。闍はしつかり覚えて置かうと努力するやうに、眉を顰めた。わたしもこれから台州へ行くものであつて見れば、殊更お懐かしい。序だから伺ひたいが、台州には逢ひに往つてためになるやうな、えらい人は居られませんかな。」

「さやうでございます。國清寺に拾得と申すものが居ります。實は普賢でございます。それから寺の西の方に、寒巖といふ石窟があつて、そこに寒山と申すものが居ります。實は文珠でございます。さやうならお暇をいたします。かう言つてしまつて、ついでと出て行つた。」

かういふ因縁があるので、闍は天台の國清寺をさして出懸けるのである。

全體世の中の人の、道とか宗教とか云ふものに對する態度に

三通りある。自分の職業に氣を取られて、唯營々役々と年月を送つて居る人は、道といふものを顧みない。これは讀書人でも同じ事である。勿論書を讀んで深く考へたら、道に到達せずにはあら



(筆 達宗)得拾山寒

れまい。併し、さうまで考へないでも、日々の務だけは辨じて行かれよう。

これは全く無頼着な人である。

次に着意して道を求める人がある。專念に道を求めて萬事を抛つこともあれば、日々の務は怠らずに、斷えず道に志してゐることもある。儒學に入つても、道教に入つても、佛法に入つても、基

督教に入つても、同じ事である。かういふ人が深く這入り込むと、日々の務が即ち道そのものになつてしまふ。約めて言へば、これは皆道を求める人である。

この無頓着な人と、道を求める人との中間に、道といふものの存在を客觀的に認めてゐて、それに對して全く無頓着だと云ふわけでもなく、さればと云つて、自ら進んで道を求めるでもなく、自分をば道に疎遠な人だと諦め、別に道に親密な人があるやうに思つて、これを尊敬する人がある。尊敬はどの種類の人にもあるが、單に同じ對象を尊敬する場合を顧慮して云つて見ると、道を求める人なら、後れてゐるものが進んでゐるものを尊敬することになり、こゝに云ふ中間人物なら、自分のわからぬもの會得することの出來ぬものを尊敬することになる。そこに盲目の尊敬が生ずる。盲目の尊敬では、偶、それを差向ける對象が正鵠を得

てゐても、何にもならぬのである。

閩は衣服を改め、輿に乗つて、台州の官舎を出た。從者が數十人ある。時は冬の初で、霜が少し降つてゐる。椒江の支流で、始豐溪と云ふ川の左岸を迂回しつゝ、北へ進んで行く。初め曇つてゐた空がやう／＼晴れて、蒼白い日が岸の紅葉を照らしてゐる。路で出會ふ老幼は、皆輿を避けて跪く。輿の中では、閩がひゞく好い心持になつてゐる。牧民の職にゐて賢者を禮すると云ふのが手柄のやうに思はれて、閩に満足を與へるのである。

台州から天台縣までは六十里ある。日本の十里程である。ゆるゆる輿を昇かせて來たので、縣から役人の迎に出たのに逢つた時、もう午を過ぎてゐた。知縣の官舎で休んで、馳走になりつゝ、聽いて見ると、こゝから國清寺までは、爪尖上りの道が又六十里ある。往き着くまでには夜に入りさうである。そこで閩は知縣の官

舎に泊ることにした。

翌朝、知縣に送られて出た。今日も昨日に變らぬ天氣である。一體天台一萬八千丈とは、いつ誰が測量したにしても、所詮高過ぎるやうだが、兎に角虎の居る山である。道はなか／＼。昨日のやうには抄取らない。途中で午飯を食つて、日が西に傾き掛つた頃、清寺の寺門に着いた。智者大師の滅後に、隋の煬帝が立てたと云ふ寺である。

寺でも主簿の御參詣だと云ふので、おろそかにはしない。道翹と云ふ僧が出迎へて、閭を客間に案内した。さて茶菓の饗應が濟むと、閭が問うた。當寺に豐干と云ふ僧が居られましたか。

道翹が答へた。豐干と仰しやいますか。それは先頃まで本堂の背後の僧院に居られましたが、行脚に出られたきり歸られませぬ。

智者大師
名は智顛、支
那陳代の高
僧。天台宗の
開祖。

「當寺ではどう云ふ事をして居られましたか。」

「さやうでございます。僧どもの食べる米を舂いて居られました。」

「はあ、そして何か外の僧達と變つたことはなかつたのですか。」
「いえ、それがございましたので、初め只骨惜みをしない、親切な同宿だと存じてゐました。豐干さんを、わたくしどもが大切にいたすやうになりました。すると或日、ふいと出て行つてしまはれました。」

「それはどう云ふ事があつたのですか。」

「全く不思議な事でございます。或日山から虎に騎つて歸つて参られたのでございます。そしてそのまゝ廊下へ這入つて、虎の背で詩を吟じて歩かれました。一體詩を吟ずることの好きな人で、裏の僧院でも、夜になると詩を吟ぜられました。」

「はあ、活きた阿羅漢ですな。その僧院の址はどうなつてゐますか。」

「只今も空家になつて居りますが、折々夜になると、虎が參つて吼えて居ります。」

「そんなら御苦勞ながら、そこへ御案内を願ひませう。」かう云つて、閻は座を起つた。

道翹は蛛の網を拂ひつゝ、先に立つて、閻を豊干のゐた空家につれて行つた。日がもう暮れかゝつたので、薄暗い屋内を見廻すに、がらんとして何一つ無い。道翹は身を屈めて、石疊の上の虎の足跡を指さした。偶、山風が窓の外を吹いて通つて、堆い庭の落葉を捲上げた。其の音が寂寞を破つてざわ／＼と鳴ると、閻は髪の毛の根を締めつけられるやうに感じて、全身の肌に粟を生じた。閻は忙しげに空家を出た。そして跡から附いて來る道翹に言

つた。拾得と云ふ僧はまだ當寺に居られますか。」

道翹は不審らしく閻の顔を見た。よく御存じでございます。先刻あちらの厨で、寒山と申すものと火に當つて居りましたから、御用がおありなさるなら、呼寄せませうか。」

「は、あ。寒山も來て居られますか。それは願つても無い事です。どうぞ御苦勞序に、厨に御案内を願ひませう。」

「承知いたしました。」と云つて、道翹は本堂に附いて西へ歩いて行く。

閻が背後から問うた。拾得さんはいつ頃から當寺に居られますか。」

「もう餘程久しい事でございます。あれは豊干さんが松林の中から拾つて歸られた捨子でございます。」

「はあ。そして當時では何をして居られますか。」

賓頭盧
釋迦の弟子。
一。十六羅漢の隨

「拾はれて參つてから三年程立ちました時、食堂で上座の像に香を上げたり、燈明を上げたり、その外供物をさせたりいたしましたさうでございます。その中、或日上座の像に食事を供へて置いて自分が向合つて一緒に食べてゐるのを見付けられましたさうでございます。賓頭盧尊者の像がどれだけ尊いものか存ぜず、致したと見え、唯今では厨で僧どもの食器を洗はせて居ります。」

「はあ」と言つて、閻は二足三足歩いてから問うた、「それから唯今寒山と仰しやつたが、それはどういふ方ですか。」

「寒山でございますか。これは當寺から西の方の寒巖と申す石窟に住んで居りますものでございます。拾得が食器を洗ひます時、残つてゐる飯や菜を竹の筒に入れて取つて置きますと、寒山はそれを貰ひに參るのでございます。」

「なるほど」と云つて、閻は附いて行く。心の中では、そんな事をしてゐる寒山、拾得が文珠、普賢なら、虎に騎つた豐干は何だらうなどと、田舎者が芝居を見て、どの役がどの俳優かと思ひ惑ふ時のやうな氣分になつてゐるのである。

「甚だむさくるしい所で」と云ひつゝ、道翹は閻を厨の中に連込んだ。

こゝは湯氣が一はい籠つてゐて、遽かに這入つて見ると、しかと物を見定めることも出来ぬ位である。その灰色の中に大きい竈が三つあつて、どれにも残つた薪が眞赤に燃えてゐる。暫く立止つて見てゐる中に、石の壁に沿うて造り附けてある卓の上で、大勢の僧が飯や菜や汁を鍋釜から移してゐるのが見えて來た。

この時道翹が奥の方へ向いて、「おい拾得」と呼掛けた。閻がその視線を辿つて、入口から一番遠い竈の前を見ると、そ

ここに二人の僧の蹲つて火に當つてゐるのが見えた。

一人は髪の二三寸伸びた頭を剃出して、足には草履を穿いて居る。今一人は木の皮で編んだ帽を被つて、足には木履を穿いて居る。どちらも痩せて、身すばらしい小男で、豊干のやうな大男ではない。

道翹が呼掛けた時、頭を剃出した方は振向いてにやりと笑つたが、返事はしなかつた。これが拾得だと見える。帽を被つた方は身動きもしない。これが寒山なのであらう。

閻は、かう見當を附けて二人の傍へ進み寄つた。そして袖を搔合はせて恭しく禮をして、朝議大夫、使持節、台州の主簿、上柱國、賜緋魚袋、閻丘胤と申すものでございます。と名告つた。

二人は同時に閻を一目見た。それから二人で顔を見合はせて、腹の底からこみ上げて来るやうな笑聲を出したかと思ふと、一

緒に立上つて、厨を駈出して逃げた。逃げしなに寒山が、豊干がしやべつたな。と云つたのが聞えた。

驚いて跡を見送つてゐる閻が周圍には、飯や菜や汁を盛つて居た僧等が、ぞろ／＼と來てたかつた。道翹は眞蒼な顔をして立竦んでゐた。(鶴外全集)

○

一人は寒山、一人は拾得と、めい／＼に名を云うて出づる狂言あり。然るを二人連立ちたる先の者、是は寒山拾得と申す者にて候と名のりしかば、次の者はん事なかりしに、我らもそのつれにて候。(醒睡笑)

山本有三
早稻田大學講
師。東京帝國
大學文科大學
出身。

三九 生命の冠 (第二幕)

山本 有三

場所——樺太西海岸マウカ
時代——現代

有村罐詰製造所の内部、家の構造は大體露西亞作りで、丸太を組合はせて作つてある。正面奥、右手に疊敷の日本間がある。所謂店座敷で、障子を隔てて奥に通するやうになつてゐる。他は總べて板敷の土間。正面奥、中央に出入りの硝子扉がある。その奥に二重になつて入口の扉がある。なほ正面に硝子窓が一つ。それから扉の上の空間には四五尺もある大蟹の甲良が額のやうに掛けてある。家の左右に出入口が一つ宛ある。左側の口は、その扉の眞上に打附けてある。罐詰製造場といふ木札で、何處に聯絡してゐるか直ぐに知られる。また右側は日本式の引戸になつてゐて、勝手の方に通じてゐる。土間の稍左手に鐵製の煖爐が置いてある。その周圍に椅子が二三個。

三月の中頃、昨日來の雪が上つて、外は日光がきら／＼と輝いてゐる。有村、表から悄然と這入つて來る。そして煖爐の傍に腰を下す。
欽次郎、製造場から出て來る。

欽次郎「あ、兄さん、いつ歸つて來たんです。」

有村「今歸つて來たのだ。」

欽次郎「どうでした。アラカイの方は。」

有村「矢張法外のことを云つてゐて、とても手が出せない。」

欽次郎「人の足許を付け込むなんて、どいつもこいつも厭な奴ばかりだな。厭な奴といへば、さつき久富商會の片柳が來ましたよ。」

有村「それからどうした。」

欽次郎「人を思ひ切り壓迫しておきながら、しらばつくれたことをいつて來ましたから、面と向つて、うんといつてやりました。」

有村 さうか。火蓋を切つたか。

欽次郎 え、やつつけました。とても黙つちやゐられませんから。

罐詰工 製造場から出て来る。

罐詰工 旦那、雌や仔蟹はどうしませう。

有村 あれは使つちやならないといつてあるぢやないか。

罐詰工 ですけども、あれを使はなくつちや、逆も間に合ひません。

有村 間に合はなくつても、あんな蟹は一切使つちやならないと

いふのに。

罐詰工 ぢや、どうしませう。蒸釜は煮立つてゐるんですが。

欽次郎 まあいゝ。こちらから言つてやるから。

罐詰工 へえ。(製造場へ去る。)

欽次郎 兄さん、あなたのやうに嚴重なことをいつてゐたら、逆も品

は間に合ひませんよ。

有村 併しこれから繁殖する雌や仔蟹を使ふことは出来ないぢや

やないか。

欽次郎 さういひますがね、兄さん。あれを濫獲しない限りいゝぢやありませんか。一度網にかゝつて来た以上、假令船から直ぐに捨ててやつたつても、もう網にからまつた奴は足を痛められてゐますから、少くとも半死にか、大抵は死んでしまふのです。どうせ海に放してやつて死んでしまふのなら、雌だつて仔蟹だつて使つてもいゝぢやありませんか。

有村 それ許りぢやない。雌や仔蟹はアルカリ性が強いから黒變する患がある。

欽次郎 なあに、それも製造法を少し氣をつけて、硫酸紙を丁寧に敷きさへすれば防げますよ。

有村 いや、第一品質が劣るからいけない。あんなものは一等品に

は使へないぢやないか。

欽次郎「その點も罐詰のことですから、何とか誤魔化しがきくぢやありませんか。」

郵便配達夫「郵便つ。」と手紙をおいて行く。

欽次郎「それを受取つて讀む。」やあ、また値上げだ。

有村「どこから來たのだ。」

欽次郎「東洋製罐です。罐がまた三割上げだといふのです。」

有村「弱つたな。」

欽次郎「蟹は高い、罐は上がる、かう何もかも高くつちや、逆もやり切れやしない。兄さん、もう非常手段を講ずるより外ありませんよ。」

有村「非常手段とは、品を落してどこまでもうちの持船で間に合はせようといふのか。」

欽次郎「さうです。さうでなかつたら逆もやつて行けやうがないぢやありませんか。昨夜も遅くまで二人で計算を立つて見た

でせう。他から蟹を買つてやつた日には何萬つて損するんですからね。その上、罐が三割も値上げになつたとすりや、いくら損するか分りませんよ。」

有村「併し一等品といふ契約に等外品は送れないからね。」

欽次郎「そんなことをいつたつて今の場合爲方がないぢやないですか。」

醫師「匹田、女中に送られて奥から出て來る。」

匹田「いや、もう構はんでくれ。構はんで。」

兄弟は醫師の言葉を聞きつけて、話をびたりと止める。

有村「あ、先生がおいになつてゐたのですか。少しも知りませんで。」

四田 いや、お構ひ下すつては困る。時に奥さんは、今日は少し熱が低いやうだ。あの分なら心配のことはありません。

有村 いろく、有り難うございます。

欽次郎 今日、先生は朝の御回診ですか。

四田 いや、昨夜、そら汽船が沈没したらう。あの乗組員に病人が出たといつて呼びに來られたものだから、今その歸り道さ。丁度、お門を通つたからお寄りしました。

有村 あ、さうですか。それはどうも御深切に。

欽次郎 汽船といへば氣の毒なことをしましたね。でも運送船とかで、お客が乗つてゐなかつたのはせめてもの幸でした。

有村 乗組員はみんな助つたんですか。

四田 みんな助つた。たゞ船長が可哀さうなことをしましたよ。有村、どうしたのです。

四田 船と一緒に沈んでしまつたのだ。

欽次郎 あ、船長は亡くなつたのですか。私はみんな助つたと聞いてをりましたが。

四田 さうです。乗組の船員すらさう思つてゐたのです。ところが後になつて船長のゐないことが分つたのだ。

有村 どうしたのでせう。

四田 今私はその話を聽いて涙をこぼしてしまひました。かうなのです。沈没した北海丸は、小樽から荷を積んで浦鹽に行く船だつたのです。ところが途中で嵐に遇つたものだから、それを避けようと思つてこのマウカにやつて來たのです。それでテーヤの沖まで來ると、あすこいらはあの通り暗礁の多いところだ。そこを吹雪は烈しいし、船は小さいと來てゐるから、船員は必死となつて働いたけれども、とうく暗礁

に乗上げてしまつたのです。であつといふ間もなく水はどしどし船に浸入して來たので、船長はもう仕方がないから、『全員甲板へ。』ボート降し方。』を命じたのです。そして全員ボートに乗移つたところが、船長だけはまだ船に残つてゐるのです。

欽次郎「あゝ、それでとうとう船と運命を共にしてしまつたのですか。

四田「いや、さうぢやない。話はこれからなのです。それで船長がまだ甲板に残つてゐるから、ボートに乗つた者は、早く降りて來るやうに勧めたのです。すると船長は、『おい、ちよつと待つてくれ、忘れ物をした。』といつて、飛ぶやうにデッキを下へ駆け下りて行つたのです。

欽次郎「ほう。

四田「何しろ、浪は逆巻くし、夜は暗いし、ボートに乗込んだ連中は、氣が氣ぢやなかつた。併し船長は間もなく甲板に歸つて來ました。そして『いゝか、下りるぞ。』と大聲でどなつて、闇の中をずる／＼と降りて來たのです。そこでボートは直ぐに本船を離れて、死にも狂ひに突進したのです。やつと陸に着いて見ると、船長はゐないのです。

有村「どうしたのです。

四田「あとからボートに降りたのは船長ぢやなかつたのです。

欽次郎「ぢや誰なのです。

四田「料理の皿洗をやつてゐたボーイなのです。どうして此の男が一人乗後れたかといふと、此の男は二三日前に船の中で人の物を盗んだのださうだ。それで此の男は物置のやうな一室に監禁されてゐたのです。ところが今船が暗礁に乗揚

げて沈没するといふ時には、誰だつてわれ勝ちに逃げようとするから、一人として此のボーイのことなどを考へてゐたものはありやしない。船長自身さへも危く忘れるところだつたのだ。ふと下から早くボートにお乗んなさいといはれた時に、始めて監禁したボーイのことを思ひ出したのです。そこで『忘れ物があるから鳥渡待つてくれ。』といつて、急いでボーイを救ひ出して來たのです。

有村、そして自分は船に残つて、船と共に沈んでしまつたのですか。

匹田、さうです。

有村、實に立派な人格者ですね。

匹田、船長なんてものは船頭の親方みたいな者だが、偉い奴がゐたもんです。

欽次郎、北海丸に限らず、沈没なんて時は、いつも船長は立派な行爲をやりますね。

有村、私たちから見ると、人のやれないことをやつた様に思へますが、船長自身にとつては、あれが自分のやる當り前のことだつたのでせう。

匹田、いや、その當り前のことがなか／＼やれないのだ。偉い人といふのは大きな爲事をつた人ではない。爲すべきことを敢然として爲した人だ。

有村、さうもいへますね。

匹田、時計を出して見て、これは長話をしました。私は外へ廻らなくつちやならない。

欽次郎、お歸りでございますか。

匹田、御病人をお大事に。

有村「有り難うございます。」

匹田中央の戸口から表へ出る。

欽次郎「兄のところへ進み寄る。」兄さん、やつつけませう。

有村「やつつけるとは。」

欽次郎「仔蟹を混入することです。」

電報配達夫、大きな聲で「電報」と叫んで一通の電報をおいて行く。二人その聲にちよつと驚く。有村電報を開いて見る。顔に不安の色が動く。

欽次郎「どこから来たのです。」

有村「英國だ。」電報を弟に渡す。

欽次郎「電報を見て。」急ぐから期日を違へないやうにつてんですね。有村「さうだ。」

欽次郎「兄さん。いよ／＼やつつけるより外ないぢやありませんか。有村「無言首を垂れてゐる。」

欽次郎「二十四萬罐を八十日でやつてしまふには、どうしたつて、日に三千宛製罐しなくつちやなりませんからね。兄さんのやうに、これを使つちやいけないの、あれを入れちやいけないのといつてゐたら、とてもその半分も出来やしませんよ。」

有村「無言。」

欽次郎「少し品が落ちたつて、期日さへ違へなかつたら、いゝぢやありませんか。兄さん、もう考へてゐる時ぢやありませんよ。どん／＼運ばなくつちや。」

有村「敢然と立上り。」よし、やらう。

欽次郎「さうですか。それでわたしも安心した。」

有村「おい、欽次郎、店の者を直ぐにアラカイにやつてくれ。」

欽次郎「何ですつて。」

有村「もう爲方がない。いくら高くつてもアラカイの蟹を買ふよ。」

り外はないぢやないか。約束した船の方はとても引取れる望がないんだから。

欽次郎、兄さん、それは正氣の沙汰ですか。

有村、何だつてそんなことをいふんだ。

欽次郎、そんなことをしたら、此の家はどうなるんです。少し位の損なら忍べますが、兄さんのいふやうなことをしたら、此の家は立つてはいきませんよ。

有村、わたしは契約に背いて悪い品を送ることは出来ないのだ。

欽次郎、併し家を破産させても關はないんですか。

有村、おい、欽次郎、潔く討死しようぢやないか。今度のやうにかう四圍の事情が悪くつちや、どうにもしやうがない。併しこれつきりぢやない。まだ秋の漁期もある。來年もある。翌來年もある。それ迄にはきつと恢復がつけられるから。

欽次郎、さう旨くいくもんですか。殊に兄さんのやうなやり口ぢや、

有村、私はお前によくいつてゐたぢやないか。ほんたうの商業は、眞の説教眞の戦闘と同じやうに、場合によつては、自ら進んで死をも損失をも辭せないものでなくてはならないつて。さうだ、昨夜沈没した北海丸がいゝ例だ。おまへが若しあの船の船長だつたら、お前はあの際どういふ處置をとる。

欽次郎、無論あの船長と同じやうにやります。

有村、此の有村の店は、丁度今沈没しかけてゐる汽船ではないか。そして私とお前とはその船長だ。

欽次郎、沈没する時は、私は無論あの船長に劣らないつもりです。併しそれは最後の最後の瞬間のことです。今船はまだ沈没はしはしません。沈没しない前に死を急ぐのは、無智な自殺者が死場所を探してゐると同じです。

有村 お前は暗礁に乗揚げてゐても、まだ危険に気がつかないか。
欽次郎 船を沈めることは船長の務ではありません。船を浮かび揚
らせることが、船を進行させることが船長の第一の務です。
有村 水が甲板を浸してもお前はまだそんなことをいつてゐる
のか。おまへは船長としての明察がない、船長としての資格
がない。

欽次郎 或はさうかもしれませんが、併し沈める事はいつでも出来ま
す。私は是非浮かび揚らせたいのです。船も助り、船員も助り、
そして私も助りたいのです。

有村 それは誰だつてさう思はないものはない。併し船が沈みか
けてゐる時、そんな蟲のいゝことをいつてゐたら、自分ばか
りか、凡てのものを失はなければならぬ。それこそ救ふべ
からざることが出来る。

欽次郎 いゝえ、確に助ります。たゞそれには兄さんの頭さへ變つて
くれゝばいゝんです。

奥で赤ん坊の泣聲がする。

欽次郎 あゝ、あの聲が聞えませんか。兄さん、あなたは子供を飢ゑさ
しても關はないんですか。

有村 (無言、首を垂れる。)

欽次郎 嫂さんは長いこと寝てゐる。それなのに、その病人の寝てゐ
る家をなくしてしまつても、あなたはいゝといふんですか。
有村 いや、家内のことは……。

欽次郎 まあお聞きなさい。嫂さん許りぢやありません。妹にしたつ
てさうです。妹は上の學校に行きたいのですけれど、事情が
事情だから、女學校だけで止めにして、家の手傳をしてゐる
ぢやありませんか。そして若い娘にも似合はず、襷掛けでせ

つせと働いてゐるのは何の爲です。家を大事だと思つてゐるからぢやありませんか。また私だつてさうです。兄さんの前だが、私はうちの雇人より先に起きて、夜も遅くまで働いてゐます。嫁をと言つてくれる人もありますが、もう少し、もう一辛抱、もうちつと家が樂になつてからと思ふものからです。未だに貫はないでゐるんです。誰にしたつて家を思はないものはありません。そして働いたお蔭には、漸く運が向きかけて來たんです。その今一息といふところへ來て、兄さんのやうなことをいひ出されては、私は働き甲斐がなくなつてしまひます。

有村「そりや、お前たちには本當に濟まない。

飲次郎「誰にしたつて、あゝ金が溜つて行く、今月はいくら残つた、來月はいくら儲かる、とさう思へばこそ働く氣にもなれるん

です。損する爲なら、私は働くことはもう御免です。

有村「お前のいふことにも無理はない。併し商人の務は儲けるばかりが能ではない。そこをよく解つてくれなくつちや困る。

飲次郎「それで家族はどうするんです。

有村「たとへ子供が飢ゑてゐるとしても、不正な金で私は乳を呑ませたくない。契約を誤魔化した金で家族のものを養ひたくない。正しいことをして貧乏をするなら爲方がないぢやないか。これは家族のものも屹度我慢してくれるに違ない。飲次郎「稍興奮して、あなたは縁の遠い外國人の信用を落さない爲に、近い身内のものを滅すのですか。家のものには飯を食はせなくても、他人には見えを張らうといふのですか。

有村「これも興奮して、見えなぞぢやない。また遠いとか近いかの問題ではない。たゞしなければならぬことをするだけ

のことだ。

欽次郎「破産はしなければならぬことではありません。しないやうにするのが正當です。」

有村「愈、激して」極つたことだ。而もそれをせねばならぬ破目に陥つてゐるではないか。さうするのが正しいことなら爲方がないぢやないか。

欽次郎「烈しく」破産しなくつて濟むものを、わざ／＼破産するなんて、それが何で正しいのだ。肉親のものを痛めるのが何で正當だ。

有村「お前はまだそんなことをいつてゐるのか。」

欽次郎「兄さんこそ考へて下さい。」

有村「考へ直さなけりやならないのはお前の方だ。」

欽次郎「侮蔑的に」馬鹿正直にも程があらあ。

有村「聞きとがめて」なに。

欽次郎「何が何です。」

有村「貴様こそ何だ。」

二人殺氣立つて掴み合ひを始めようとする。

これより先絢子は打萎れて歸つて來たが、兄弟が論争してゐるのを見て室のなかにはひらず、入口の硝子扉の前に暫く立つてゐたけれども、この時急に扉を排して家に入り、兄弟の間にはひる。

絢子「まあ兄さん待つて下さい。待つて下さい。」

さういひながら、絢子、欽次郎を側に連れて行く。

絢子「しんみりと」兄さん、あたし行きますわ。

欽次郎「行くとは。」

絢子「あたしあの辨藏さんのところへ行きますわ。」

欽次郎「なに、何だつて。」

絢子、私が行きさへすれば、今のやうに兄さん同志で争ふやうなこともなくなり、家もこのまゝ續いて行きますわ。ですからあたし行きますわ。兄さん、どうか辨藏さんにさういつて下さい。(すゝり泣く)

有村、一體それは何の話だ。

欽次郎、まだ兄さんにはお話しませんでした。が、實は昨日あの綱元の風間辨藏がやつて来て、蟹を安く供給しようといつて来たのです。そして絢子の縁談も進めたいといふのです。

有村、なに、何だつて。

欽次郎、先刻も亦やつて来て、頻りにそれをいつて行つたのです。絢子はそれを聽いてゐたんです。

有村、絢子、お前は、どうしてあんな者の處へ行く氣になつたのだ。
絢子(泣き乍ら)、「どうしてつて、あたし……あたしは何もいひませ

まい。兄さんも何もいはないで、どうかあの辨藏さんのところへやつて下さい。

欽次郎、お前、自暴自棄なんか起しちやいけないよ。

絢子、いゝえ、あたし、これ、捨てばちでいつてゐるんぢやありませんわ。どうせお嫁に行くんなら家のお役に立ちたいと思ふからです。よう兄さん、どうかさうして下さいな。あたしお願いひいたしますわ。

欽次郎、そりや、お前が行つてくれ、ば家ぢやどんなに助るか、しれないけれど。

絢子、そんなら私喜んで行きますわ。

欽次郎(妹の手をとり)、絢子。(どいつたが、もうあとの言葉が出ない)

絢子、兄さん。(と欽次郎の胸に泣伏してしまふ)

欽次郎、お前、辛抱してくれる氣か。

麴子(泣き乍ら)「え、

有村(奮然と)「そんなことはわしには許せない。

麴子「だつて、それぢやうちが困るぢやありませんか。

有村「假令どのやうに困るとしても、そんなことは断じて出来ない。沈没の際に北海丸の船長は、盗を働いたボーイをさへ救ひ出してゐるぢやないか。それを如何に危急の場合だからといつて、肉親の妹を苦しめて家を助らうなぞとは思ひもよらないことだ。

罐詰工、製造場から出て来る。

罐詰工「どうしたんでせう、旦那。蒸釜が煮立つてゐるんですが。

有村「よろしい。今大蟹を取寄せるから、そんなことは心配しないでいゝ。

罐詰工「外から蟹が来るんですか。

有村「さうだ。おい、そちらに店の者がゐないか。直ぐにこゝに来るやうにいつてくれ。

罐詰工「へえ、畏りました。(去る。)

飲次郎「ぢや兄さん、どうしてもやるんですか。

有村「外に手段がないぢやないか。

飲次郎「兄さん、どうかもう一度考へ直して下さい。

有村「もう考へ盡くしたことだ。これ以上考へる餘地はない。

飲次郎(捨てばちに)「こんなことになるんなら、賠償金を拂ふ方が餘つ程増しな位だ。

有村「商人の本務は契約を守ることだ。品物を支給することだ。ただそれだけだ。損害金を出すことぢやない。

店の者入り来る。

店の者「何か御用ですか。

有村「うん。おい十吉。お前直ぐアラカイへ行つてないひ値通りで
いゝから直ぐに蟹を届けてくれつて、さういふんだ。」

雇人「二」畏りました。

有村「急いで行つて来い。」

雇人「二」へえ。(直に表へ駈出す。)

有村「それから倉次郎と富三は、二三日來製造した品の悪い罐詰
を選びわける。」

二人「へえ。あの別にしちまふんですか。」

有村「さうだ。よく氣をつけてな。それに製造場の者にも立會つて

貰ふがいゝ。」

二人「畏りました。(製造場にはひつて行く。)

有村「それから定吉、お前は犬櫓の用意をして。」

雇人「四」へえ。(直ぐに去る。)

絢子は兄が雇人達に次から次へと用事を言ひつけてゐるのを聞いてゐると、何故か急に泣きたい氣に襲はれて、わつと泣伏してしまふ。兄弟も亦お互に避けるもののやうに言葉を發しない。そこへ表から得平老爺がしをくはひつて来て、無言のまゝ勝手口へ通り抜ける。表では雪の上を走る喜ばしさに犬が跳り上るので、その度に櫓の鈴がちやりんくと鳴る。やがて雇人の定吉がはひつて来る。

雇人「四」旦那、櫓の用意が出来ました。

有村「さうか。おい欽次郎、お前銀行へ行つて預金を引出して来て
くれないか。さうして……。」

欽次郎「今日は御免を蒙りませう。私は今は働く氣がありませんか
ら。」

有村「さうか。ぢや私が行つて来よう。(金庫から銀行の預金帳を出す。
絢子に)おい、何だつてそんなところに泣いてゐるんだ。見つ

ともないぢやないか。よさないか。

絢子はい。(とはいふが、猶すゝり泣く。)

有村(欽次郎に)「ぢや行つて来るからな。ずつとアラカイから外の方へも廻るつもりだから、少し遅くなるかもしれない。おい、

欽次郎、氣を直してくれなくちや困るよえ。

さういひながら有村は表へ出て、櫓に乗つて出掛けて行く。犬櫓の勇ましい鈴の響が暫くの間聞える。

欽次郎は黙然として煖爐の傍に腰を掛けてゐる。

そこへお鶴が勝手口から出て来る。

お鶴「鈴の音がすら。旦那また出掛けたんかな。

欽次郎(お鶴を見て)「おいお鶴、酒を持つて来てくれ。

お鶴「お酒かい。

欽次郎「冷でいゝんだ。

お鶴「あい。

お鶴臺所に行つて酒をコップに入れて持つて来る。

欽次郎はそれを飲みほすと、コップをお鶴に渡す。

お鶴「もう一杯かい。

欽次郎「さうだな。もう止めにしておかう。おいお鶴。

お鶴「何だい。

欽次郎「そのコップを土間に叩きつけてくれ。

お鶴「ぼつこはれるぢやねえか。

欽次郎「かまはないからやつて見る。

お鶴「かうかい。

とコップを土間に投げつける。玻璃器は粉微塵に壊れる。

絢子はたまらなくなつてわあつと泣出す。

欽次郎も腕を眼にあてたまゝ啜り泣く。

——幕——

(生命の冠)

四〇 知と愛

西田幾多郎

知と愛とは、普通には全然相異なつた精神作用であると考へられて居る。併し、余は此の二つの精神作用は決して別種のものではなく、本來同一の精神作用であると考へる。然らば如何なる精神作用であるか。一言にていへば主客合一の作用である。我が物に一致する作用である。何故に知は主客合一であるか。我々が物の真相を知るといふのは、自己の妄想臆断、即ち所謂主觀的のものを消磨し盡くして、物の真相に一致した時、即ち純客觀に一致した時、始めて之を能くするのである。例へば明月の薄黒い處のあるのは、兎が餅を搗いて居るのであるとか、地震は地下の大鯨が動くのであるとかいふのは主觀的妄想である。然るに、我々は天文、地質の學に於て全然かゝる主觀的妄想を捨て、純客觀的

なる自然法則に従うて考究し、爰に始めて此等の現象の真相に到達することが出来るのである。我々は客觀的になればなるだけ、益、能く物の真相を知ることが出来る。數千年來の學問進歩の歴史は、我々人間が主觀を棄てて客觀に従ひ來つた道筋を示したものである。次に何故に愛は主客合一であるか。我々が物を愛するといふのは、自己を捨てて他に一致するの謂である。自他合一、其の間一點の間隙なくして始めて眞の愛情が起るのである。我々が花を愛するのは、自分が花と一致するのである。月を愛するのは、月と一致するのである。親が子となり、子が親となり、此處に始めて親子の愛情が起るのである。親が子となるが故に、子の一利一害は己の利害のやうに感ぜられ、子が親となるが故に、親の一喜一憂は己の一喜一憂の如くに感ぜられるのである。我々が自己の私を棄てて、純客觀的即ち無私となればなる程愛は大

きくなり深くなる。親子、夫妻の愛より、朋友の愛に進み、朋友の愛より、人類の愛に進む。佛陀の愛は禽獸、草木にまでも及んだのである。

此の如く、知と愛とは同一の精神作用である。物を知るには之を愛せねばならず、物を愛するには之を知らねばならぬ。數學者は自己を棄てて數理を愛し、數理その者と一致するが故に、能く數理を明かにすることが出来るのである。美術家は能く自然を愛し、自然に一致し、自己を自然の中に没することによつて、始めて自然の眞を看破し得るのである。又、我は我が友を知るが故に之を愛するのである。境遇を同じうし、相理解する事が愈、深ければ深い程、同情は益濃かになる譯である。併し、愛は知の結果、知は愛の結果といふやうに、此の兩作用を分けて考へては、未だ知と愛との眞相を得たものではない。知は愛、愛は知である。例へば我

我が自己の好む所に熱中する時は、殆ど無意識である。自己を忘れて、唯自己以上の不可思議力が獨り堂々として働いて居る。此の時が主もなく、客もなく、眞の主客合一である。此の時が知即愛、愛即知である。數理の妙に心を奪はれ、寢食を忘れて之に耽る時、我は數理を知ると共に之を愛しつゝあるのである。又、我々が他人の喜憂に對して、全く自他の區別がなく、他人の感ずる所を直ちに自己に感じ、共に笑ひ共に泣く、此の時我は他人を愛し、又之を知りつゝあるのである。愛は他人の感情を直覺するのである。池に陥らんとする幼兒を救ふに當つては、可愛いといふ考すら起る餘裕もない。

普通には、愛は感情であつて、純粹なる知識と區別されねばならぬといふ。併し、事實上の精神現象には、純知識といふものもなければ、純感情といふものもない。此の如き區別は、心理學者が學

問上の便宜のために作つた抽象的概念に過ぎない。學理の研究が一種の感情によつて維持されねばならぬやうに、他を愛するには一種の直覺が基とならねばならぬ。余の考を以て見れば、普通の知とは非人格的對象の知識である。之に反して、愛とは人格的對象の知識である。たとひ對象が非人格的であつても、之を人格的として見た時の知識である。兩者の差は精神作用その者にあるのではなく、寧ろ對象の種類によるといつてよろしい。而して古來幾多の學者、哲人の云つたやうに、宇宙實在の本體は人格的のものであるとする、愛は實在の本體を捕捉する力である。物に對する最も深き知識である。分折推論の知識は物に對する表面的知識であつて、實在その者を捕捉することは出來ぬ。我々は唯愛によつてのみ之に達することが出来る。愛は知の極點である。

父よ云々
新約全書馬太
傳の語。
念佛は云々
歎異鈔第二章
の語。

以上、少しく知と愛との關係を述べた。今之を宗教上の事に當てはめて考へて見よう。主觀は自力である。客觀は他力である。我が物を知り、物を愛するといふのは、自力を棄てて他力の信心に入る謂である。人間一生の仕事が知と愛との外に無いものとするれば、我々は日々、他力信心の上に働いて居るのである。學問も道德も皆佛陀の光明であり、宗教といふものは此の作用の極致である。學問や道德は、個々の差別的現象の上に、此の他力の光明に浴するのであるが、宗教は宇宙全體の上に於て絶対無限の佛陀その者に接するのである。父よ、若し聖旨に協はば、この杯を我より離し給へ。されど我が意のまゝをなすにあらず、唯聖旨のまゝになし給へ。とか、念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやばべるらん。また地獄におつべき業にてやばべるらん。總じてもて存知せざるなり。とかいふ語が宗教の極意である。而してこの絶

ヴェーダ教
婆羅門教
Vada
ないふ。

對無限の佛若しくは神を知るの、唯之を愛するによりて能くするのである。之を愛するが即ち之を知るのである。印度のヴェーダ教や、佛教の聖道門は之を知るといひ、基督教や、淨土宗は之を愛すといひ、又は之に依るといふ。

各自其の特色はないではないが、其の本質に於て同一である。神は分析や推論によつて知り得べき者ではない。實在の本質が人格的のものであるとすれば、神は最大人格的のものである。我が神を知るの、唯愛又は信の直覺によつて知り得るのである。故に我は神を知らず、我唯神を愛す、又は信ずといふ者は、最も能く神を知つて居る者である。(善の研究)

國文新編卷四終

彙語

この表は本書中の語句を抽出して、正確なる發音・特殊の訓方・迅速に文字を書く練習・文法學習・批評練習等の指標として多様な學習法の基礎たらしめんことを目的とするものである。

一 讀書の意義

- 【陳腐】
- 【文化の進歩】
- 【體験を豫想する】
- 【思索】
- 【無條件の價值】
- 【適用】
- 【玩味】
- 【哲學】
- 【文藝】
- 【文獻】
- 【人心の機微】
- 【内面的體験】
- 【盲目的に信仰する】
- 【得心の行かぬ】
- 【壅塞】
- 【矛盾】

二 漱石山房の秋

- 【懷疑の淵】
- 【堅實】
- 【本能】
- 【半可通】
- 【彼等一流の判斷】
- 【破目】
- 【局限】
- 【攝取】
- 【第一義】
- 【自然科學】
- 【婆娑と】
- 【霜にめげない】
- 【風鐸】
- 【五羽鶴の氈】
- 【更紗】

三 保津川下り

- 【紫檀の机】
- 【法帖】
- 【古絨毯】
- 【玉の文鎮】
- 【急湍】
- 【碧油】
- 【土筆】
- 【撓る】
- 【山峽】
- 【萬顆の珠】
- 【當面】
- 【奔湍】
- 【矢も楯も物かは】
- 【一途に】
- 【急灘】
- 【根限り】
- 【金剛力】
- 【丁々】
- 【駛つて】
- 【肝膽相照らす】
- 【早蕨】
- 【六十の露消えがたに及びて】
- 【末葉のやどり】
- 【中頃のすみかになすらふれは】
- 【世の常ならず】
- 【方丈】
- 【處を思ひ定めざるが故に】
- 【占めて造らす】
- 【土居】
- 【打覆】
- 【用途】
- 【迹をかくして】
- 【日がくし】
- 【糞子】
- 【閻伽棚】
- 【落日を受けて眉間の光とす】
- 【帳の扉】
- 【皮籠三四合】
- 【抄物】
- 【折琴・つき琵琶】
- 【蕨のほども】
- 【つかなみ】
- 【文机】
- 【炭櫃】
- 【柴折りくぶるよすが】
- 【あばらなる姫垣】
- 【寛】

四 日野山の奥

【つま木】
【正木のかづら】
【観念のたより】
【藤浪】
【紫雲】
【かたらふごとくに死出の山路をちぎる】
【空蟬の世】
【罪障】
【念佛】
【讀經まめならざる時】
【口業】
【禁戒】
【境界】
【迹のしら波に身を寄するあしたには】
【満沙彌が風情をぬすみ】
【桂の風】
【潯陽の江をおもひ遣りて】
【源都督のながれをならふ】
【秋風の樂・流泉の曲】
【つれづれなる時】
【つばな】
【岩なし】
【ぬかご】
【ほぐみ】
【あゆみわづらひなく】

【志遠くいたる時は】
【迹をとぶらひ】
【かへるさ】
【をりにつけつゝ】
【櫻を狩り】
【かつは】
【家苞】
【古人をしのみ】
【かせぎ】
【埋火】
【折につけて盡くることなし】
【深く知れらむ人】
【あからさま】
【やむごとなき人】
【數ならぬたぐひ】
【盡くしてこれを知るべからず】
【炎上】

五 觀潮樓

【巷の物音】
【碩學】
【抽斗】
【癩癖】
【木屐】
【蒼然たる暮靄】
【金中の襦衣】
【贅澤】
【六 旅人芭蕉】
【燻し銀】
【納豆・干瓢】
【溫石】
【野分】
【山中不材】
【籟】
【即興】
【萱】
【行脚】
【時雨】
【境涯】
【憧憬】
【靜謐】

七 蒲生氏郷

【鑑識】
【徹底的】
【下知】
【取締めた所存】
【勘當】
【譜代侍】
【倔強】
【羊羹】
【融通利かずの偏屈者】
【扶持】
【武邊】
【知遇に感ず】
【自ら處すること】
【緩怠】
【たぎり切つた人】
【小身】
【訓諭も絲瓜も入つたものではない】
【咄嗟】
【斫入つた】
【物の數ともせず】
【他を律すること・自ら律すること】
【我執】
【かたむくろの人】
【詫言】
【勘氣】
【歸り新參】
【當惑】
【捻合つた】
【心外】
【上首尾】
【表裏者】

【莞爾】
【うい奴】
【乃公】
【肚】

八 最後の參内

【握きおとされて】
【小袖】
【勞りて】
【物の具】
【色代】
【むげに】
【催勢】
【在家】
【外様大名】
【厄弱】
【宸襟】
【我と手を碎き】
【いひがひなき謗】
【有待の身】
【雌雄を決す】
【今生】
【龍顔】
【傳奏】
【直衣】
【南殿】

九 丹波少將

【照臨】
【歎慮】
【累代の武功】
【神妙】
【進退度に當り變化機に應ず】
【手を下すべきにはあらず】
【股肱】
【過去帳】
【逆修】
【障子】
【筆のすさび】
【三尊來迎】
【九品往生】
【欣求淨土】
【かひなくしく】
【遠き御守】
【心に任せぬ髮身なれば】
【一日片時の命もあり難くこそ候ひしかども】
【さすが露の命は消えやらで】
【生を隔てたるならひ】
【苦の下】
【山莊】
【築地】

一〇 有王島下り

【おほひ】
【興せし人】
【欄門】
【部・遺戸】
【とこそおはせしか】
【この妻戸をばかうこそ出で入り給ひしか】
【自らこそ植ゑ給ひしか】
【楊梅】
【折知り顔】
【桃李不言春幾暮 煙霞無迹昔誰栖】
【さてしもあるべきことならねば】
【心なし】
【車の尻】
【旅人が一村雨の過行くに云云】
【一業所感の身】
【先世の芳縁】

【此の瀬にも洩れさせ給ひてやがて】
【唐船】
【夏衣たつ】
【船津】
【元結】
【件の島】
【事の數ならず】
【執行】
【いとよ】
【覺束なさに】
【晴嵐夢を破りては】
【沙頭に印を刻む鷗】
【沖の白洲にすだく濱千鳥】
【よるほひ出で來たり】
【繼目あらはれ皮ゆたひ】
【絹布のわきも見えず】
【荒海布】
【乞巧人】
【餓鬼道】
【消入り給ふ】
【やがてうきめをば見せむとはせさせ給ひ候ぞ】
【幻に立つ】
【夢も現も思ひわかず】
【露の命を懸けて】
【より竹を柱とし】

【雨風溜るべくも見えず】
【此等が文】
【官人】
【追捕】
【御宮仕】
【むづからせ給ふ】
【其の御事】
【此の御事】
【嫉御前】
【いひがひなき】
【おのれを供にて】
【麥秋】
【白月・黒月】
【先立ちけるござんなれ】
【やがて還らむするぞ】
【此の世一つに限らぬ契ぞか
し】
【生身】
【おのれに憂き目を見せむ】
【つれなかるべし】
【彌陀の名號】
【臨終正念】
【心の行く程】
【後世】
【菩提】
【茶匙】

一一 ちどろのした
【およすけて】
【うつくしとおほさる】
【御書始】
【女御】
【后だち】
【元服】
【四方の海波静かに吹く風も
枝を鳴らす】
【あまねき御うつくしびの浪】
【才ある人】
【敷島の道】
【人の口にある】
【いみじくやむごとなく】
【おりの給ふ】
【いとまだしかるべき】
【よろづ所せき御ありさま】
【なか〜】
【御幸】
【世を知しめす事は今もかは
らねば】
【えもいはずおもしろき院づ
くりして】
【世をひやかして】
【とりわきてこそは】

【渡殿】
【艶にかしうせさせ給へり】
【石のたゝすまひ】
【千世をこめたる霞の洞なり】
【前栽】
【下藤】
【おとど】
【歌のひじり】
【きびは】
【見えざる】
【自らみがきとへのへさせ給
ふ】
【とりもちて行はせ給ふ】
【千五百番の歌合せ】
【その道の聖たち判じけるに】
【このなみには立ち及び難し
なか〜】
【はやうはあて人なれど】
【つかさ淺くて】
【うちつゞき四位ばかりにて
失せにし人】
【そこひもなく】
【深き心ば〜】
【こたみ】
【世にゆりたる古き道のもの
ども】
【まだしかるべけれども】

【けしうはあらず】
【かまへてまろが面おこすば
かりよき歌】
【限なきすきの程】
【いづれもとり〜なる中に】
【目に見えぬ鬼神をも動かし
なましに】
【あたらしく】
【竟宴】
【ずん流るめりしかど】
【夏蝻く】
【よろづ世もつきすまじき御
世の榮】
【心のひき〜に】
【雙六】
【さうどきあへる】
【賭物どもとうでさせ給ふ】
【唐櫃】
【うへ人】
【かたはしほのあけて】
【あさましと思へる氣色しる
きを】
【御覽おこせて】
【朝臣こそむげに口惜しくは
ありけれ】
【殿上の賭号】
【いたきわざなれ】

【さは悪しく思ひけり】
【いたり深く】
【ひ水めして】
【水飯やうのもの】
【上達部・殿上人】
【大御酒】
【香魚】
【石伏やうのもの】
【調じて】
【仕りてむや】
【御隨身】
【高欄】
【けしかるわさかな】
【かづけさせ給ふ】
【御土器】
【その道にもいとはしたなう
ものし給ふ】

一二 名君
【征馬】
【遊子俯仰の影】
【絶域】
【平蕪】
【乾坤】
【朝圖】
【騎首】
【雷霆】
【玉觥】
【敬虔な心持】
【瀆して】
【一徹】
【不興】
【本能的に駭かれた】
【懲罰的に】
【いつかな】
【把握の手】
【青磁の水入】
【侮辱】
【お側衆】
【懐紙】
【心外】
【有りやうは】
一三 萬里の長城の
歌

【彫龍の欄】
【蘭麝】
【珠簾】
【漠】
【胡笳】
【旌旗】
【涵す】
【不死の金闕】
【絳霞】
【沆瀣】
【至尊の榮】
【玉籟】
【無家の劍】
【佞豎】
【成卒】
【楚人の一炬】
【複道】
【斬蛇の劍炎精の光】
一四 樹の根

一五 玉かつま
【かたみに】
【はふれ失せ】
【おきておく】
【浦山】
【わが説になづみそ】
【みながら】
【雅言】
【雅びたる】
【なべて】
【ひたぶるの賤・山がつ】
【心得たるなんめり】
【よこなまり】
【ことえりして】
【今様】
【たにくく】
一六 小品三章
【初夜】
【文机】
【深き心ば〜】
【かゝげつくしても】
【たゞさし向かひ語らふ心地
す】

【さうし】
【あだしこと】
【家なみしきたる】
【前裁もほどなけれど】
【おこせたり】
【いままゐり】
【かつふ】
【うけえたる所】
【心ばせ】

一七 青葉のながめ

【うらめづらしく】
【今めかしう】
【わびし】
【繁花】
【空もとゞろに鳴きわたる】
【あなかまとは思はず】
【もはらにす】
【なやみなければ】
【いぶかしみなくなづさはれぬ】
【年たかくなる】
【さいつ頃】
【おどろしく】
【曇らはしく】

【物のあやめ】
【たれこめて】
【をさく】
【うちはへて】
【八千草に植ゑあつめてなづさひし前裁】
【所得顔】
【昔おほゆる】
【追風】
【すだく】
【眼を放にして】

一八 四季の雨

【思ふ隈もなく】
【さやかなるに】
【いでや】
【師走の晦】
【軒の玉水】
【脚のい】
【枯生】
【梅が香の濕】
【花に憂しとかこちぬるも】
【郭公】
【村雨】
【庭潦】
【笑ひとよみつゝ】

【ふつゝかなる音】
【鳴腹したる】
【げに様々なり】
【打濕るものから】
【龍膽】
【つきんし】
【よみ見れば】

一九 徒然草八題

【神無月】
【苔の細道踏みわけて】
【関伽棚】
【さすがに住む人のあればなるべし】
【かくてもあられるよ】
【あはれに見るほどに】
【柑子の木】
【枝もたわゝになりたるが】
【ことさめて】
【この木なからましかば】
【雑人】
【埒】
【樗の木】
【ついゐて】
【取りつきながら】
【嘲りあさみて】

【しれもの】
【水をまかせられむとて】
【あし】
【大方めぐらざりければ】
【やすらかにゆひて】
【めでたかりけり】
【やむごとなき】
【かちより詣でけり】
【かばかりと心得て】
【かたへの人】
【ゆかしかりしかど】
【先達はあらまほしきことなり】
【童】
【なごり】
【足鼎】
【かなでて】
【大方ぬかれず】
【ことさめて】
【頭のまはりかけて】
【かたびら】
【ゐて行きける】
【對ひたりけむありさま】
【異様】
【くゞり声】
【枕上】
【菓のしべ】

【缺けうげながら】
【もろ矢を手挿みて】
【なほざりの心】
【得失なく】
【懈怠の心】
【一念】
【掟てて】
【軒だけばかりになりて】
【目くるめき】
【あやしき下腐】
【いたまし】
【檻にこめ鎖をさゝれ】
【わが身にあたりて忍び難くば】
【心あらむ人】

二〇 徒然草の著者

【咲きぬべきほどの梢】
【主義定見】
【有職故實】
【散漫】
【こだはらな】
【文字の法師】
【暗證の禪師】
【觀念に徹した人】
【味に徹した人】
【大徳の境地】
【浮世の絆】
【枯木寒巖の境地】
【消極的な厭世家】
【閑寂に著するも障なるべし】
【風雅人】
【眞俗二諦】
【善知識】
【心境】
【人生觀照の態度】
【繊細な官能】
【白眼にして世を睨むやうな人】

二一 茶道の精神

【禮の用】
【人相我相】

【これを攝するに敬を以てす】
【儀容】
【屈強】
【兵馬倥偬の間】
【一舉手一投足】
【綱領】
【念々刻々】
【準據】
【茶杓】
【道念】
【法悦歡喜】
【知足安分】
【版の音】
【水屋】
【手前】
【茶釜】
【谷川のせゝらぎ】
【旋律】
【心耳】
【禪定】
【沙彌】
【露地】

二二 實朝の歌

【難陀・跋難陀・婆加羅陀以下】
【眞摯】

【踏襲】
【訥々】
【淺薄】
【技巧歌】
【阿耨多羅三藐三菩提】
【冥加】
【雙絶】
【措辭】
【一氣に押した調】
【權化】
【概念】
【渾厚】

二三 城の崎にて

【拘泥】
【雨樋】
【動騷】
【致命的】
【勾配】

二四 光あれ

【瞪つて】
【究竟起原】
【萬有渾沌として】
【常闇】

- 【衝動】
- 【意馬は出渡し】
- 【心猿は制御し難し】
- 【大涙】
- 【天籟】
- 【跳梁】
- 【快刀亂麻を断つ】
- 【逢着】
- 【紛擾多端、罪障重疊の人生】
- 【直入の一路】
- 【無明の暗】
- 【煩惱の水】
- 【攝取の光明】
- 【感應道交】
- 【常住の光明】
- 【破綻百出の人生】
- 【五十年蟬蛻の此の世】
- 【大死一番】

二五 俚諺論

- 【螿】
- 【恰當の語】
- 【上乘なるもの】
- 【人口に膾炙す】
- 【尾韻・頭韻】
- 【律語・律呂】

- 【抽象の語】
- 【具體的】
- 【誇張の言】
- 【深邃】
- 【比照】
- 【津々】
- 【暗喩】
- 【常恆の事實】
- 【因果思想】
- 【氣概】
- 【諷刺】
- 【許きて】

二六 ロダン

- 【冥想・夢想】
- 【素描科】
- 【白兵戦】
- 【交誼】
- 【窺視】

二七 北畠親房

- 【柱石】
- 【政治的經綸】
- 【操縦】
- 【宮方】

- 【慷慨憂國】
- 【崎嶇艱難】
- 【銳意】
- 【樞機に参し】
- 【慟哭】
- 【大義名分】
- 【名器を惜むべし】
- 【准后】
- 【渝らず】
- 【宿志】

二八 月雪花

- 【煌々】
- 【玲瓏】
- 【赫々】
- 【群陰皆影を伏して】
- 【有象無象】
- 【萬象】
- 【皎潔・無垢・崇美】
- 【慰藉】
- 【詩的情緒】
- 【油然】
- 【人心の胸懷】
- 【懇へられ】
- 【詩歌の感吟】
- 【古往今來】

- 【乾坤】
- 【高樓・茅屋】
- 【廣寒宮裏】
- 【霏々・紛々】
- 【瓊玉を敷く莊嚴】
- 【對照の妙】
- 【造化の巧】
- 【爛漫】
- 【濫用】
- 【棺槨】
- 【華奢】
- 【無影の月】
- 【擔頭の柴には不香の花を手折る】
- 【不夜城】

二九 花火

- 【簞】
- 【裝填】
- 【頻繁】
- 【未練】
- 【官衙】
- 【旋轉】
- 【天蓋】
- 【一抹の烟】
- 【幻滅】

三〇 萩大名

- 【御前】
- 【屈してござる】
- 【何處もと】
- 【心やさかたな】
- 【とよ咲出づる】
- 【急いで戻れ】
- 【ものによそへたら】
- 【折檻】
- 【とつとござりました】
- 【頼うぞ人】
- 【御腰掛けられうとござりまする】
- 【不案内におぢやる】
- 【この中】
- 【鏑おくせい】
- 【心に立てうに】
- 【仰しやれませうには】
- 【いづれもの御腰掛けられては】
- 【何とおぢやる】
- 【かうもおりやろか】
- 【居るぞぢやまでい】
- 【何でもないこと】

三一 川柳點

- 【大晦日】
- 【總仕舞の殿】
- 【御慶】
- 【秀逸】
- 【士君子】

三二 落葉松

- 【さびしくと】
- 【さびしけど】
- 【いよ】

三三 詩文の格調

- 【箴言】
- 【格調】
- 【洞窓】
- 【粗齒】
- 【邪徑】
- 【防腐劑】
- 【一ふしある識見を吐露す】
- 【唱道】
- 【能事畢る】
- 【絶倫の氣風】

三四 鉢 木

- 【一處不住の沙門】
- 【あら笑止や】
- 【ともかくもにて候】
- 【世にある人】

【鶴警】

- 【細布衣陸奥のけふの寒さ】
- 【さん候】
- 【渡り候ぞ】
- 【御入り候】
- 【ひらに】
- 【しかと】
- 【あら曲もなや】
- 【よしなき人】
- 【前世の戒行拙き故なり】
- 【値遇】
- 【後の世の便り】
- 【此の世ならぬ契】
- 【住みうかれたる】
- 【お事】
- 【難行の法の薪】
- 【雪山の薪】
- 【こと木】
- 【緋櫻】
- 【かゝりあれと】
- 【み垣守衛士の焚く火はおためなり】
- 【自然の時の爲】
- 【なれる果】
- 【押領】
- 【御沙汰】
- 【御出で候上は候】

【一領・一えだ】
 【着到】
 【事さふぞ】
 【けうがる法師】
 【かひんしくはなけれども】
 【公方の縁】
 【白金物打つたる絲毛の具足】
 【乗替・中間】
 【物そのものにもあらざる氣色】
 【所存】
 【うてどもあふれども】
 【御詫】
 【なか〜のこと】
 【大床】
 【早打】
 【わるびれたる氣色】
 【神妙】
 【勢づかひ】
 【當參の人々】
 【安堵に取添へたびければ】

三五 世界の四聖

【人生の問題】
 【無上の正覺に徹底せり】
 【巡錫】
 【教化】
 【思索の高遠を欣ぶ】
 【人生の疑問】
 【幽玄なる談理】
 【慘憺たる苦行】
 【安心の道】
 【名目上の優劣】
 【一世の元々】
 【歸命の大道】
 【一世の木鐸】
 【歸依】
 【令聞】
 【風采を想望す】
 【老軀を挺し】
 【高足】
 【遊説】
 【蕩然として地を掃へり】
 【教化の陵夷】
 【狂瀾を既倒に回さんとす】
 【名教】
 【老脚蹉跎】
 【下學して而して上達す】
 【詭辯學派】
 【跋扈】

【時弊】
 【一步も假借せず】
 【侃諤の正義】
 【稀代】
 【風靡】
 【喬木は風に折らる】
 【讒訴】
 【傲岸不遜】
 【膏灌がれたる者】
 【洗禮】
 【傳道の生涯】
 【福音】
 【禍亂の萌芽】
 【胚胎】
 【收斂】
 【侮慢】
 【珍奇の淫祠】
 【舛焉】
 【昂然】
 【磔刑】
 【晏然】
 【景慕】
 【軼軻不遇】
 【經綸を抱く】
 【讒奸】
 【釘殺】
 【衆生】

三六 大死一番

【揚言】
 【煩惱斷滅して】
 【涅槃に達する】
 【我の一念に執着する】
 【無我無念】
 【人生究竟の樂地】
 【後天の氣質】
 【知徳合一説】
 【山上の垂訓】
 【三年傳道の極意を包括す】
 【心の貧しきもの】
 【悲むもの】
 【窄き】
 【道念】
 【踐行】
 【自滿主義】
 【自足主義】
 【步趨】
 【協調】
 【立脚地】
 【遲疑】
 【惰氣満々】
 【小成に安んず】
 【盟主】

【磨礪自彊】
 【進一轉】
 【閑却】
 【葛藤】
 【國際聯盟】
 【按排】
 【闡明】
 【一時の苟安を偷取す】
 【扶植】
 【角逐】
 【眼前を糊塗し去る】
 【痛楚號泣】
 【試煉】
 【擠され】
 【新局面】
 【國歩の艱難】
 【危殆】
 【空々寂々悠々寛々】
 【苟且偷安】
 【潰破】
 【回避】
 【國運の消長興廢の十字街頭】
 【大死一番】
 【趾を擧ぐる勿れ】
 【腕を扼する勿れ】
 【與國】
 【秘機】

三七 おらが春

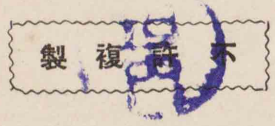
【淨土を願ふ上人】
 【上座に請じて】
 【聖衆】
 【祝の骨頂】
 【寢耳に水】
 【痘の神】
 【水腫のさなか】
 【やをら】
 【かせぐちにて】
 【さんだら法師】
 【意氣揚々】
 【因縁】
 【生憎怵へられぬ】
 【科擧】
 【五言の詩】
 【道士】
 【鐵鉢】
 【四大】
 【定見がない】
 【勿怪の幸】
 【群生を福利し】

三八 寒山拾得

【驕慢を折伏する】
 【營々役々】
 【正鶴】
 【牧民】
 【阿羅漢】
 【三九 生命の冠】
 【濫獲】
 【監禁】
 【敢然として】
 【自暴自棄】
 【賠償金】
 【妄想・臆斷】
 【主觀】
 【客觀】
 【佛陀の愛】
 【抽象的概念】
 【非人格的對象・人格的對象】
 【自力・他力】
 【聖道門】

四〇 知と愛

大正十五年十月十三日印刷
 大正十五年十月十六日發行
 昭和二年二月六日訂正印刷
 昭和二年二月九日訂正發行



國文新編(全五册)

價定	
卷一金七拾六錢	昭和
卷二金七拾六錢	和時
卷三金七拾五錢	四定
卷四金七拾六錢	年度
卷五金七拾五錢	度價
卷一金壹圓貳拾六錢	
卷二金壹圓貳拾六錢	
卷三金壹圓貳拾四錢	
卷四金壹圓貳拾六錢	
卷五金壹圓貳拾四錢	

編者 垣 內 松 三

發行者 株式會社 明 治 書 院

取締役社長 鈴木友三郎

印刷者 株式會社 綾 部 喜 久 二

發行所

東京市神田區錦町一丁目
 (振替東京四九九一番)

株式會社 明 治 書 院

電話神田一四一四番

山口縣立下島高師學校

研田 登久

本 籍 郡 縣

明治二十二年二月廿一日
 明治二十二年三月廿一日
 明治二十二年四月廿一日
 明治二十二年五月廿一日
 明治二十二年六月廿一日
 明治二十二年七月廿一日
 明治二十二年八月廿一日
 明治二十二年九月廿一日
 明治二十二年十月廿一日
 明治二十二年十一月廿一日
 明治二十二年十二月廿一日

姓名	籍貫	年令	職名

第一編 七 三 三 年
 茶 田 登 久

國語

有之
 判紙三枚
 判紙三枚
 夏休宿題
 茶飲
 行
 平字
 福社
 茶飲
 茶飲
 茶飲

78
 12 | 8 2 0
 4 4
 3 2 4

7
 13
 20
 37





広島大学図書
2000302694
